

## 第2 フェーズ：「探る」

### 1. このフェーズでの目標

- ・各発電方法について知識を深める。
- ・「原子力」に関する知識、イメージを「問いの形」で言語化し、マインドマップを用いて可視化する。
- ・マインドマップに基づいて調べ学習を行い、知識を深める。
- ・原子力発電を是とする立場、非とする立場の両方の出前授業を経験し、これまでの調べ学習で得た情報と統合した上で、自分事として原子力及びエネルギー問題に対して意見を形作っていく。

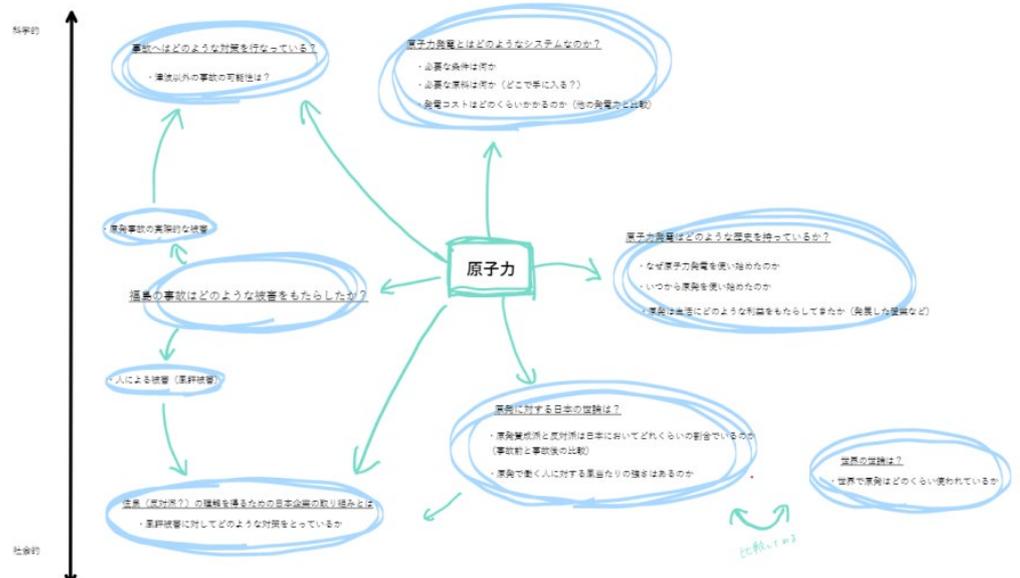
### 2. 具体的な活動

#### ⑤5/27 発電方法の調べ学習

- ・各発電方法について調べ学習を行う。各自で担当する発電方法を分担し、iPad を用いて得られる範囲内で情報を収集し、共有する。
- ・電気を発生させる仕組みを確認する。その過程で、①再生可能エネルギーの多くは独立して存在することが難しく、現状では既存の発電方法（主に火力）と併用する必要があること、②タービンを稼働する仕組みという観点において、火力発電と原子力発電は同じ原理であること、③CO2 排出量の軽減に関して、二律背反の現状があること、の3点に留意するよう指導する。
- ・原子力について「何を知っていて、何を知らないのか」整理させる。

#### ⑦6/10, ⑨6/24, ⑬9/30, ⑭10/7 原子力マインドマップの作成

- ・「原子力」をキーワードに「～とは?」、「～である」の形で思いつくことを書き出し、マインドマップを作成する。その際、①観点を分かりやすく整理する、②問いの主語を明らかにし、誤謬のない問いを作る、③その場で調べることができるものは解決し、それに基づいてさらに発展的な問いを形作る、ことの3点に留意して指導する。
- ・マインドマップを基に、関西原子力懇談会による出前授業の準備を行う。以下、全て生徒が行う。
  - ①講義と質疑応答のバランス、テーマなど、出前授業のデザインを計画する。
  - ②これまでの学びを紹介する資料を作成する。
  - ③質疑応答の想定問答を作成する。
  - ④先方（関西原子力懇談会）に、アポイントメントの連絡、授業内容、当日のタイムスケジュールの作成の相談を行う。



⑮10/21 関西原子力懇談会による出前授業（1回目） 【原子力発電の稼働に是の立場】

・関西原子力懇談会の出前授業に臨む。【資料：便利②】

- ・原子力の歴史と放射線
- ・エネルギーミックスと原子力発電
- ・原子力発電をめぐる状況
- ・福島第一原子力発電所事故の概要

- ・原子力発電所の安全対策（新規制基準）
- ・世界の原子力発電
- ・原子力発電と世論

以上について3名の専門家からの講義受講、質疑応答に臨むことで、今までの調べ学習で得た情報を見直す。また、インターネットや文献上から借りてきたにすぎない知識から、内容を吟味した上で自分事としてエネルギー問題を唱えるための材料へと昇華させる。

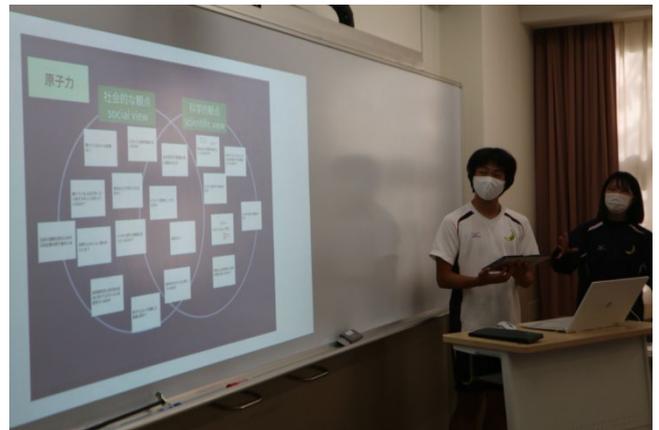


⑯11/18 関西原子力懇談会による出前授業（2回目）

《原子力発電の稼働に是の立場》

・関西原子力懇談会の出前授業に臨む。前回の出前授業後、振り返りの懇談を行い、さらに疑問点として残った内容を精査し、2回目の出前授業を企画する。前回と同様、アポイントメントから内容、タイムスケジュールまで全て生徒が先方と連絡を取り、計画を立てる。【資料：便利③】

- ・フランスで成功したと言われる、原発に対するリスクコミュニケーションが、なぜ日本では十分に行われないのか。
- ・原子力発電所を建てるにあたり、地理的に、フランスにはどのようなメリットがあるか。
- ・燃料となるウランはどの状態から危険なのか
- ・働く人の状況について



以上について2名の専門家からの講義受講、質疑応答に臨むことで、疑問点を解決し、「原子力」を中心に集めた「問い」について、解決したものと未だに解決しないもの、そして更なる問いに発展するものを分類、精査する。

⑰11/25 2学期のまとめ

・これまでの学びを総括する2学期最終課題を説明し、これまでの学びで重要だった点や疑問点について懇談し、共有する。

**課題：**日本が抱えているエネルギー問題について、現在のエネルギー問題を出発点に、10年後の日本のエネルギー問題を展望して論じてください。その際、これまでに学習してきたことから、3つの論点を用いて論理立てて考察をすること。何を3つの論点とするかは自由です。これまでの学びから自分で選択してください。必要に応じて、図表等を用いてください。本文のみの字数を2700字以上3000字以内で提出すること。

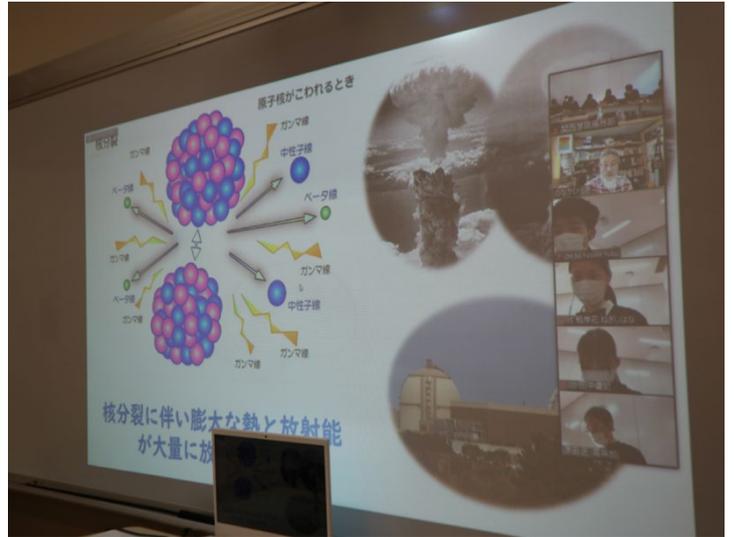
※⑨6/24, ⑩11/18 2年生必修選択学習報告会の参加

- ・2年生必修選択学習報告会への参加を通して、それぞれの期間までで成果発表することのできる学びについてオンライン（zoomを使用）で発表した。お互いの学習内容を知る機会と同時に、プレゼンテーション能力も知る機会となった。各授業から発表者を1名選出し、その他生徒は自教室で全ての発表の評価を行った。評価の内容を全て全授業で共有する。

⑩1/13 野中先生による出前授業 《原子力発電の稼働に非の立場》

- ・冬休みに野中先生による出前授業の準備を行う。以下、全て生徒が行う。【資料：便利④】

- ①講義と質疑応答のバランス、テーマなど、出前授業のデザインを計画する。
- ②これまでの学びを紹介する資料を作成する。
- ③質疑応答の想定問答を作成する。
- ④先方（野中先生）に、アポイントメントの連絡、授業内容、当日のタイムスケジュールの作成の相談を行う。



- ・「野中先生の活動の今まで」と「野中先生の活動のこれから」の2つのテーマを設定し、以下の内容について講義受講、質疑応答を行う。

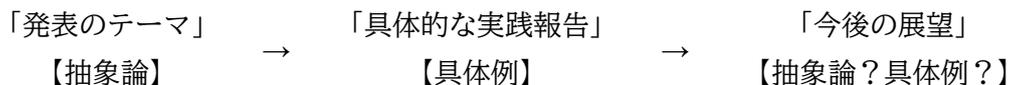
- ①原子力発電の反対活動の内容と、原子力発電所の付近住人の声について 《今まで》

- ②原子力発電を使わないエネルギーミックス、原子力に無関心及び無知な世代への伝え方 《これから》

- ・ここまでの学びを用いて、原子力発電環境整備機構（NUMO）が主催する「第3回私たちの未来のための提言コンテスト どうする？高レベル放射性廃棄物」に応募する。【資料：便利⑤】

⑫2/17, ⑬2/24 最終成果発表会への参加及び振り返り

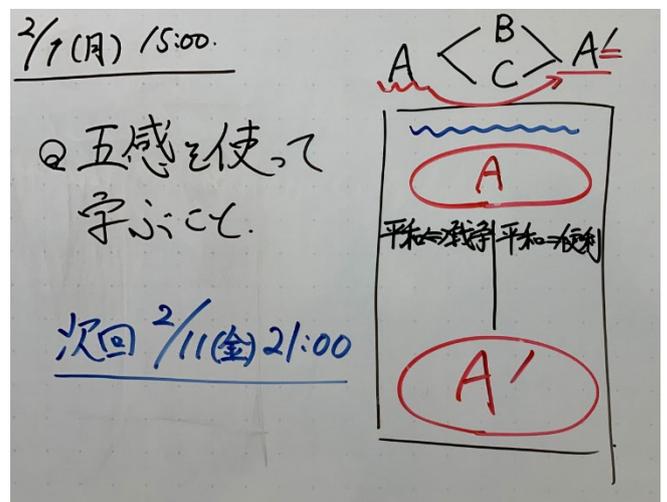
- ・休校期間中に最終成果発表会の準備を行う（zoomによるオンラインミーティング）。発表の骨子を以下の3段階に整理し、それぞれが抽象と具体のどちらに当たるのかを把握する。



- ・最終成果発表会では、1年間の学びを用いた「平和構築の提言」がテーマとなった。これまでのオンラインによる発表会ではなく、対面での発表であった。以下2点を重点的に指導し、発表に臨む。

- ①ポスターを用いたプレゼンテーションであることを踏まえ、効果的なポスターを作成する。
- ②原稿から目を離す時間を作り、身振り手振り、間と抑揚のある話し方を心がける。

発表者以外の生徒が相互評価を行い、評価の内容を全て全授業で共有する。



・最終成果発表会の振り返りを行う。他クラスの発表資料を基に、発表者と質問者に分かれて質疑応答のコミュニケーションを行う。その中で、以下の2点を指導する。

- ①問題提起、解決策の提案、結論と展望に一貫性があるかを見定める。
- ②提案する解決策のデメリットに対して、想定問答を用意する。

### 3. 活動の評価方法

・学びの記録を提出させ、評価した。学びの記録ルーブリック

	知識/技術	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエイティブな広がりがある。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

・2学期最終課題を提出させ、評価した。「10年後のエネルギー問題を展望する」

【 11/21 2学期エネルギー問題 課題 】									
日本が抱えているエネルギー問題について、現在のエネルギー問題を出発点に、10年後の日本のエネルギー問題を展望して論じてください。その際、これまでに学習してきたことから、3つの論点を用いて論理立てて考察をすること。何を3つの論点とするかは自由です。これまでの学びから自分で選択してください。必要に応じて、図表等を用いてください。本文のみの字数を2700字以上3000字以内で提出すること。									
評価	日本の問題について	論点①について	論点②について	論点③について	全体を1つにまとめる	図表について	言語技術	提出について	字数について
	日本が現在抱えているエネルギー問題について、自分の考察の論点に合わせて必要な情報を提示する。	10年後のエネルギー問題の展望に必要な論点を設定する。十分に情報を提示し、自らが考える展望に沿って論点の考察を展開する。			3つの論点の考察を全て関連させて、自らが考える10年後の展望を論じる。	図表を効果的に用いる。内容だけでなく、読みやすいレイアウトも考える。	豊富で正確な言葉の活用を目指す。段落構成を効果的に用いて、読みやすく文章を構成する。	期限、形式を守って提出する。	字数を守る。
A	日本が現在抱えている問題を自分の論点に合わせて十分に説明することができている。	論点①について、十分に客観的な情報を示し、且つ、それに対して自らの考察を論理立てて展開している。	論点②について、十分に客観的な情報を示し、且つ、それに対して自らの考察を論理立てて展開している。	論点③について、十分に客観的な情報を示し、且つ、それに対して自らの考察を論理立てて展開している。	3つの論点を用いて、自分の考える10年後の日本の展望を1つの文章として説明することができている。	図表を効果的に用いることができた。	自分の考えが効果的に伝わるように、段落を明確にして文章を構成することができた。語彙を豊かに印象的で誤解のない文章を書いている。	期限、形式を守って提出している。	2700～3000字以内におさまっている。
B	日本が現在抱えている問題を詳細に説明しているが、自分の論点に見合う内容となっていない。	論点①について、十分に客観的な情報を示しているが、それに対する自らの考察が不足している、もしくは漠然としている。	論点②について、十分に客観的な情報を示しているが、それに対する自らの考察が不足している、もしくは漠然としている。	論点③について、十分に客観的な情報を示しているが、それに対する自らの考察が不足している、もしくは漠然としている。	3つの論点について箇条書きに述べたにすぎず、全体で1つの文章として成立させることができていない。	図表を用いるも、文章との関連性を持たせることができなかった。	段落を設けてはいるが、文章の構成に効果的に働いていない。	/	/
	日本が現在抱えている問題を自分の論点に合わせて記述しているが、情報量が不足している。	論点①について、客観的な情報が不足しているが、それに対して自らの考察は論理立てて展開している。	論点②について、客観的な情報が不足しているが、それに対して自らの考察は論理立てて展開している。	論点③について、客観的な情報が不足しているが、それに対して自らの考察は論理立てて展開している。			言葉を正確に使うことができず、曖昧であったり、誤解を含む文章になっている。		
C	日本が現在抱えている問題の説明が不足しており、且つ、自分の論点にも見合っていない。	論点①について、客観的な情報が不足し、且つ、それに対する自らの考察も不足、もしくは漠然としている。	論点②について、客観的な情報が不足し、且つ、それに対する自らの考察も不足、もしくは漠然としている。	論点④について、客観的な情報が不足し、且つ、それに対する自らの考察も不足、もしくは漠然としている。	3つの論点を用いることができなかった。	図表を一切用いることができなかった。	段落が一切ない。もしくは、著しく誤字脱字が見られる。	期限、もしくは形式を守って提出できなかった。	2700～3000字におさまっていない。

#### 4. 検証

- ・各発電方法について知識を深める。  
⇒小中学校の理科、高校の物理化学で学習した知識との統合を図りつつ、やはり理科の専門科目ではないため、最終的な学びの焦点を自分達の社会生活に矯正する必要があった。当初として目標に掲げていた、①再生可能エネルギーと火力発電の関係、②火力発電と原子力発電の類似点、③CO<sub>2</sub>排出量削減目標との二律背反、の3点については大変スムーズに理解が進んだ。特に、CO<sub>2</sub>排出量削減目標と単純に寄り添うことのできない問題点については、生徒同士の懇談の中で指摘が上がる事ができた。
- ・「原子力」に関する知識、イメージを「問いの形」で言語化し、マインドマップを用いて可視化する。  
⇒単純な問いを作成し、列挙するところまでは非常にテンポが良かったが、観点を見出す段階でかなり長時間を要した。観点が中々まとまらない、または、自分が見出そうとしている観点が他人に伝わらない時に、自分達の問いの曖昧性、特に主語（主題）を曖昧にしたまま情報を共有することが、お互いの認識に誤謬を生んでいることに気がつく事ができた。これは大変価値のある学びであった。また、観点を見出す際に「社会的」や「科学的」といった抽象概念を見出そうとする発言も見られ、抽象と具体を使って建設的な説明をしようとする試みも散見された。
- ・マインドマップに基づいて調べ学習を行い、知識を深める。  
⇒感染対策の影響で、自席で iPad を用いた調べ学習を強いられるため、インターネットを用いた調べ学習が主となった。そこで、これまでの調べ学習よりも、出典に神経質になるよう指摘することを心がけた。また、答えを見つけて終結とすべき問いなのか、その答えが新たな問いに進展するものなのか、弁別しながら調べ学習を行うことを奨励した。
- ・是非両立場の出前授業を経験し、自分事として原子力及びエネルギー問題を扱う。  
⇒現在稼働している原子力発電所に対して、実際に発電所勤務の経験がある方、付近住民とのコミュニケーションを担当する方など、「稼働する現状」に直面する人々と意見を交わし、一方で、現在稼働している原子力発電所に対して、実際に反対運動に参加している方、いわゆる「稼働する現状」に対峙する人と意見を交わす事ができた。そのため、「原子力」をキーワードに種々の問題を捉える際に、生徒の中に常に両岸の見解を自問自答しながら思考する姿勢が生まれたことが最大の収穫であった。この姿勢は、NUMO が主催するコンテストの応募作品にも顕著に表れ、7名中1名が優秀作品、2名が入選作品に選出される結果に繋がった。【資料：便利⑥】また、最終成果発表会における質疑応答にも同様の姿勢が見られ、WWL 運営指導委員の先生方からのコメントでも、極めて好感触であった。【資料：便利⑦】

#### 5. 今後改善すべき点について

議論にしても、レポートにしても、結局探究する姿勢の優劣なのか、基礎学力としての文章表現力の優劣なのか、学力として何を評価しているのか、曖昧になってしまう点が否めない。議論に参加する意欲の高さ、創造的な発想力の高さ等が、持ち合わせた言語能力の低さや、普段の学習姿勢の粗雑さにより、阻害される部分が多いように感じる。また、ルーブリックを用いた評価についても、結局そのルーブリックを理解する力こそ、差があるため、所謂学力の差がより顕著に表れている感触すら感じてしまう。探究的な学習こそ、基礎学力や普段の学習習慣が強く反映されることを念頭に、その他様々な教科と横断的な連携を図らなければ、成績の評価に関しては、より格差を広げてしまう危険性を感じる。

関西学院高等部との交流会スケジュール(案)	
8月9日(月)	
7:00	
8:00	
9:00	鎮西学院着 会議室にて自己紹介等
9:20	タクシーにてホテル発。本校の生徒昇降口付近に着。Hi-Y部がお迎えし、会議室に案内。簡単なセレモニー(自己紹介等)を実施。時間になれば講堂へ移動。
10:00	平和祈念式典 参加 礼拝 & 献花・献水式
11:00	講堂後方の座席に着席。礼拝後は、本部棟前に移動。
11:15	
11:30	学院平和通り見学
12:00	式典後、平和通り(平和の鐘・被爆校友名簿碑・平和祈念碑・ピースチャペル・その周辺)の見学。
12:45	昼食
13:00	会議室にて昼食。本校食堂から各自で運ぶ。メニューはトルコライスを予定。
13:30	平和祈念ミュージアム見学
14:00	平和ミュージアムを見学。鈴木館長のレクチャー有。
14:30	交流会
15:00	事前に頂いた質問に対し、本校生が解答。(時間の関係でカット有)
15:50	平和大使の講演 及び、質疑応答
16:00	前平和大使 大澤新之介(3年) 現平和大使 富崎莉早 の講演(40分程度) その後、質疑応答。交流会を実施する可能性もあり。
16:30	長崎空港へ移動
17:00	本校のマイクロバスにて空港まで。本校生も同乗し、空港までお見送り。
17:25	長崎空港 発
18:00	

♡ 1人の命の重み

◎ 長崎原爆資料館

展示一つ一つが**遺品**



15

3. 私たちに出来ること

兵庫県 → 原爆 ✕ □

↓ □ 「阪神・淡路大震

(例) 災」

兵庫県

地震の経験



長崎県

原爆の経験



## ニュース その2

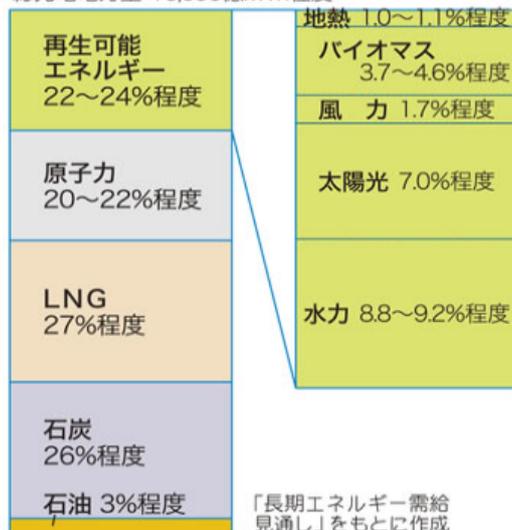
### 2030年度における電源構成（エネルギーミックス）が決定

経済産業省は平成27年7月16日、エネルギー基本計画の方針に基づき、「長期エネルギー需給見通し」を決定しました。その中で、2030年度における電源構成のうち、原子力発電については、右図のとおり「20%～22%程度」とされました。

電力の需給構造については、徹底した省エネルギーの推進、再生可能エネルギーの最大限の導入、火力発電の効率化等を進めつつ、原子力発電については、安全性の確保を大前提に、エネルギー自給率の改善、電力コストの低減および欧米に遜色ない温室効果ガス削減の設定といった政策目標を同時に達成する中で、可能な限り低減することが基本方針とされています。

#### 2030年度における電源構成

総発電電力量 10,650億kWh程度



関西電力ホームページより 3月14日確認。

([https://www.kepcoco.jp/corporate/profile/community/wakasa/ew/k\\_topics/42k\\_topics.html](https://www.kepcoco.jp/corporate/profile/community/wakasa/ew/k_topics/42k_topics.html))

2021年10月21日

関西学院高等部 様

10/21 ハンズオンラーニング 授業スケジュール

○13時20分～

・オープニング 原田先生

○13時23分～13時33分

・発表（10分） 関西学院高等部

○13時33分～

・原子力の歴史と放射線（22分） 関原 森口

○13時55分～

・エネルギーミックスと原子力発電（15分） 関西電力 久家

○14時10分～

（休憩10分間）

○14時20分～

・原子力発電をめぐる状況（20分） 森口

- － 福島第一原子力発電所事故の概要
- － 原子力発電所の安全対策(新規制基準)
- － 世界の原子力発電
- － 原子力発電と世論

○14時40分～

・質疑（20分）

○15時00分

・終了

<出席者>

○ 関西電力送配電株式会社 阪神配電営業所	久家 大輔
○ 関西原子力懇談会 常務理事・事務局長	大神 隆裕
同 副部長	森口 由香

以上

【資料：便利③】関西原子力懇談会による出前授業（1回目）のタイムスケジュール（生徒のメールからの抜粋）

関西原子力懇談会 大神隆裕様 森口由香様

お世話になっております。関西学院高等部ハンズオンラーニングの\*\*と\*\*です。

11月18日に、改めて出前授業をしていただけることに、心から感謝申し上げます。ただいま、ハンズオンでも、質疑応答に向けて準備を行なっております。先日の授業を受けて、私たちの間で解決しなかった疑問、また新たに上がった疑問を、整理し、現在大きく4つの観点にまとめております。

・フランスで成功したと言われる、原発に対するリスクコミュニケーションが、なぜ日本では十分に行われないのか。

→日本では、誰が、どのようにリスクコミュニケーションを行っているのかが、まだわかりません。フランスのような情報共有ができていない、という日本の現状には、どういった原因があるのかを知りたく思います。

・原子力発電所を建てるにあたり、地理的に、フランスにはどのようなメリットがあるか。

→フランスと日本とを比較して、地理的にどのような点が原発におけるメリット、デメリットとなるのかを知りたく思います。日本における発電所が太平洋側よりも日本海側に集中していることに理由があるのかもあわせてお答えいただきたいです。

・燃料となるウランはどの状態から危険なのか

→ウランを含め、放射能を持つもの全てが危険なものではない、ということを実日の授業で学びました。そこで、原発を稼働させる際に使用する燃料の製造過程で、どの段階から危険な物質となるのかを知りたく思います。

・働く人の状況について

→周辺住民への安全対策については詳しくお話しいただき、理解できました。しかし、原発で働く人への放射線による健康的な被害は一切ないのか、という点が気になります。また、燃料の採掘や製造に関わり、長期的に被ばくする人たちにも、影響はないのか、お話しいただきたいです。

この4点の疑問について、それぞれ10分程度に時間を区切って、お答えいただきたいと考えております。お答えいただいた内容に対しても、私たちから、さらに積極的に質問させていただきたく思っております。

再び直接お話を伺うことができる機会に感謝し、今後も準備を進めて参ります。非常に短い時間にはなりますが、今回も多くを吸収し、学ぶ機会とさせていただきます。何卒宜しくお願い致します。

【資料：便利④】野中先生出前授業のタイムスケジュール

1/13 出前授業

時間	動き	話す人
13:20~13:25	はじめの挨拶	ファシリテーター
13:25~13:45	野中先生の授業 テーマ 【今まで(過去)】 ↓お話ししていただきたいこと ・原子力発電の反対活動ではどのようなことをされているのか ・原子力発電所が建っている現地の方々の声	野中先生
13:45~14:05	生徒からの質問タイム	野中先生&生徒全員
14:05~14:15	休憩	
14:15~14:35	野中先生の授業 テーマ 【これから(将来)】 ↓お話ししていただきたいこと ・地球温暖化が進む中、日本は原子力発電を使わずに、 どのようなエネルギーで電力を支えるのか ・原子力発電の問題について知らない・無関心な世代に何をどう伝えていきたいか	野中先生
14:35~14:55	生徒からの質問タイム	野中先生&生徒全員
14:55~15:00	終わりの挨拶	ファシリテーター

■ あなた達の住む街に、あるいは近くの街に「高レベル放射性廃棄物の最終処分場」がやって来る。

■ もし、突然この話を聞いたなら、あなたはどのように思いますか？



### 第 3 回

募集のご案内

私たちの未来のための提言コンテスト

# どうする？ 高レベル放射性廃棄物

テーマ

どうしたら、高レベル放射性廃棄物問題を  
多くの人たちが自分ごととして考えるようになるか？  
あなた(たち)は何をしますか？

■ 原子力発電所の使用済燃料をリサイクルした後に残る高レベル放射性廃棄物は、放射能が十分低くなるまでに長い期間を要します。このため、私たちの生活環境や自然に影響が及ばないように、廃棄物を地下深くの安定した岩盤に閉じ込めるため、地層処分を行うこととしています。これを最終処分と言います。

■ 国と処分事業の実施主体である NUMO (ニューモ) は、今まさに日本全国で地層処分の現状や必要性について理解を求める活動を行っています。

■ 高レベル放射性廃棄物の最終処分は、現代に生きる私たちの責任で進めていかなければなりません。

■ 決して他人ごとにするのではなく、一人ひとりに自分ごととして捉えていただき、NUMO はみなさんと一緒に考えながらこの問題を解決したいと思っています。

■ 主催 原子力発電環境整備機構 (NUMO)

お問合せ・応募受付：原子力発電環境整備機構 (NUMO) 地域交流部 総括グループ

〒108-0014 東京都港区芝 4-1-23 三田 NN ビル 2 階

▶ 電話：03-6371-4003 (平日 10:00 ~ 17:00) ▶ メール：numocontest@numo.or.jp

## 募集要項

### 募集内容

高レベル放射性廃棄物の最終処分を進めるにあたっては、事業が長期に及ぶことから、将来的に世論形成の中核を成す次世代層に同問題の重要性を認識・理解してもらうとともに、日本国民全体がこの問題に対してどのように取り組んでいくべきか、次世代層にも積極的に考えてもらうことが重要です。本コンテストを通して、次世代層が自分ごととしてメッセージを発信し、広く社会全体の関心喚起、理解促進につなげていくために必要な課題および方策の提言を募集します。

### 募集枠

中学生・高校生・高専3年生までの個人・グループ  
高専4年生以上・大学生・大学院生の個人・グループ  
(グループとは研究室・サークルの他、任意のグループも可)

### 締切

2022年 **1月20日 木** (当日消印有効)



### 応募方法

- ① **文字数** 1,200～2,000文字程度
- ② **形式** 400字詰め原稿用紙またはWord形式A4サイズ(1行20字詰め30行以内)  
手書・パソコン作成のいずれも可  
※具体的な制作物(ポスター等)等の添付も可
- ③ **エントリーシート** 本チラシのエントリーシートを作品に添付
- ④ **送付方法** 郵送、メール送信のいずれも可

### スケジュール

2022年 1月20日(木) 締切 ※当日消印有効、持込みおよびメール送信は17:00まで受付  
1月下旬～ 外部の審査員による審査会  
2月中旬 結果発表、表彰式(会場:東京で実施予定)

### 注意事項

- 未発表作品であること(過去1年以内に発表や投稿したものは除く)
- 文献を引用する場合は該当部分にかぎ括弧をつけ、最終ページに出典を記載すること
- 応募者の個人情報、入賞作品の選考、入賞者への連絡のためにのみ使用し、主催者および本コンテストの事務局が責任をもって管理します。
- 応募者本人または保護者の許可なく第三者に個人情報を開示することはありません。ただし、法律や法的拘束力のある命令等に基づいて開示が要求された場合については、その要求に応じることがあります。
- 入賞者の氏名・学校名・学年および作品は、原子力発電環境整備機構ホームページ等にて公表させていただきます。あらかじめご了承ください。
- 著作物の著作権(複製権、翻訳・翻案権、公衆送信権等を含む)は、応募を受け付けた時点において、主催者である原子力発電環境整備機構に譲渡されるものといたします。
- 応募作品は返却いたしませんのであらかじめご了承ください。

## 賞・副賞

### 入賞

外部の審査員による審査を経て、優れた提言を選出します。

### 副賞

表彰状、表彰式・関連施設研修会へのご案内(予定)



## 審査基準

主な審査基準例は以下のとおりです。

- 自分ごととして捉えられた内容であること
  - 具体的かつ現実的（実現可能性が高いもの）であること
  - 実施による効果が大きいと考えられるもの
  - 十分に現実の課題を分析したもの
- ※2022年2月中旬に表彰式（会場：東京）を予定しています。

## 審査員

外部審査員（調整中）

## 調べてみよう

### ① 基礎情報を調べる



▲ホームページ

### ② 動画を試みる



Channel NUMO

◀NUMOの若手職員や専門家による解説動画  
-みなさんとともに考えたい地層処分-



### ③ 学校で教えてもらう



▲NUMO職員による出前授業も行っています。小学校から大学まで幅広く対応!!



### ④ 学生のとりくみを試みる



▲学生クリエイターによる映像作品や広告企画、大学生記者による見学レポートなど、次世代との協働プロジェクトを紹介しています。



### 全国交流会※

2019年度



2020年度



▲2019年度 表彰式の様子

▲オンライン開催

※事業委託先（日本原子力文化財団）のホームページ

### さらに学習したい

皆さまの地層処分  
知りたい! 学びたい!  
を応援します

✓ 選択型 学習支援のご案内



詳しくは、(一財)日本原子力文化財団へ

▲地層処分について「より深く知りたい」地域団体等の学習活動に対する「学習支援事業」を行っています。



【中学・高校部門】優秀賞  
関西学院高等学校 2年 福井 裕介 さん  
「核ST/問題とNIMBYからYIOBYにアップデートするた  
め」

「社会情勢と地層処分問題の現実化

カーボンフリーを目指す時代の流れの中、世界各国で化石燃料を利用する火力発電の代替手段として、再生可能エネルギーの最大限の導入と並行して、原子力発電の役割が再度見直されている。我が国のエネルギー政策においても、安全性、安定供給、経済効率、環境適合といった複合的な要素を同時達成するために、原子力発電を含めたバランスのとれた電源構成が進むとされている。このような社会情勢にある今こそ、エネルギー政策において重要な位置を占める原子力発電、そしてその核のゴミとされる高レベル放射性廃棄物の処分場について改めて国民一人一人が自分たちの問題としてとらえるよい機会ではないだろうか。そもそもこの処分場に関しては NIMBY という言葉に示されるようにその必要性は誰もが認めるが、それが自分の居住地であっては困るという考えが必然的に存在してきた。自分の住む街が美しく安心して住める場所であることを願うのは当然であり、受け入れることよって発展が見込まれないのであれば、どの自治体からも快諾を得られないことは周知の事実である。また長期間に渡る安全性の管理が必要な問題だけに、幅広い世代の人たちに問題の本質を理解してもらおう必要性がある。このような問題の特性も鑑みたくえで、決して先延ばしすることなく世

代を超えて自分たちの問題として取り組んでいくために地球環境問題としての教育、処分場受け入れ地域の発展計画、情報の透明性の観点から以下のような提言をする。

2. 具体的な三つの施策

2-1 専門科目の設定

まず何世代にも亘って地層処分という重要課題を継承していくための対策として教育現場において地球環境専門科目の設定が考えられる。高レベル放射性廃棄物の処分において地層処分されるガラス固化体が安全なレベルに達するまでに10万年という途方もない長い年月が必要とされることを考慮すると、何世代にもわたって安全性の管理を維持する必要がある。そのため知識の習得がこの国のエネルギーを使って生活する国民一人一人に求められるのだ。そこで原発の最終段階である地層処分についてのみ断片的に学習するのではなく、地球環境問題、エネルギー問題にまで掘り下げて学習する機会が継続的に与えられれば、地球に暮らす自分たちの問題として早い段階から当事者意識を持って取り組む姿勢が育まれるのではないだろうか。

2-2 国民参加によるニュータウン計画

第二に、処分場受け入れを検討する地域の発展を推進する「環境推進ニュータウン計画」の実施である。地域の活性化につなげるためにその地域の住民の意向を十分取り入れた上で、国民全体に新しい街作りについて幅広くアイデアを募集、議論するのだ。その議論が、処分場は必要不可欠で、自分の居住地ではなく、これから新しく計画される街になっ

たという認識につながるのではないだろうか。もちろん計画にとどまることなくエネルギーを使って生活するひとりとして長期的に計画を注視していく姿勢が求められる。一つの例として大規模な雇用を生み出す環境施設の誘致が考えられるだろう。実際にスウェーデンで地層処分を受け入れた自治体にとってハイテク技術産業の集まる工業地帯になるという計画が受け入れの原動力となったという事例が参考になるのではないだろうか。

### 2.3. プロジェクトの透明化

第三に、より多くの人に当事者意識を持たせるために、処分場建設立地の過程の情報公開の透明性が求められるだろう。ここでいわゆる原子力ムラと呼ばれる原発業界の産・官・学の特定の関係者によって構成された特殊な集団と市民との間に生じるコミュニケーションギャップの存在は常に意識されなければならない。定期的な住民との説明を含めた意見交換の場の設定はもちろんのこと、国民との間にも広く情報提供を行うなど双方の信頼関係の構築は不可欠である。

### 3. 私たちの大切な国土の問題として

以上、高レベル放射性廃棄物を自分のこととして捉えていくための提言として、地球環境科目の設定、環境推進ニュータウン計画、処分場建設に関する情報公開の透明性という三点から述べてきた。処分場の問題を断片的に捉えるのではなく、地球環境問題の一環として、更には自分の利用したエネルギーからでた廃棄物の処分の問題という責任から一人一人がこの問題に向き合っていく姿勢を育んでいくことなく

はならない。時代の風潮はまさにカーボンニュートラルへむけて動き出している。今ではもうすでに、この地層処分をNIMBYではなくYIMBY (Yes In My Back Yard) ならぬYIOBY (Yes In Our Back Yard) つまり私たちの大切な国土の問題として捉えていくフェーズに入っている。一人一人の環境問題への理解、環境推進ニュータウン計画への関心の高まり、そのために必要な情報の公開、透明性、が大きな解決の鍵となることに期待したい。



## 平和構築の方法

ハンズオンラーニング

"五感"により、自分ごととして学ぶ



### 平和の対義語は「無関心」

問題に対して自分ごととしての関心を持つことが  
平和構築において必ず必要となる



### "五感"を使った学び

#### 戦争≠平和

##### 千羽鶴を折る

一人一人が手を動かす時間が、平和と向き合う  
時間となり、平和への願いが強くなる。



##### 街のサイレン

原爆が投下された瞬間の時刻に、  
長崎の町ではサイレンがなる。実際にその場で  
聞くことにより、現実感が増す。



##### 原爆資料館の資料

被爆当時のものを実際に目にしたり、  
写真がカラー化されたりすることで、  
恐ろしさを改めて実感する。



##### 街から想像される匂い

被爆当時の面影を残す、ものや建物から  
木材が焦げ、人が燃えるような匂いまでもを  
想像することができる。



##### 戦時中の食事

食は、当時の暮らしを色濃く伝える文化である。  
戦時中と同じ食事を体感し、他人へも発信したい。



#### 便利≡平和

##### 放射線測定の実験

放射線の強さを自分の手で調べることで  
放射線が認識できるものとなる。

##### 原発の二面性の確認

全く異なる視点の意見に戸惑いながらも  
思考して双方の意見を聞くことで  
原発の二面性を再確認する。

##### マインドマップで情報整理

授業を受ける前にまず、  
自分達で情報を集め、疑問点を整理することで、  
より学びが深くなる。

##### 潮の香り

福島に行ったら、研ぎ澄ませたい感覚。  
同じ香りにより何度も  
学んだ記憶を思い起こさせる。

##### 事故後の福島産の食材

単純に実際の放射線による被害では  
片付けられない被害があった。  
それらにまだ向き合っていない

自分ごととしての関心を持ち続ける + 五感を通して様々な人と共に学ぶ

科目	必修選択グローバルスタディ	学年	2	単位	2	受講人数 24 名
活動の目標	<p>1. 世界を知る・世界の中の自己を知る</p> <p>SDGs を考えるツールとして用いながら、世界の諸問題について多角的かつ構造的に理解する。また、世界の諸問題に自分がどのように関わりがあるのかについて、生徒が語ることができる。</p> <p>2. 自らの問題関心に気づく・問題を自分事にする</p> <p>生徒が気候変動に関わる問題の中から、各々の関心に基づいてテーマを設定し、探究活動の過程の中で現場との直接のつながりを見出しながら問題を自分事にする。</p> <p>3. 直接の出会いの中から学ぶ・違いの中から学ぶ</p> <p>気候変動に関わる NGO スタッフ・国内外で活動する企業や個人・様々な現場で活動する海外の方々・インドネシアの高校生からの学びや交流・インタビューを通して、問題について現場の声を通して学び、価値観を共有・比較し、解決策を模索する。</p> <p>4. 自らの意見を表現する・議論する</p> <p>学びの中で得た自らの意見を、十分な情報と内容の整理を経た上で他者に説得力を持った的確に伝え、さらに問題の本質を問うような効果的な議論を展開できる。</p>					
教材	<p>学びの記録・iPad (Classi / ロイロノート)・iPad カメラ・マイク・マナボード・タイマー・ホワイトボードペン・付箋・模造紙</p>					
留意点	<p>1. 生徒が受け身ではなく自分で考え、かつそれを人に伝達したり議論したりできるような雰囲気づくりをし、そのような機会を意識的に設ける。</p> <p>2. 世界の問題について、SDGs を通して多角的かつ構造的に理解する。</p> <p>3. 問題を生徒が自分事化できるように、テーマの設定については各自の関心に基づいて設定できるように留意する。</p> <p>4. 各自のテーマを大切にしつつも、最終的には大きなテーマ（「気候変動」）についてともに議論ができるようにする。</p> <p>5. フィールドスタディやディスカッションなどが有意義なものとなるよう、関心の方向づけや内容の企画、準備段階で必要なサポートをする。</p>					

<スケジュール> 授業は 45 分(短縮 40 分)／毎週木曜日の 5,6 時間目 13:20-15:00 (短縮時間:13:00-14:30)

★は外部からお招きした講師／インタビュー先／交流したゲスト等

<p><u>第1フェーズ：知る</u></p> <p>SDGs ・SDGs をめぐる世界の状況・立場の異なる人の価値観・自分の理想的社会イメージ・仲間の考えなどを知る</p> <p>【問題の理解】</p>	① 4/15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ガイダンス：WWL の学びの特性や目的/「学びの記録」の記入方法</li> <li>・担当教員や受講メンバーの紹介</li> </ul>
	② 4/22	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「最悪の未来」を考えるワーク</li> <li>・「豊かさ」を考えるワーク（個人のみ）</li> </ul>
	③ 5/6	<ul style="list-style-type: none"> <li>「豊かさ」条件をグループで順位付け</li> </ul>
	④ 5/13	<ul style="list-style-type: none"> <li>★ゲスト：スマセレ会長理事、田中喜陽さん</li> <li>・SDGs の概要の理解（講義）</li> <li>・SDGs カードゲーム（経済・社会・環境のバランスを体験）</li> </ul>
<p><u>第2フェーズ：探る</u></p> <p>気候変動問題の原因、構造、広がり・問題と自分の生活との関わり・自分の関心のあるテーマや問い・問題を生む根本的背景を探る</p>	⑤ 5/27	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「豊かさ」定義の分析・整理</li> <li>・（生徒から生まれた問いを4つピックアップし）発問ごとにグループ分けと問いの調査</li> </ul>
	⑥ 6/3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループごとに各自の調査のまとめと発表準備</li> <li>・グループごとに発表</li> </ul>

<b>【情報の収集】</b> <b>【課題の設定】</b> <b>【問題の整理・分析】</b>	⑦ 6/10	各自調査してきたオンラインに関する自分の関心テーマについてグループ内で発表 →グループ内で質疑や提案をし合う
	⑧ 6/17	・気候変動ウェビング（模造紙に書き出しながら、問題同士のつながりや関係性を視覚的に理解する） ・映画「幸せの経済学」を鑑賞し、支援や豊かさについて再度考察
	⑨ 6/24	・「クロカリ」：（2年必修選択学習報告会） ・学びの記録フィードバックとキーワードについての補足説明
	⑩ 7/1	★ゲスト：FoE Japan(Friend of the Earth Japan)の高橋英恵さん ・「気候正義」や気候変動、現場の状況について知る（ワークと講義） ・問題を自分の中でどう感じたかについて丁寧に考察する
<b>第3フェーズ：</b> <u>深める・出会う</u> 自らの問いを各自でさらに深く探り、情報を収集・整理し、より現場に迫る調査を進める。コミュニケーションへの主体的参加により効果的に現場の声を聴き、問題を体験的に理解する <b>【テーマの探求】</b> <b>【情報の収集・整理】</b> <b>【主体的コミュニケーション】</b> <b>【問題の体験的理解】</b>  〈海外現場インタビュー〉 各国の現場で活躍する方々へのインタビューを通して、英語インタビューの手法や英語コミュニケーションの技術を学ぶ  〈国内フィールドスタディ〉 各自のテーマに合わせて選んだフィールドスタディ先を訪問し、仮説の検証をする	⑪ 9/9	・夏休みの各自調査内容について発表（1人3分+2分質疑応答、2つのゼミに分かれて11人ずつ発表、優秀者発表）
	⑫ 9/16	・自分の発表動画の見直しと反省、グループでの共有 ・フィールドスタディについて大切なことと注意点の確認 ・教員の海外リソース（可能なインタビュー先）の紹介
	⑬ 9/30	・自分の設定したテーマに関する先行研究の調査（関西学院大学図書館）と文献探し
	⑭ 10/7	SDGs Workshop（各国の現場で活躍する方々インタビュー）に向けたグループ分け、役割決め、質問等の準備等
	⑮ 10/21	★SDGs Workshop① ゲスト Hamish Lee（ニュージーランド） Sean White（レバノン） Dee Commins（オーストラリア）
	⑯ 11/11	★SDGs Workshop② ゲスト Erika Lind（オーストラリア） Hannah Griffith（スウェーデン）
	⑰ 11/18	・「クロカリ」（2年必修選択報告会） ・中間報告の動画をグループ内で共有、コメント
	⑱ 11/25	・3学期 Workshop with Indonesia の企画（全体のテーマ・構成・グループ内役割決について生徒同士で設定） ・フィールドスタディに向けた連絡方法や内容の確認 <b>★訪問・インタビュー先</b> 12/7(火) 14:00 Harch オンライン 12/12(日) 9:45 ARTIC オンライン 12/13(月) 14:00 ecoeat 阪急塚口 直接訪問 12/14(火) 13:00 JEEF オンライン 12/15(水) 13:00 世界銀行 オンライン 12/16(木) 16:00 CWS Japan オンライン 12/17(金) 13:00 ウェザーマップ オンライン※有料 14:00 姫路市役所 直接訪問 12/21(火) 18:00 JTB 12/21(火) 14:00 幸せ経済社会研究所 オンライン

		14:00 ヴィーナ・エナジー オンライン 12/22(水)14:00 日本経済新聞社 オンライン 1/6(木) 9:00 日本総合研究所 村上芽氏 オンライン
<b>第4フェーズ：</b> <u>違いを知る、共に考える</u> 異なる文化・社会に生きる同年代のインドネシア高校生との交流を通して、違いや共通点、共有できる課題などについて知り合い、ディスカッションを通してグローバル課題（気候変動）を共に考え、解決への糸口を探る <b>【異なる立場への理解】</b> <b>【解決策の模索】</b> <b>【まとめ・表現】</b>	⑱ 1/13	・冬休み中のフィールドスタディ振り返りと感想の共有 ・冬休みの各自調査の共有 ・Workshopでのグループ発表の構成と役割決め
	⑳ 1/27	★Workshop with Indonesia (インドネシアの高校生とディスカッション)
	㉑2/3	・Workshopの反省、国際ディスカッションにおける課題についてグループで議論・全体共有 ・最終ポスタープレゼンテーションの発表者の発表、質疑応答 (特にアクションプランの実現性の検証など)
	㉒2/17	最終ポスタープレゼンテーション (2年WWL3科目合同)
	㉓2/24	・1年の学びの記録のグループ内発表と各自の提案の共有 ・最終ポスタープレゼングループのアクションプラン共有と計画

<各フェーズの1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について>

#### 第1フェーズ：【問題の理解】

##### 1. このフェーズでの目標

- 目標 1) 「豊かさ」について考える過程で、必要な条件同士の関係性や自分の中にある重要な価値観や、同時に他者にとっての重要な価値観に気づくとともに、その価値を生む多様な背景について考える姿勢を身につける。
- 目標 2) 生徒たちが、互いの意見の共通点や違いについて議論する中で、コミュニケーション能力を身につけ、また、コミュニケーションによって互いの理解や問題解決につながる経験をする。
- 目標 3) SDGsを通して世界の問題について広く理解するとともに、それが構造的に深く関わり合う問題であることを理解する。
- 目標 4) 世界で生じる問題と自分との直接の関わりを理解することで問題が自分と切り離せないものであることを理解する。

##### 3. 具体的な活動

###### ① 4/15

5時間目は、WWL2年合同授業を通して、WWLの学びに共通する特性や目的を教員が講義した。予定されているWWL関連イベントについても想起させ、積極的な参加を求めた。また、評価については「学びの記録」の書き方やルーブリックの意味や内容に触れながら、受け身ではない主体性、自分でクリエイティブに発想・行動していくことの大切さを伝えた。6時間目は各授業に分かれた。グローバルスタディでは、授業の目指すところ/担当教員の背景や思いの説明の後、生徒のアイスブレイクとして、キーワードから連想する絵を描いて見せ合う「流れ星ゲーム」を行った。



課題：自分にとっての「最悪の未来」とそれにつながる日常的行動について考えてくる。

② 4/22

前半は、「最悪の未来」を考えるワークを行った。各々課題として考えてきた「最悪の未来」とそれにつながる日常的行動についてペアで共有し、違和感のある点や確認したい点について質問しあった。その後、6人グループで共有した課題の内容を整理・順序立てて模造紙にわかりやすく図示し、グループごとに発表した。これを受けて、「最悪の未来」を回避するために自分たちにできることを手元でメモさせた後、教員から「緊急性」の必要と日本社会の特徴について簡単に解説をした。



後半は、「豊かな社会に必要なこと」ワーク（個人編）を行った。配布された24枚のカードから「私にとって」豊かだと思える社会であるために大切な条件カードを9枚選択し、そのうちさらに最優先される3枚のカードを選び、写真に保存した。最後に学びの記録の書き方を再度説明した後、時間をとって記入した。

課題：「日本は“豊かな国”だろうか、“豊かな国ではない”だろうか」について、具体的な情報を根拠として示しながら調査・説明する（評価ポイントについても明示）

③ 5/6

初めに、前回の学びの記録のフィードバックを行った。生徒の書いた意見を紹介しながら、クリティカルシンキングの大事さや記入にあたっての注意事項を教員からコメントした。その後、4人グループになって前回最後に自分が選択した「豊かさ」カードについて、グループの他のメンバーに選んだ理由とともに説明し、さらにグループとして9つのカードを選んでダイヤモンドランキングで整理し、ロイロで写真を提出した。その際、必ず全員が合意するまで話し合うことや、多数決で決めないことを伝えた。次に立場を変え、自分ではなく、高齢者・社会的マイノリティ・難民の子供などの立場で条件を選び直す作業を行なった。その後、課題で取り組んできた「日本が豊かかどうか」についての調査をもとに、グループ内でミニディベートを行い、学びの記録を記入した。



課題：「豊かさ」とは何ですか？これまでの授業の学びを踏まえて定義づけをください。

④ 5/13

SDGsを学ぶ入り口としてカードゲームでの体験学習を取り入れた。スマセレ会長理事の田中喜陽さんをお招きし、前半は講義・後半はゲームの構成で学んだ。初めにペアで、SDGsについて知っていることを出し合い、田中さんからSDGsについての、歴史的経緯や概要、Transformingの意味、ゲームの概要についての説明があった。グループごとに（様々な価値観を表す）ゴールカードとアイテムカードを選び、「お金と時間を使ってプロジェクトを行うことで、最終的にゴールを達成できるか」というゲームの趣旨を説明され、1分間の作戦タイムの後、ゲームが開始された。前半と後半の間に中間報告があり、後半は「全体として」社会をどうしていくべきかと生徒たちが考えながら進んでいった。全体と個別の振り返り、SDGsの本質や特性についてのお話を経て最後にペアでシェアをして、現実の世界における人生ゴールやSDGsの必要性について確認



をして終了した。

### 3. 活動の評価方法

- ・②～④については「学びの記録」で授業中に新しく得た事実や考えたことを記録した。
- ・「学びの記録」は、基本的には毎回授業後に回収するが、授業内容が盛りだくさんであったため書き切る時間が足りない場合が多く、後日提出にすることがあった。
- ・回収した「学びの記録」については、次の授業のはじめに、よく考察しているものや全体で共有したい発問については抽出して紹介するなどしてフィードバックを試みた。これにより、探求学習に慣れない者が他のメンバーから「考え方」を学んだり、学習の刺激を受けたりすることを狙いといた。
- ・「学びの記録」のルーブリックは下の通り。

	新しい事実・知識の量/質とその整理	他者や自分の主張の量/質とその考察
A	新しい事実・知識の量/質が十分で、自分の観点を持っていてしっかりと整理されている。	他者や自分の主張の量/質が十分であり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多く見られる。
B	新しい事実・知識の量/質がある程度あり、ある程度の情報のまとまりになっている。	他者や自分の主張の量/質がある程度あり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とをある程度つなげて考察まで発展した記述が見られる。
C	新しい事実・知識の量/質が不十分で、内容の整理がなくそのままの羅列となっている。	他者や自分の主張の量/質が不十分で、考察が見られない。

- ・「学びの記録」以外の各授業の終わりに提示した課題は課題のルーブリックは以下の通り。

4/15

①「最悪な未来」とはどのような社会だと思いますか。②①のような未来になる過程で通過する日常的行動は。(4/15課題)			
	情報量	最悪な未来についての具体性	最悪の未来と日常的行動がつながりと記述の明確さ
A	情報量が十分である。	確かな情報と共に具体的に示されている。	最悪の未来と日常的行動がつながっており、明確に答えられている。
B	情報が不十分である。	具体的に示されているが、情報の根拠が不明確である。	明確に答えているが、最悪の未来と日常的行動のつながりがやや薄い。
C		具体性に欠けており、情報の根拠も不明確である。	最悪の未来と日常的行動がつながっておらず、明確さに欠ける。

4/22

日本は「豊かな国」か「豊かな国ではない」か？(4/22課題)			
	情報量(両方の立場の意見が述べられているか)	情報の確かさ・具体性	根拠としての有効性
A	情報量が十分である。	情報の根拠が明確であり、かつ具体性がある。	収集した情報が、本人の主張の根拠として有効である。
B	情報が不十分である。	情報の根拠が明確であるが、具体性に欠ける。	収集した情報が、本人の主張の根拠としては有効性に欠ける。
C		情報の根拠が不明確であり、具体性に欠ける。	収集した情報が、本人の主張の根拠として成り立たない。

5/6

	定義づけが明確であるか	具体例を挙げて根拠が示されているか
A	定義づけが明確である	具体例が、根拠を挙げて多面的に捉えられている。
B	定義づけが曖昧である。	具体例は挙げているが、根拠を挙げて多面的に捉えられていない。
C	定義づけがされていない。	具体例が挙げられていない。

### 4. 検証

目標の達成度・課題

- ・目標 1)について

「豊かさ」を考えるワークに答えはない。自分がとことん考えて条件カードを選ぶのだがそれは他のメンバーとまずほとんど一致することはない。一見話し合いで互いに納得するのは難しいように感じるのだが、案外話しているうちに、異なるように思える価値観同士には繋がりがああり、考え方の角度によって選ぶ条件カードが変わる。「学びの記録」からは、話し合いによって合意が可能であったことや、人によって価値観がことなるということ。

その価値観を生む背景も多様であることを実感を持って理解できたことが伝わった。

・目標 2)について

生徒たちはこの時期はまだ 4 月で慣れないメンバー同士であったが、「豊かさ」という、絶対的な定義のない言葉について自分の意見を活発に伝えあっていた。このワークでは最終的に合意を形成しなければならなかったため（多数決禁止）、相手の意見の根拠までしっかりと汲み取ることと、自らの意見とのすり合わせの作業が求められたが、話し合いの様子を観察する限り、積極的に取り組んでいたように思う。中には自分の意見を簡単に相手に合わせようとする者もあり、もう少しこだわって自分の意見を主張する粘りを見せてほしい部分も散見された。

・目標 3)について

この授業を受講するメンバーは、基本的に社会問題に関心がある者が多い。SDGs についての理解は、昨年度 BASIC 受講生とそうではない生徒の間に大きな差があったはずであるが、最終的な理解度や思考の深さについてはさほど気になる差はなかった。昨年度は SDGs の枠を「用いる」場面が多かったが、今回はゲストの田中さんから、SDGs の歴史も含めた概要の説明があったり、ゲーム体験を踏まえて、改めて理念だけではなく SDGs が求められる真の意味や必要性、あるいは自分自身の人生のゴールについても想起しながら考えることができた。しかしながら、時間的な制約や講義とゲームの特性上、具体的な問題や問題同士の関わりについて丁寧に情報を集めることはできなかつたため、この先の授業の中で展開していくこととする。

・目標 4)について

目標 3)の分析のところでも述べたように、第 1 フェーズの段階では、自分たちの知っている範囲での物事から主に「考察する」ことを身につけることが中心となり、ゲストの田中さんを招いての SDGs の学びにおいても、理念や歴史的意義、そして社会の問題同士の関連についての学びが主であったため、具体的な事例を多く学ぶ時間はさほど多くなかった。従って目標 4)については、第 1 フェーズの段階では少し目標設定としては早かったように思う。第 2 フェーズで自分のテーマを設定し始めて、初めて自分事としての問題の認識が可能となるように思う。

・まとめ

今年度はグローバルスタディの授業は 2 年目ではあったが、昨年度の授業の反省から共通テーマをあまり早くに示しすぎて「与えたテーマ」となってしまうように授業計画を立てる際、気をつけた。今年度はコロナ禍とはいえ、当初より対面授業が可能であったため、昨年度と同じ「豊かさ」ワークを行うにしても、やはり格段にコミュニケーションがスムーズであったし、人前でそれを発表する機会も容易に作ることができ、受講者は自分の意見を伝えることに慣れるのが早かったように感じる。

昨年度 BASIC を受講した者も比較的多くいたが、受講していなかった者との意識的な差がなるべく早く縮まるように気をつけた。当初はおとなしい、あるいは成績の心配があったメンバーも、こちらの作る様々なアクティブラーニングの機会を積極的に活かそうとする努力が見られたため、その心配は次第になくなっていった。楽しみながらも大きな現実的問題・社会的ジレンマが体験できたであろう SDGs カードゲームを、この時だけの経験で終わらせるのではなく、今後の探求学習の様々なタイミングで何度も思い出して深い意味について捉え直して欲しい。

5. 今後改善すべき点について

これから次第に生徒各々のテーマ設定に向かっていく。共通テーマを設定はするが、最大限に個人の関心に基づいたテーマを探究していけるようにサポートをしたい。そのための効果的な手法を模索していきたい。教員側に生徒に経験してほしい事柄が多く、毎回内容を詰め込みすぎていることが反省である。忙しさのあまり 1 つ 1 つが何となく薄い経験となってしまうよう、こちらはより内容を吟味・精査する必要がある。また、簡単な発表の機会を何度か作ったが、時間的な限界もあり、プレゼンテーションの効果的な方法について

ポイントを伝えたり、じっくりと手法を反省する機会を設けられなかったため、人による上手い下手の差を可能な限り解消していくことも今後の課題である。

## 第2フェーズ：【情報の収集】【課題の設定】【問題の整理・分析】

### 1. このフェーズでの目標

目標 1) 言葉や概念の定義を分析・整理することで考察点を明確にするとともに、問題を分析的に捉える力を身につける。

目標 2) 生徒同士で自分の考えや新たに生じた疑問について説明し合ったり教え合ったりすることで気づきが得られる経験をするとともに、自らの考え方を客観化し、刺激を得てさらなる考察を進める意欲を持つ。

目標 3) 他者と作業をする中で、自らの役割に気づき、責任を持って必要事項を調査したり、それを効果的に仲間に伝えたりする中で協働する力を身につける。

目標 4) 問題を分析する過程で情報収集する中で、現実社会の出来事について自らの関心に気がつくとともに、主体的に問題意識を深めていく。

目標 5) 現場で活動する方から、活動に関わる熱意や思いに触れながら、多角的に現状の具体的問題点を学日ながら「問題を自分事にする」ということを体験的に知る。

目標 6) これまでに学んできた「豊かさ」や「SDGs」、気候変動の自他の調査を踏まえて問題の根底を大きく捉え、さらに深めるべき自分の中に湧き上がる問いと出会う。

### 2. 具体的な活動

#### ⑤ 5/27

前半は4人グループになり、以前の課題で各々まとめてきた「豊かさ」の定義をお互いに分析・整理してマナボードに図示した。その後、1グループ2分間で分析・整理結果の発表をし、適宜図示したものを写真保存した。後半は、前回使用したSDGsカードゲームのカードデータを配布したり、生徒の書いた「学びの記録」をフィードバックしたりしながら振り返りをした。今回のフィードバックでは、必要に応じて指名した生徒にコメント・補足説明・今考えていることなどを話させた。そして、生徒自身から出た4つの発問を取り上げ、その中で興味のあるものを選ばせてグループを作り、iPadを使用し、現状の問題点も含めて調査を開始した。



課題：授業の最後に開始したグループの作業を継続する。(グループ内で分担して作業をしてくる)

※次回の最初に情報をまとめて発表することを伝える。

#### ⑥ 6/3

まず初めに、学びの記録から読み取れる生徒の問いに共通する問題意識や関心、疑問点を共有し、互いの思考に新たな刺激を受けられるような空気を作った。その際、自主的に調査をしてきた者をその場で指名し、調べた内容やその中で新たに気づいた事柄について簡単に紹介してもらった。その後、前回授業の中で整理して担当を分けた4つの問いについて、各自分担して調べてきた情報を整理し、発表準備をした(発表用ルーブリックを提示)。生徒発の4つの問いについては以下の通り。



- (1) 企業が事実(グローバルで起こる構造的問題)を発信したり、プロジェクトなどで紹介したりする例
- (2) SDGsの解決に向けた国際会議の例
- (3) 「チョコを食べる→温暖化」のような他の例 ×2グループ

(4)SDGsの一つの目標を達成しようとして他の目標の達成を妨げてしまうような例

準備の終了後、人数に合わせて4~6分のグループ発表を行った(発表にはロイロのカードを使用、全員が話すことが条件)。最後に、温暖化mapを配布した。

課題:温暖化mapを参考にしながら(それ以外でも良い)、自分の興味のある(温暖化と関連する)テーマを探し、ロイロで提出する。(テーマは自ら明らかにしたい問いを設定する/興味を持った動機や意義を明らかにする/問題の背景と現状を具体的に調査する)

⑦ 6/10

初めに、前回の授業時に生徒が書いた相互評価表を紹介しながら互いの問題意識、関心、疑問を共有した。その後、前回からの課題で調査してきた、温暖化に関する自分の興味のあるテーマについて、グループ内で1人3分発表し、5分間質疑や提案をする時間を設けた。

課題:資料箱に調査内容やリソース(Webサイトなど、後から振り返ったり他の人とシェアしたりできるように)をストックしていく/学びの記録に新たな調査内容をまとめる



⑧ 6/17

初めの30分間は、4人のグループを6つ作り、「気候変動ウェビング」を行い、これまでに個人で調査してきた情報を用いながら、気候変動から連想される事柄をつなげて模造紙に書き込んでいった。そして、それぞれがある程度書き進んだところで全体を俯瞰し、色ペンを使って色分けなどで情報の整理作業を行った。余裕があれば、調べたいことをキーワードとしてその解決のために必要な事柄や方策を考えてつなげて書き込んだ。完成後は他のグループのウェビングを教室内を移動しながら自由に見て回り、知らなかった情報や新たな観点を見つながら自分の中でのさらに深い気づきを得る時間とした。



最後に映画「幸せの経済学」鑑賞を30分間だけ鑑賞し、途上国の支援によって社会が大きく変容したラダックを例に、「豊かさ」やグローバリゼーションの問題について、映像や専門家の言葉を通して現状をリアルに考える機会とした。この時、まずはしっかりと鑑賞して、新たに考えたことのキーワードと疑問点について、随時学びの記録にメモを取るようにした。

⑨ 6/24

5時間目は今年度初の試みである2年必修選択学習報告会(クロカリ報告会)を開催した。2年のWWL3科目と必修選択の数科目が1授業3分ずつ、自教室からオンライン(zoom)で報告をし合い、聞いているものは適宜ワークシートに気づきやアドバイスを記入した。

6時間目はまず、生徒たちの中から出てきた重要なキーワードである「プラネタリーバウンダリー」についての説明動画を観て語句について説明をした。また、次回ゲストでお呼びする高橋さんの団体、FoE Japanについて紹介をした。



課題: FoE Japanの高橋さんへの質問を3つ考えてくる/「地球温暖化」をロイロ1枚に定義づけする

FoE Japan 事務局の高橋さんをお招きして「気候変動」について、その問題の広さや深さだけでなく現場の声や高橋さん自身の活動のお話を交えながら学んだ。アイスブレイククエスチョン（部屋の四隅）では、「温暖化は一人一人の行動の変化で解決できると思う」や、「気候危機を日々感じている」などの質問を、「そう思う」「どちらかと言うとそう思う」「どちらかというと思わない」「そう思わない」の4つの考えに合わせて部屋を移動し、理由を話した。続いてスライド資料に基づいて高橋さんから、気候変動と世界の動き／気候変動と社会問題の交差点／Climate Justice を訴える若者たち／日本で Climate Justice を実現するという構成でお話を伺った後、感想や気づきについて周りとはシェアをし、質疑応答の時間を持った。



ワークシートには、情報量というよりも、考えの変化や感じたことに重点を置いて記入した。

課題（～7/13）：1学期の学び全体を振り返って「1学期の学びの記録」をロイロカードに記述して提出。

（分量は3分間の発表程度、1学期に学んだこと・これから調査したいこと・今後つきたい力を含むこと）

夏休みの課題：①3分間の発表準備【内容：今後の学びの方向性（自分にとっての大テーマ）とその理由】の発表スライド作りと準備（スライドはロイロカード）

②①の大テーマを明らかにするため、この夏に挑戦する小テーマを1つ設定し、探求（調査）する。

（最近のニュース情報、参考にした図書資料について教員へ提出）

### 第3フェーズ：深める・出会う

このフェーズでの目標

#### 【主体的体験】

目標1）夏休みの間に各自リサーチしてきた大テーマ、小テーマに関してインターネット・文献をもとに調査をする。

目標2）フィールドワークを通して、社会の中で活動されている企業やNGOの方々から話を聞き、知識を深める。

#### 【国内外】

目標3）お互いのリサーチテーマについての考察を似たようなテーマでリサーチしているメンバーたちとシェアし、議論する。

#### 【海外】

目標4）海外でSDGsに関連した職業で働く人々から話を聞いてみる。

目標5）日本と海外の意識の違いについて考える。

目標6）英語でのインタビューの手法や英語のコミュニケーション技術を身につける。

⑪ 9/9

夏休みの課題である『今後の学びの方向性とその理由』について、二つのグループ（徳田ゼミ・泉川ゼミ）に分けて発表した。気候変動という大きな枠組みの中から、生徒一人一人が興味をもった内容について調査し、2学期の方向性も含めて一人3分間のプレゼンテーション（ロイロカードを使用）をした。脱炭素社会、貧困、ジェンダー、食品ロス、CSRといった様々な課題が取り上げていた。内容には個人差があり、しっかりと調査されているものもあれば、表面的な内容しか触れられていないものもあった。三分間の発表の間には一人一人評価シートを記入し、発表後に質疑応答の時間を取った。



⑫ 9/16

前回の夏休みの課題発表のフィードバックを行い、研究の方向性について何が重要かという点を確認した。その後、五十嵐、徳田、泉川より海外のリソースを紹介した。それぞれ海外に繋がるバックグラウンドを持っており、今後の活動に取り入れていく予定である。その後、それぞれが見つめてきたフィールドワーク先を似たようなテーマをもつ生徒たちと共有し、お互いフィードバックをした。



課題：フィールドスタディ先連絡確認シート作成  
探究爆走シート：作成開始

⑬ 9/30

前々回（9/9）の発表を受けて、内容の希薄さを感じたため、関西学院大学の大学図書館で文献調査を行った。大学の図書館には OPAC という文献調査システムがあり、それぞれの探究テーマのキーワードから関連する文献を見つけだし、調べた内容をワークシートにまとめた。



⑭ 10/7

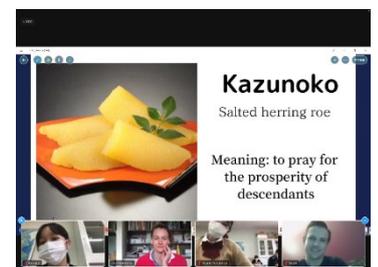
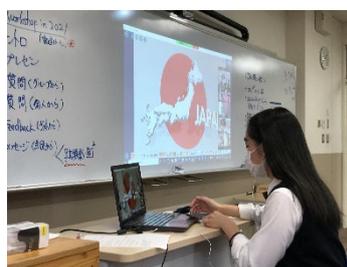
次回行われる SDGs Workshop についての準備を行った。次回参加ゲストの確認、ゲストから送られてきた英語のホームページ等の情報をもとにどのような活動をしているのかをグループで調査した。調査した情報をもとにプレゼン班と質疑応答の班に分かれ、それぞれの内容を考えた。



課題：SDGs Workshop 準備シート  
プレゼン・質問準備

⑮ 10/21

SDGs Workshop in 2021<sup>⑩</sup>を行った。この企画は海外で SDGs に関連する活動を積極的に行っている人々と英語で交流し、そこから学びを深めることを目的としている。2回に分けて行われるこの企画では、一回目は Hamish Lee(New Zealand,途上国中心にソーラーパネルを設置する会社を運営)、 Sean White(Australia,ソマリア、レバノ



ン等で人道支援活動を行う団体に所属)、Dee Commins(Australia, オーストラリアの銀行員、実家が農家を営んでおり、地域の小さな農家を支える活動を行う)の三名にゲストとして参加してもらった。日本についてのプレゼンを行い、そのあとで海外の現場で働く人々がどのような想いをもって日々活動に取り組んでいるのか、どのような苦勞があるのか、若者たちに期待することは何なのかなどといった幅広い内容についてディスカッションを行った。生徒たちは事前に準備したワークシートを使用しながら、ワークショップに参加した。

課題：大学図書館先行研究洗い出しシート  
フィールドスタディ準備シート  
探究爆走ワークシート

⑩ 11/11

第二回のこのイベントでは、前回と異なる海外からのゲストが二名 Hannah Griffith(Sweden, WWF 社員としてバルト海の環境保全に努める)、Erika Lind(Australia, 消防士として山火事消火活動などを行う)が参加した。前回の内容に加え、オーストラリアとスウェーデンのジェンダーへの取り組みや社会福祉制度などの話も聞くことができた。2回を通して、生徒は積極的に取り組めており、質問を多く出たが、実際にネイティブの話す英語の理解度に関しては個人差があり、語学力を向上させる必要性を感じた。



課題：中間発表動画作成 (3分)  
クロカリ準備 (担当者のみ)

⑪ 11/18

5時間目は今年度二度目の試みである2年必修選択学習報告会(クロカリ報告会)を開催した。2年のWWL3科目と必修選択の数科目が1授業3分ずつ、自教室からオンライン(zoom)で報告をし合い、聞いているものは適宜ワークシートに気づきやアドバイスを記入した。



6時間目は各自がまとめてきた中間発表のまとめ動画をそれぞれグループに分けて閲覧し、それぞれがフィードバックを行った。

⑫ 11/25

フィールドワーク先の最終確認(訪問先、手順、費用等)を行った。その後、3学期に行われるインドネシアとの生徒交流会の企画を生徒主体で行った。イベントの構成、内容、時間配分等を決めた。

課題：フィールドスタディ記録シート  
インドネシア交流会に向けての情報収集



### 3. 活動の評価方法

- ・⑤、⑧の「学びの記録」を回収し、教師が内容を評価。ルーブリックは以下のものを使用。

	新しい事実・知識の量/質とその整理	他者や自分の主張の量/質とその考察
A	新しい事実・知識の量/質が十分で、自分の観点をしっかりと整理されている。	他者や自分の主張の量/質が十分であり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多く見られる。
B	新しい事実・知識の量/質がある程度あり、ある程度の情報のまとまりになっている。	他者や自分の主張の量/質がある程度あり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とをある程度つなげて考察まで発展した記述が見られる。
C	新しい事実・知識の量/質が不十分で、内容の整理がなくそのままの羅列となっている。	他者や自分の主張の量/質が不十分で、考察が見られない。

- ・⑥の発表については、事前に調査してきた各自の発表準備の内容については以下をルーブリックとして使用。

#### 発表評価シート

	情報量 気付き
A	情報量が十分であり、自分の気づきや意見がしっかりと描写されている。
B	情報量は十分であるが、自分の意見が不十分である。
C	情報量が不十分である。

- ⑥の当日のグループごとの評価の観点について、生徒（相互評価）、教員ともに以下の通り。

評価はABCで付けてください。	G1	G2	G3	G4	G5
①十分かつ適当な具体例					
②現状の問題点の分析					
③チームワーク（作業量・全員が話す）					
④発表の構成・ポイントの置き方					
⑤問いの発展性（さらに深まる問いか？）					
⑥発表の仕方（伝わり方・工夫など、30秒以上長短は減点）					
質疑応答の内容					

- ・⑥、⑦の「学びの記録」については各自の調査についても個別に評価。以下のルーブリックを使用した。

1-6.7 学びの記録(グループ内議論と自調査)				
	知識/技術	調べた情報量	調べた情報の質(具体性・緻密さ)	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。	情報量が十二分である。	調べた情報が具体的でありかつ内容も緻密であり、問いが自分の中でさらに発展し、新たな調査へと繋がっている。	知識と知識、意見と考察が有機的につながる記述が見られる。深い洞察とクリエイティブな広がりがある。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	情報が十分である。	調べた情報の具体性がやや不足している/緻密さにやや欠けている/問いの発展性がやや不十分である。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている
C	情報の量・質が不十分である。	情報が不十分である。	調べた情報の根拠に確かさが欠ける/内容が大雑把である/問いの発展性がない。	感想や意見、疑問の量・質が不十分である。

・「学びの記録」以外の各授業の終わりに提示した課題は課題のルーブリックは以下の通り。

7/1 1学期のまとめ

	内容について	論理・展開
A	知識と知識・知識と経験・知識と考察等のつながりがみられ、深い洞察とクリエイティブな広がりがみられる。	①「豊かさ」、②SDG sの学び、③気候変動の3つの学びの関連性が見られ、かつ1学期全体の学びから新たな学びへの自然な展開が見られる。
B	学びの内容が自らの中で客観化できおり、抽象的な概念の獲得が来ている。	①「豊かさ」、②SDG sの学び、③気候変動の3つの学びの関連性が見られる。
C	授業内容の言及、あるいは短絡的・表層的な意見や感想・疑問にとどまっている。	①「豊かさ」、②SDG sの学び、③気候変動の3つの学びの関連性が見られない。

\*これに加えて一人一人の1学期全体の学びについて教員よりコメントを入れたものを返却した。

※⑤「豊かさの定義」（グループでボードにまとめ）、⑥の課題の「気になるテーマの調査」（特に取り組みの甘いものは減点）、⑧「ウェビング」（グループで模造紙にまとめ）、⑨「地球温暖化の定義」と「FoE Japan への質問」、⑩のゲストによる授業時のワークシートについては、「ルーブリック」を用意していない。

9/9 夏休みの課題

夏休みの課題（小テーマ調査）				
	小テーマの設定	小テーマを明らかにするための情報量と根拠	調べた情報の質（具体性・緻密さ）	自分なりの意見／考察
A	大テーマを明らかにするための効果的な小テーマが設定できている	情報量が十分であり、情報源が適切かつバランスが良く、（ウェブと図書資料の両方）意見の裏付けとして適当である。	調べた情報が具体的でありかつ内容も緻密である。	知識と知識、意見と考察が有機的につながる記述が見られ、（深い洞察とクリエイティブな広がりがある。）
B	大テーマとの結びつきが不明瞭である、あるいは小テーマの設定が曖昧である。	情報が十分であるが、情報源のバランスにやや改善が必要で、（根拠の甘さ、さらなる図書選定の必要あり）意見の裏付けとして不十分である。	調べた情報の具体性がやや不足している、あるいは緻密さにやや欠けている。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	小テーマの設定ができていない、あるいは大テーマと結びついていない。	情報が不十分である、あるいは情報源のバランスや内容に大いに改善の余地が見られ、意見の裏付けとして不十分である。	調べた情報の具体性が不足している、あるいは内容が大雑把である。	自分なりの感想や意見、疑問の量・質が不十分である。
夏休みの課題と発表を総合して（今後の学びの方向性）				
	1学期の学び	学びの方向性	発表方法（スライド、話し方）	

A	1 学期の学びが本人の中で整理・咀嚼され、自分なりの言葉を用いてまとめられている。	学びの方向性が気候変動と結びついており、かつ 1 学期の学びと効果的に結びついている。	自分自身の言葉で話せており、スライドが効果的に用いられている。	
B	1 学期の学びの内容がそのまま羅列されており、ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	学びの方向性の気候変動と結びつきが曖昧、あるいは 1 学期の学びとの結びつきが不明瞭である。	原稿を読んでいるが明確に伝わる。	
C	1 学期の学びについての取り扱い情報量が不十分である、または取り扱われていない。	学びの方向性が気候変動と結びついていない、あるいは 1 学期の学びと結びついていない。	原稿を読んでおり、かつ明確に伝わらない。	

### SDGs Workshop in 2021

	WS の担当者に対するリサーチ	発表者に対する問い	イベント当日のメモ	リサーチとのリンク付け (学びの記録)
A	調査の内容、量が十分である。	5 人の発表者に対して、自身のリサーチに対する問いを立てることができている。	ゲストの発表の内容の要点を理解できている。	話の内容と自身のテーマを関連づけて考えることができている。
B	調査の内容は良いが、量が不足している。	5 人の発表者に対して、リサーチとは関係のない一般的な問いを立てている。	ゲストの発表の内容が断片的に理解できている。	話の内容は理解しているが、自身のテーマと結び付けていない。
C	調査の内容、量ともに不十分である。	5 人の発表者に対して、問いを立てることができていない。	ゲストの発表の内容があまり聞き取れていない。	話の内容がほとんど理解できていない。

### 探究爆走シート

	A	B	C
課題発見力	実社会や実生活、自己との関わりから問題の本質に関わるような深い問いを見出し、丁寧かつ詳細に現状を分析して自ら課題を立てられている。	実社会や実生活、自己との関わりから問いを見出しているが、問題の本質との繋がりが見えづらい、あるいは現状分析にやや丁寧さが欠ける。	実社会や実生活、自己との関わりから問いを見出せていない／問題の本質との繋がりが見えない／現状分析が不十分である。
課題解決の道筋	問題の解決に必要な具体的で根拠のある情報を十分な量収集し、かつ整理・分析できており、計画的に解決できる道筋を立てられている。	問題の解決に必要な情報は十分かつ整理されているが、具体性や根拠にやや欠けており、解決できる道筋が漠然としている。	問題の解決に必要な情報が質・量ともに不足しており、問題解決への道筋が見られない。

創造性	自らの考えと既存の発想をうまくかけ合わせており、新しい価値や課題に対しての新たな解決方法を創造できている。	自らの考えと既存の発想をうまくかけ合わせているが、新しい価値や新たな解決方法を創造がやや不十分である。	自らの考えと既存の発想とのつながりが見られず、新たな価値や新たな解決方法の創造ができていない。
-----	---	---	---

## 2 学期学びのまとめスライド

	S	A	B	C
テーマ設定の動機や目的	自分と社会とのつながりの中でテーマ設定ができており、動機や目的が非常によく吟味されたものであることが伝わり、かつそれが明確に伝わる。	自分と社会とのつながりの中でテーマ設定ができており、動機や目的が明確に伝わる。	テーマ設定の動機や目的が示されているが、自分と社会とのつながりが見られない。	テーマ設定の動機や目的が示していない。
参考文献の質（最後のページに一覧で載せる）	論文作成を可能にするような、多角的で深く、量的にも十分な参考文献が提示されている。	参考文献の量・質とも十分にである。	参考文献の量がやや少ない、あるいは質に偏りや根拠の薄さが見られる。	参考文献の量が不十分である。あるいは掲載していない。
内容が整理されている		自分の観点を持って自分なりに内容を処理し、情報を整理できている。	内容が十分に処理・整理されてはいるが、自分なりの観点を示していない。	内容が整理されていない。
自分の考えが主張されている（思考の深まり）		知識と知識、意見、考察が有機的につながる記述が見られ、自分なりの深い洞察とクリエイティブな広がりが見られる。	自分なりの思考の深まりを見出そうとはしているが、短絡的・表層的な感想や疑問、意見にとどまっている。	自分なりの思考の深まりが見られず、考えが主張できていない。
今後の展望	テーマの本質に関わるような非常に鋭い問題に気がついており、更なる探求の深まりを予想させる展望が示されている。	テーマの本質に関わる問題に関わる適切な展望が示している。	新たな展望が示されているが、テーマの本質に関わるような深いものとは言えない。	今後の展望が示されていない。

表現力（スライドの分かりやすさ、説明の聴きやすさ）	スライドの情報量が適度であり、かつ聞き手がより理解しやすいような工夫が見られ、要点の理解が非常にしやすい内容である。／声の調子も大変聞きやすい。	スライドの情報量が適度であり、要点の理解がしやすい内容である。／声の調子も聞きやすい。	スライドの情報量が多すぎるあるいは少なすぎるため、要点の理解がややしづらい内容である。／声の調子がやや聞きづらい。	スライドの情報量が多いあるいは少なく、要点の理解がしづらい。／声の調子が聞きづらい。
---------------------------	--	---	---	--

#### フィールドスタディ準備シート

	S	A	B	C
訪問先に関する調査	訪問先について、表面的な情報だけでなく、具体的な取り組みやデータ等の詳細かつ根拠に基づいた情報を、現場が直面している課題も含めて収集できている。	訪問先について、表面的な情報だけでなく、具体的な取り組みやデータ等の詳細かつ根拠に基づいた情報を収集できている。	訪問先について、十分な量の情報を収集しているが、内容が表面的であったり、具体性や根拠の確かさにやや欠けていたりする。	相手先について収集した情報が量・質ともに不十分である。
質問内容	その訪問先でしか得ることのできない情報を引き出す質問であり、仮説を明らかにするために十分効果的な質問である。	概ねその訪問先でしか得ることのできない情報を引き出す質問であり、かつ仮説を明らかにするために概ね効果的な質問である。	その訪問先以外でも得られる情報を含んでおり、仮説の証明に質問内容が十分とは言えない。	質問の内容が訪問先に適しておらず、的を得ておらず、仮説の証明には無効である。
仮説の設定		自ら設定したテーマの本質に迫ることのできる内容であり、かつ不明瞭なマジックワードを用いない明確な表現ができている。	自ら設定したテーマの本質に迫ることのできる内容であり、かつ不明瞭なマジックワードを用いない明確な表現ができている。	自ら設定したテーマから

#### 4. 検証（第1・2フェーズ）

##### 目標の達成度・課題

目標 1) 言葉や概念の定義を分析・整理することで考察点を明確にするとともに、問題を分析的に捉える力を身につける。

目標 2) 生徒同士で自分の考えや新たに生じた疑問について説明し合ったり教え合ったりすることで気づきが得られる経験をするとともに、自らの考え方を客観化し、刺激を得てさらなる考察を進める意欲を持つ。

目標 3) 他者と作業をする中で、自らの役割に気づき、責任を持って必要事項を調査したり、それを効果的に仲間に伝えたりする中で協働する力を身につける。

目標 4) 問題を分析する過程で情報収集する中で、現実社会の出来事について自らの関心に気がつくとともに、主体的に問題意識を深めていく。

目標 5)現場で活動する方から、活動に関わる熱意や思いに触れながら、多角的に現状の具体的問題点を学びながら「問題を自分事にする」ということを体験的に知る。

目標 6)これまでに学んできた「豊かさ」や「SDGs」、気候変動の自他の調査を踏まえて問題の根底を大きく捉え、さらに深めるべき自分の中に湧き上がる問いと出会う。

- ・目標 1) について、授業⑤⑧⑩においてある程度目標達成に効果があったと考える。授業⑤では、第1フェーズの様々な経験を振り返りながら言語化し、さらにそれを生徒同士で分析・整理することで、より議論のポイントとなる点が明確になったように思う。それは、生徒たちの発表自体の内容からよく伝わった。決して答えた1つではないものについて、グループのメンバーなりの視点で分析できており、その内容はよく整理されたものであった。授業⑧でも、「気候変動」というワードから連想しながら言葉同士をつないでいき、全体を俯瞰することで問題の広がりや問題の多角的側面を客観視できた。これは、前段階として各自の調査の積み重ねがあったため、自分なりのフィールドを意識しながらアウトプットしつつ、他社からの情報と合わせて分析的に捉える力を養えたように感じる。授業⑩では、気候変動だけではなく「気候正義」という言葉を通して世界で起こっている温暖化をめぐる現実的・構造的な問題を知り、多くの問題と深く関わる事柄であるという事実を学んだことが、振り返りワークシートや生徒がゲストの高橋さんに多く投げかけていた質問の内容から分かった。
- ・目標 2)3)については、ほぼ全ての授業において達成に近づく機会を作ることができた。言葉の定義について共同で整理分析し発表したこと(授業⑤)、生徒発の問いを生徒たちがグループで調査・発表したこと(授業⑥)、互いの調査内容から問題意識や関心事項、疑問点の共有をしたこと(授業⑦)、気候ウェビングの模造紙への記入(授業⑧)、ゲストスピーカーの導入で行われた4隅の質問の中で互いの意識を共有したこと(授業⑩)などがそれに当たる。しかしながら、様々な学びの形を取り入れたことは生徒の経験値を高めるという意味では効果的であったが、1つ1つにかかる時間がいずれも非常に短く、慌ただしい中で行うものばかりであった。また、課題を多く出し、それに生徒たちが真面目に取り組んできたからこそ成り立った授業が多い。おそらく自らの考えを客観化したり、刺激を与えあったりすることはできたが、2)の刺激を得て「さらなる考察」という部分にどこまで踏み込めたのかについてはまだこちらが適切に評価し得るほどには視覚化できていないように思う。
- ・目標 6)について、本来であれば時間をかけて学期の最後に振り返りの意味を持つ発表プレゼンテーションの時間を作るべきであったが、時間的にそれが難しくなったため、授業⑩の後に文章で発表をイメージしてまとめる課題を与えた。1学期の学びの記録という感覚でまとめさせたこの課題の要点は、1学期に学んだこと・これから調査したいこと・今後つけたい力を含むことの3つであった。目標 6)の「問題の根底を大きく捉える」ためには、個別事象の情報収集だけで終わるのではなく、自分の中で咀嚼した新たな「概念」を持つこと。それを言語化することが不可欠である。生徒の中には、「豊かさ」や「SDGs」、気候変動という学びの経験が有機的に繋がって自分なりの課題や新たな問題意識に転換できている者もいれば、1つ1つの学びの経験がバラバラなものとして完結している者もあり、やはりここでも個人差を感じた。また、「これから調査したいこと」のテーマ設定について、具体性のある者と漠然とした者がいた。本来ならば生徒の経験をうまく整理することも手助けできれば良いのだがそれが叶わず、個人が本来もつ思考力に頼ってしまったことは反省点である。

#### ・まとめ(第1・2フェーズ)

【情報の収集】【課題の設定】【問題の整理・分析】という観点からこの第2フェーズを整理する。全体的にフェーズ1の経験を自然にフェーズ2に繋げることができるよう授業プログラムの作成ができたように思う。問題の広がりや複雑さ、あるいは関連性を的確に理解したりしようとする姿勢を身につけるきっかけづくりはできた。そして情報の単純なインプットだけではなく、抽象的な言葉についての定義とその共有や話し合い、さらにそれをマナボードや模造紙などで視覚化・客観化することで新たな気づきにつながったように思う。

【情報の収集】については、授業の中では毎回の学びの記録のフィードバックの際に教員から少量であるが生徒の

問題意識につながる鍵となるようなキーワードの提示・解説、授業⑥で配布した気候変動マップ（気候変動に関わる世界の多岐にわたる諸問題をわかりやすい絵柄と共に掲載した地図）、授業⑩のゲスト講師からの講義が主なもので、それ以外については授業外の時間に生徒個人が課題の中で調査する活動に頼った。そのため、人による情報収集量に差が出てしまったことが反省点である。

【課題の設定】については、これまでの大きな問題把握の経験を生かす形での課題設定へと導くことができた。課題の設定の自由度については、完全に自由化するのではなく、最終的には海外の高校生と共に議論をするという授業の目標を見据えて「気候変動」という最終テーマを設定した。しかし気候変動の問題の複雑さや広がり、自分たち自身との関わりのある問題であるということを理解した上で、（気候変動マップをヒントとして与えながら）それに至る自分なりの大テーマと小テーマを設定させる方向で進めた。少し自由度を狭める形とはなったが、それでも生徒たちはそれぞれの中に問題意識を見つけ、互いに異なる個性あるテーマを設定できていた。このことから、気候変動という共通テーマに繋げる方針にはある程度効果があったのではないかと考える。しかし、生徒によっては気候変動から連想する問題意識を具体的なテーマに落とし込むことに苦戦している者もいるように感じたため、これらの生徒へのフォローについては2学期以降の課題である。

【問題の整理・分析】については、「豊かさ」という言葉の定義づけ作業、生徒自身の中から発せられたテーマの調査・分析作業、気候変動ウェビングの3つの作業を主な協働の経験として取り入れた。協働的な学習の機会は生徒同士の刺激により次なる問題意識に発展しやすく、今後も導入を続けたいと考える。その他にも生徒たちは随時、「学びの記録」を使用しながら他の生徒の意見について自分の問題意識とのつながりを考え、気になった点については持ち帰った学びの記録に調査内容を記載・分析してくるなどの試みを続けた。調査・整理についてはある程度できたように思うが、分析という点で授業内の活動的には少し不足していたため、2学期以降はより効果的で有意義な分析が各々できるような環境づくりや授業プログラムづくりを心がけたい。

以上の分析から、課題は残るもののフェーズ2の目標は概ね達成できたと考える。

## 検証（第3フェーズ）

### 【主体的体験】

目標1) 夏休みの間に各自リサーチしてきた大テーマ、小テーマに関してインターネット・文献をもとに調査をする。

目標2) フィールドワークを通して、社会の中で活動されている企業やNGOの方々から話を聞き、知識を深める。

### 【国内外】

目標3) お互いのリサーチテーマについての考察を似たようなテーマでリサーチしているメンバーたちとシェアし、議論する。

### 【海外】

目標4) 海外でSDGsに関連した職業で働く人々から話を聞いてみる。

目標5) 日本と海外の意識の違いについて考える。

目標6) 英語でのインタビューの手法や英語のコミュニケーション技術を身につける。

目標1) については、夏休み明けの授業⑨⑩で行った。夏休みの間に各自大テーマと小テーマを決め、それについて発表させたが、リサーチの情報量には個人差があり、全体的に浅い内容の生徒が多かったため、関西学院大学の図書館を利用し、文献調査をした(13)。その中で新たな発見もあり、テーマをより具体的に変更し直す生徒も数名いた。

目標2) に関しては、まず本人たちのテーマとそれに関わる事業を行う企業やNGO、地方自治体と連絡を取り訪問させていただいた。訪問先は、テーマが気候変動に関わる、貧困、環境、経済、メディアなど多岐にわたるため、結果12

の団体からお話を聞くこととなった。コロナの休校等もあったため授業内で行うことが難しく授業後の冬休み期間を利用して行くことになった。生徒たちは机上の学びでは得られないものを現場の方々から学ぶことができ、今後の学びのいい刺激になったとの意見が多かった。企業側も SDGs に取り組んであたりまえというような社会の流れから、高校生のこのような活動に前向きに協力してくれた。

目標 3) に関しては、最初のテーマ設定時、SDGs ワークショップや企業訪問などの行事の後でグループに分かれて行った。その都度教員からのフィードバックもしっかりと入れるように意識した。

目標 4) 今回初めての取り組みで SDGs Workshop を行ったが、相手がネイティブスピーカーということもあり言語の面で、内容を理解し、そこからさらに深めるという点で苦労した。しかし、すべてが理解できなくても、現場でアクションを起こしている人々の言葉には力があり、生徒たち心に響いたようである。

目標 5) 日本と海外の意識の違いについては、質疑応答をする中で、環境問題に対する考え方が同じ先進国でも異なるということに気付いたようである。その意識を変えるためには何が必要かということを考えるきっかけとなった。

目標 6) 英語のインタビューの手法やコミュニケーションスキルに関しては、この SDGs Workshop で上手くコミュニケーションを取れなかったことが、生徒たちにとって良い刺激になったようである。相手の情報を前もって提示していたので、それに関わる語句やフレーズといった語彙力、また活動内容などの背景知識などしっかりと準備をしてイベントに臨むことの重要性を強く感じたようである。

#### まとめ (第 3 フェーズ)

この第 3 フェーズでは個々の興味のあるテーマを絞り、それを深めるにあたって、文献はもちろんのこと、現場の生の声を聴き、知識を深め、考えるというのが大きな目標であった。テーマに関しては、幅広いテーマが上がってきたが、それぞれのテーマに関して、深みという点ではかなり時間を要するということを感じた。昨今、インターネット技術の向上により、簡単に情報が手に入るが、その情報が信頼できるものであるのか、またその情報からどのようにリサーチを進めていくのかという点が難しかったように思える。

海外で SDGs 関連の仕事をしている人々と繋がるワークショップにおいては、個々のテーマと関連付けて、様々な質問を挙げていた。しかし、質問からさらに議論を発展させるというところまでは、言語の壁もあり、難しく感じた。主体的体験 (リサーチ、フィールドスタディ) においては、同じようなテーマをもつ生徒たちが協力し合い、その中で各テーマの理解を深めた。フィールドスタディにおいては、自ら訪問先を見つけ出し、実際に企業や NGO の方々と連絡を取り合い、実際に話を聞くことができた。そのフィールドワークからヒントを見つけ出し、アクションへと動き出している生徒たちもいる。

#### 5. 今後改善すべき点

4 のまとめの内容と重複するが、改善点について整理すると以下の通りである。

- ・生徒間の調査力の差があまり出ないよう情報収集のペース作りをする。
- ・気候変動から連想する問題意識を具体的なテーマに落とし込むことに苦戦している生徒へのフォロー。
- ・限られた時間の中で、こちらの設定する様々な活動が全ての生徒にとって最善のペースであるということはない。人によって学びの速度 (特に咀嚼する速度) は異なる。もちろん全員のペースに全てを合わせることはできないが、できるだけ各々のペースを大事にしながらか授業の活動を設定できるように工夫をしたい。
- ・設定した問題を、各々が効果的で有意義に分析できるような環境づくりや授業プログラムづくり。
- ・プレゼンテーションやディスカッションに焦点を当てた英語力の強化。

ルーブリックについての改善点は以下の通りである。

- ・生徒の探究ペースには個人差がある。しかし評価は同じタイミングである必要があるため、ルーブリックについても本来的な力の差で評価が分かれてしまわないようにする項目を設定する工夫が必要であるが、あまり詳細なオリジナリティのあるルーブリックを作成することができなかった。
- ・活動量に対してそれを適切に評価できるルーブリックがやや不足していた。例えば、授業⑤のグループで豊かさ定義をまとめたものや、授業⑥で出した課題：自分の興味のあるテーマ探してくる作業、授業⑦以降開始した各々の調査データや図書資料についての情報を提出したもの、授業⑧の気候変動ウェビングを模造紙にまとめたもの、授業⑨の必修選択学習報告会、授業⑨の課題：地球温暖化の定義づけやゲストへの質問、授業⑩のワークシート（感じたことを大切にしてほしいというゲストの意図もあり）などである。それ自体が評価できない場合でも、次につながる活動であるため最終的には何らかの評価をしていることにはなるが、活動に重点を置きがちな授業構成にルーブリック作りが後追的にならない工夫が必要である。多岐にわたる活動のルーブリック作りの難しさも感じているが、研修等で教員側が様々なアイデアを得る努力も必要である。

#### 第4フェーズ：【異なる立場への理解】【解決策の模索】【まとめ・表現】

##### 1. このフェーズでの目標

- 目標 1) 生徒たちが、インドネシアとの Workshop に向けて、十分な調査・情報の共有・テーマについての理解を深めるとともに、各自の具体的な目標を設定して積極的に臨む。
- 目標 2) 生徒たちが、グループでの情報の整理を通して、他のメンバーと協働しながらロイロの一とやパワーポイントを用いて英語での発表を準備や、その他のワークに取り組む。
- 目標 3) 生徒たちが、Workshop と各自の探求・まとめと発表という2本柱で進む3学期のスケジュールのイメージを掴み、各自計画的に学習を進める。
- 目標 4) 生徒たちが、自分たちの Workshop 経験を通して、英語でのディスカッションに慣れるとともに、状況背景の異なる人とのコミュニケーションを語学力に関わらず積極的に行える意欲を身につける。
- 目標 5) 生徒たちが、(英語力以外で) 海外とのディスカッションをより意義深いものにするために必要な事柄(事前準備)について体験的に理解するとともに、にも関わらず予定通りに進まない国際コミュニケーションの経験自体に意義を見出し、次なるコミュニケーションに対する意欲を抱く。
- 目標 6) 生徒たちが、この探究授業を通じて、学びに対する自分の意識の変化について言語化でき、学びの過程で生じた問題点について、「社会の中の自己」の役割を自覚しつつ、どのように自分なりにアプローチしていくのかについて明確な方向性を持つ。

##### 2. 具体的な活動

###### ⑭ 1/13

冬休み中に行ったフィールドスタディについて教員側からのコメントをし、生徒からも感想を述べさせた。その後、冬休みに各自で取り組んできた、グループのテーマに関する調査内容を順次報告し合い、グループとしてテーマへの理解、あるいはインドネシア側の置かれている状況についての理解を深めた。問題点を整理したり、インドネシア側と議論すべきポイントはどこであるのかなどを考えたりした上で、グループとしてどのような内容と構成で発表するのかを決め、Workshop 当日までの各人の役割について話し合い、分担を決めた。



課題：グループ発表のスライドの作成、Workshop に向けた個人目標の設定、アイスブレイク時のゲームに

必要な質問項目を考える、英語のワークシート（本来予定していた英語直前トレーニング中止に代わり）

⑩1/27 インドネシアの高校生とオンラインディスカッション（With the World 社仲介）

2 学期末から準備をしてきたインドネシア高校生とのオンラインディスカッションは With the World 社仲介のもと、司会やアシスタントも協力を得ながら行われた。内容は以下の通りである。



1、イントロダクション（7分間）

グラドルールと当日の流れの説明

2、アシスタントと打ち合わせ（7分間）

- ・事前に各生徒が考えてきた当日の活動における個人目標の確認
- ・プログラム内容や進行への質疑応答

3、インドネシア側とアイスブレイク（10分間）

「共通点探しゲーム」：制限時間の5分以内にどのグループがメンバー是認の共通点を一番多く探し出せるかを競うグループ対抗のゲーム（あらかじめ準備してきた Yes/No で答えられる「食文化・学校・日常生活」に関する質問をして全メンバーの答えが一致したら1点を獲得する）



4、グループに分かれ、環境問題に関する両国チーム発表（20分間）

グループごとに生徒自身が設定した発表・ディスカッショントピックは以下の通り

グループ① 身近なことから考える環境と社会：都会での暮らしか、田舎暮らし、あなたはどちらを選ぶ？（各国の都市部の生活と田舎の生活の様子について）

グループ② 地域コミュニティでできる地球温暖化対策（各国の地域で行われている地球温暖化対策について）

グループ③ 高校生が作るより良い世界：気候変動教育（各国の学校で学習・取り組んでいる気候変動対策について）

グループ④ Stop! 気候変動！再生可能エネルギーへの移行（各国の再生可能エネルギー活用状況）

グループ⑤ メディアの面から考える気候変動（各国メディアでどのような情報が発信されているか）

5、グループでディスカッション（40分間）

ディスカッションを通して、グループトピックに対する問題意識や価値観の共有・議論を行う。生徒は各国の発表で良いと思った対策などについて意見を交換しながら、環境問題について思うこと、実施してみたい活動を伝え合った。

6、アシスタントとの振り返り（6分間）

発表・ディスカッションを通して、できたこと、気づいたこと、感じたことを共有し、個人の目標達成度を確認

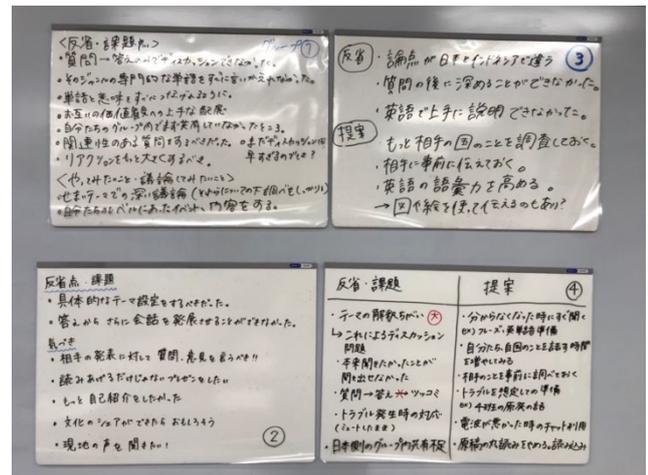
7、クロージング（10分間）

各グループ1人ずつ、話し合った内容や新たに気づいたことについて意見や感想を英語で共有する  
／写真撮影／振り返りシートの各自記入

課題：振り返り（自分の目標に対する達成度とその理由／全体の内容についての意見・考察／今後の課題）

②12/3

初めに、前回のインドネシア高校生との Workshop について、グループごとに反省を行った。特に、国際ディスカッションを行う際の課題について焦点を置きながら意見をまとめ、マナボードに記入し、その後全体で内容を共有した。生徒たちに上がった意見の中で多かったものとしては、英語力の不足により、質問に対して答えを聞いてお礼を伝えるにとどまってしまい、それより深いディスカッションまで到達しなかったということ。専門的な単語を質問された際、噛み砕いて説明できなかつたため、相手とキーワードの共有がうまく出来なかつた。相手の興味により話が逸れてしまった際の軌道修正の難しさ。テーマ設定をもう少し厳密に行ったり共有したりすべきであった（論点のずれ）。もっと互いの様々な考えや状況を共有する時間が必要だった。など、準備段階からディスカッション中の対応まで様々な範囲に及んだ。英語力そのものの改善には限界もあるものの、十分に行つたように感じていた事前準備をさらに徹底的に行うことで、国際ディスカッションの質をある程度改善する余地はあることを感じた様子であった。2コマ目は、次週この授業を代表してポスタープレゼンテーション発表に臨むグループによる事前発表を行った。平和構築のための平和構築の方法ということで、コンポストやマイ箸の持参など様々なアイデアを考えていたが、発表全体としてのバランスや、具体策にみられる問題点について多くの質問を受けた。最後に本時の「学びの記録」を提出した。



②2/17 2年 WWL3 科目合同 最終ポスタープレゼンテーション発表会

2年の WWL3 科目の生徒が一同に会して行う1年の総まとめとしてのポスタープレゼンテーション発表会が行われた。どの授業からも選ばれたグループによる個性的な発表が行われた。発表内容は「各授業の内容と関連した具体的平和構築の方法の提言」であり、10分間の発表の後、5分間の質疑応答が行われた。グローバルスタディの授業では具体策について授業内で考えたり議論したりする時間をとってこなかつたため、準備が難しかったと思われるが、それでもよく内容を整理し、自分たちなりに深め、具体的アクションまで考え抜いていたように感じた。残念ながら賞を獲得することは出来なかつたが、立候補をし、準備を進めてきた生徒たちにとっては大きな経験となつたであろう。



- 課題：
- ・「1年間の学びの記録—平和構築のための私の調査報告と提言」について1人2分間の発表準備（発表資料はロイロノートで提出）
  - ・上記の内容についての2000字のまとめレポート

1 コマ目は、ランダムに作ったグループに分かれて「1年間の学びの記録—平和構築のための私の調査報告と提言」というテーマで、2分間発表と質疑応答を行った。生徒同士でタイムキープや進行、動画撮影を行い、相互評価シートに気づいた点を書き込んだ。一人一人のテーマは異なるものの、気候変動という大きな問題意識は共通している。最後には問題解決の提言を組み込んでいるため、こちらの実行可能性についても様々な意見交換をした。発表についての質疑応答が全員終わった後は、それぞれの提言についてのディスカッションを通して、アクションするということについての気づきや問題点について話し合い、シートに記録した。2 コマ目は、全体で集まり、先週最終ポスタープレゼンを行ったグループが提言したアクションプランについて、内容の再度の共有と実際的な計画について話し合った。中には、自分の所属するクラブのコートの空きスペースで実験的にコンポストの試みをすることができるといった提案もあり、実現に向けての実際のアクション段階に入ってきたことを確認した。



### 3. 活動の評価方法

■ 冬休み中に各自行ったフィールドスタディの記録シートのルーブリックは以下の通り

フィールドスタディ記録シート				
	S	A	B	C
自分の質問と相手の答え	自らの問いを明らかにするための、問題の本質に迫るような効果的な質問ができており、かつ相手から重要な回答を引き出せている	自らの問いを明らかにするための、問題の本質に迫るような効果的な質問ができている	質問の内容が物事の本質に迫るものではなくやや表層的・短絡的な質問となっている	質問ができていない、あるいは質問が非常に表層的・短絡的である
他のメンバーの質問と答え ???		他のメンバーの質問の中から問題の本質につながるような重要な内容に着眼できている	他のメンバーの質問の中から問題の本質につながるような重要な内容に着眼できているとはやや言い難い	他のメンバーの質問の中から重要な内容に着眼できていない
調査を通して明らかになったこと		知識と知識、意見、考察が有機的につながる記述が見られ、自分なりの深い洞察とクリエイティブな広がりが見られる。	自分なりの思考の深まりを見出そうとはしているが、短絡的・表層的な感想や疑問、意見にとどまっている。	自分なりの思考の深まりが見られず、考えが主張できていない。
仮説の検証		仮説の検証に論理性がある (得た情報の分析が自分なりの検証結果と結びついている)	仮説の検証にやや論理性が欠ける (得た情報の分析が自分なりの検証結果と結びついていない)	仮説の検証に論理性がない、あるいは仮説の検証ができていないとは言えない
自分なりに考えたこと さらなる疑問 今後の探求課題	テーマの本質に関わるような非常に鋭い問題に気がついており、更なる探求の深まりを予想させる展望が示されている。	テーマの本質に関わる問題に関わる適切な展望が示されている。	新たな展望が示されているが、テーマの本質に関わるような深いものとは言えない。	今後の展望が示されていない。

■冬休み中に各自行ったインドネシア Workshop に向けたテーマに関する各自調査のルーブリックは以下の通り

冬休み各自調査			
	A	B	C
着眼点	テーマが持つ問題の本質を明らかにするために必要な、自分なりの重要かつ鋭い着眼ができています	テーマが持つ問題の本質を明らかにするための着眼を目指してはいるが、鋭さや自分なりの視点がやや不足している	テーマが持つ問題点の本質に迫るための着眼点を設定できていない
情報の量と質(根拠)	自らの主張を裏付けるための情報が、十分な量/根拠が明確/効果的である	自らの主張を裏付けるための情報が、やや不十分な量/根拠がやや不明確/あまり効果的ではない	自らの主張を裏付けるための情報が不足/根拠が不明確/効果的ではない
調査を通して明らかになったこと	知識と知識、意見、考察が有機的につながる記述が見られ、自分なりの深い洞察とクリエイティブな広がりが見られる。	自分なりの思考の深まりを見出そうとはしているが、短絡的・表層的な感想や疑問、意見にとどまっている。	自分なりの思考の深まりが見られず、考えが主張できていない。

■授業⑨の英語ワークシートの課題のルーブリックは以下の通り。

A	B	C
議題について、賛成意見、反対意見を予測し、それに対して英文の会話を書き上げることができている。	議題について、賛成意見、反対意見のどちらかを提示し、それに対して英文の会話を書き上げることができている。	議題について、英文の会話を書き上げているが、内容の深まりがない。

■授業⑩、Workshop with Indonesia の後に提出した振り返りシートのルーブリックは以下の通り。

	A	B	C
自分の立てた目標に対する達成度とその理由	自身の目標に対する達成度とその理由がしっかりと整理されている。	自身の目標に対する達成度に対して理由が不十分である。	自身の目標に対する達成度とその理由が整理されていない。
[発表] 英語の技術だけでなく、 全体の内容を通しての 「意見・考察」	全体の内容を通して考えを深めることができている。	全体の内容を通して考えを表面的な理解はできている。	全体の内容を理解することができていない。
[ディスカッション]英語 の技術だけでなく、全 体の内容を通しての「意 見・考察」	全体の内容を通して考えを深めることができている。	全体の内容を通して考えを表面的な理解はできている。	全体の内容を理解することができていない。
今後の課題	発表・ディスカッションを基に今後の課題を設定し、具体的な計画を示すことができている。	発表・ディスカッションを基に今後の課題を設定し、大まかな計画を示すことができている。	発表・ディスカッションを基にした今後の課題を設定が見えていない。

- ②の2分間発表に関するルーブリックは以下の通り。生徒たちが自分たちで撮影した動画を後で教員が確認しながら評価を行った。

2分間発表			
	A	B	C
内容が整理されている	自分なりの観点を持って整理された情報を効果的に配置できている	自分なりの観点がやや不明確である、又は情報の整理にやや欠ける	自分なりの観点による内容整理ができていない、やや情報の羅列にとどまっている
伝え方	声の大きさや抑揚、話し方などが効果的で、聴衆を引き込み理解を促す伝え方である	声の大きさや抑揚、話し方などがやや不明快で伝わりづらく、聴衆の理解を促し切れていない	声の大きさや抑揚、話し方などが不明快で聴衆が理解しづらい
スライド	スライドの情報が発表内容の要点を明確・効果的に伝えるものである	スライドに要点が明確に記載できていないため、効果的に内容を伝えきれていない	スライドに要点が記載されておらず、聴衆に要点が伝わりづらい

- ②の授業時にワード文書のエアドロップで提出した1年間の学びの記録レポートについてのルーブリックは以下の通り。生徒には事前にルーブリックの観点項目を伝えた上でまとめの作業に当たらせた。

1年間の学びの記録～平和構築のための私の調査報告と提言			
	A	B	C
観点に基づいた情報整理	自分なりの観点を持って情報を整理できている	自分なりの観点がやや不明確である、あるいは観点は明確であるが情報の整理がやや不足している	自分なりの観点が不明確であり、情報の整理ができていない
情報の量と質(根拠)	自らの主張を裏付けるための情報が、十分な量/根拠が明確/効果的である	自らの主張を裏付けるための情報が、やや不十分な量/根拠がやや不明確/あまり効果的ではない	自らの主張を裏付けるための情報が不足/根拠が不明確/効果的ではない
着眼点	表面的な事柄にとどまらず、問題の本質に迫るような鋭い着眼点を持っている	やや表面的な事柄にとどまっており、問題の本質に迫るような着眼点として鋭いものとは言えない	表面的な事柄にとどまっており、問題の本質に迫るような着眼点となっていない
考えの主張 思考の深まり	知識と知識、意見、考察が有機的につながっており、自分なりの深い洞察とクリエイティブな広がりが見られる。	思考内容が、やや短絡的・表層的な感想や疑問、意見にとどまっている。	自分なりの思考の深まりが見られず、自身の考えが主張できていない。
「平和」のイメージ	自分なりの「平和」のイメージが明確に示されており、具体的に想像ができる	自分なりの「平和」のイメージがやや不明確であり、具体的な想像がややしづらい	自分なりの「平和」のイメージが示されておらず不明である
提言の実行可能性 オリジナリティ 「平和」とのつながり	示された提言が、十分な調査をもとにした、実行可能でオリジナリティのあるアイデアになっている	示された提言の実行可能性がやや不明確である、又は実行可能性はあってもややオリジナリティに欠ける	提言が示されていない、あるいは実行不可能な内容である

- その他、2/3 に記録させた「学びの記録」については年間を通して同一のものを使用した。(1,2 学期と同じ)

	新しい事実・知識の量/質とその整理	他者や自分の主張の量/質とその考察
A	新しい事実・知識の量/質が十分で、自分の観点をしっかりと整理されている。	他者や自分の主張の量/質が十分であり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多く見られる。
B	新しい事実・知識の量/質がある程度あり、ある程度の情報のまとまりになっている。	他者や自分の主張の量/質がある程度あり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とをある程度つなげて考察まで発展した記述が見られる。
C	新しい事実・知識の量/質が不十分で、内容の整理がなくそのままの羅列となっている。	他者や自分の主張の量/質が不十分で、考察が見られない。

※その他に提出させた課題としては、インドネシア Workshop のアイスブレイクのために準備した質問項目、2 分間発表の際に欠かせた相互評価シートなどがあるが、これらは細かく評価をつけることが難しいと考えた。インドネシアとの Workshop 中のグループ発表、フリートークの中で行われた発言などは、動画等を見返して多少の評価をすることはできたが、詳細な評価づけをすることが難しかった。Workshop 時の評価については昨年度も難しさを感じたので、今後検討していく必要を感じる。

#### 4. 検証

##### ■目標の達成度・課題

- 目標 1) 生徒たちが、インドネシアとの Workshop に向けて、十分な調査・情報の共有・テーマについての理解を深めるとともに、各自の具体的目標を設定して積極的に臨む。
- 目標 2) 生徒たちが、グループでの情報の整理を通して、他のメンバーと協働しながらロイロの一とやパワーポイントを用いて英語での発表を準備や、その他のワークに取り組む。
- 目標 3) 生徒たちが、Workshop と各自の探求・まとめと発表という 2 本柱で進む 3 学期のスケジュールのイメージを掴み、各自計画的に学習を進める。
- 目標 4) 生徒たちが、自分たちの Workshop 経験を通して、英語でのディスカッションに慣れるとともに、状況背景の異なる人とのコミュニケーションを語学力に関わらず積極的に行える意欲を身につける。
- 目標 5) 生徒たちが、(英語力以外で) 海外とのディスカッションをより意義深いものにするために必要な事柄(事前準備)について体験的に理解するとともに、にも関わらず予定通りに進まない国際コミュニケーションの経験自体に意義を見出し、次なるコミュニケーションに対する意欲を抱く。
- 目標 6) 生徒たちが、この探究授業を通じて、学びに対する自分の意識の変化について言語化でき、学びの過程で生じた問題点について、「社会の中の自己」の役割を自覚しつつ、どのように自分なりにアプローチしていくのかについて明確な方向性を持つ。

##### ・目標 1)、4)、5) について

今回のインドネシア高校生との Workshop については、できるだけ生徒自身が興味を持って探究をした結果、議論したい内容について主体的に参加してほしいというねらいがあったため、2 学期末からテーマの設定について、生徒たち自身の話し合いによって決定してきた。また、ワークショップの構成自体も生徒主体で決定してきた(生徒たちは WWLC 国際イベント IOM(International Online Meeting)を経験済み)。従って、グループのメンバーが興味を持てる内容のテーマについて、各自の調査を経て、グループで発表内容の調整・深化を図りながら準備してきたはずである。そういう意味においては比較的高いモチベーションで調査・情報の共有・テーマへの理解は行え

たのではないかとこちらは考えていた。しかしながら、実際の冬休みの個人調査については、人により深め方の程度にも質にも差が生まれていたように感じた。事前にどの程度まで、どのような点に注意をして調査をしていくべきかについて事前に丁寧に伝える必要があったように感じた。そして、簡単に使いがちな専門用語についてはディスカッションにおいて重要なキーワードとなるため、噛み砕いて説明が可能な程度までさらに調べて英語まで準備させておくべきであった。また、こちらが発表したい内容についての調査は十分である場合でも、相手側についての情報を調べきれていないという状況が発生したため、インドネシアについて共に学ぶ時間というのも作ることができればよかった。しかし、これについては時間的な問題があるように感じた。以上を踏まえつつ、国際ディスカッションというものに関して、授業④で生徒自身が多く意見をあげている内容も含めて、今回は次のような明確な課題が見えた。

- (1) テーマの設定について、生徒自身の興味に基づきつつも、それが議論の深化を可能にするものであるか、あるいは事前に深めておくべき問題点はどこにあるかについて、こちらがアドバイスを行うべきである。  
(ディスカッションはやってみなければ分からない点があるので非常に難しいが)
- (2) そもそも、「気候変動」についてディスカッションすること自体が難しさを伴うのではないか。  
(今年度、共通テーマとして、ディスカッションをイメージして「気候変動」を意識させてきたが、日本語同士であったも非常に難しい議論になる可能性のあるテーマである)
- (3) 英語を補うだけの準備の意味があるとはいえ、やはり英語力自体が生み出す壁の存在は大きいのではないか(アシスタントがついているとはいえ、頼りすぎるのは良くないという点がある。伝えたいことはあるが伝える語彙が見つからないというもどかしさを多くの生徒が抱えていた)。そういう意味で、目標 4) 英語でのディスカッションに慣れるという点では、もちろん経験値としては有効であったと考えるが、状況背景の異なる人とのコミュニケーションを「語学力に関わらず積極的に行える意欲を身につける」という点に関しては、それを可能にするほどの個人的な英語コミュニケーションの回数も時間も避けていないため、人によっては達成できていないと感じる。しかしながら、「英語でスムーズに話したい」という意味の意欲においては(うまくいかなかった経験を通して)かなりの受講生たちが達成したと考える。目標 5) については、この意味において、そして授業④の中でおおむね達成できたと考える。

#### ・目標 2) について

生徒たちは、年間を通して、他のメンバーとの協働を非常に積極的に行うことができていた。今年度の初めは、全体の人数が多いことに加え、昨年の BASIC からの引き続きのメンバー以外との積極性やディスカッションの深さの差について危惧することもあったが、参加者は、多少の性格の差による態度の差こそあれ、毎回課題を非常に肯定的に受け止め、一生懸命に自分なりの意見を自分で生み出そうとする姿勢が見られた。これは、積極性のある生徒から相乗効果で良い影響を与え合った結果であると考えられる。しかしながら、実際の成果物としてこちらが目にする Workshop における英語発表などは、実際のところ個人のグループへの作業的貢献度について細かく知ることは出来ない。また、作業を進めるにあたってそれぞれが担う役割(リーダーシップの発揮具合なども含め)については細かく評価することも難しい。グループの共同作業の実態については把握が難しいという限界を探究授業ではいつも感じている。また、成果物はグループとしての評価になるため、個人の貢献度が高い場合でもその評価はグループとしてならされてしまう。しかし、総じてこちらが見て把握できる範囲での彼らの他のメンバーとの協働については今年度は非常に問題なく上手くいった点であったと言える。

#### ・目標 3) について

これについては、特に時間の限られた 3 学期に、年間の探究活動の各自のまとめを進めつつ、授業としての大きなイベントである Workshop を抱えていたため、生徒たちにとっては 2 本柱の内容で進められる状況であった。授業内で各自の探究について扱う時間がなくなった時にも、自分なりに探究を黙々と進めていくというのは、日

頃忙しい生活を送る生徒たちにとっては非常に難しいことのように思う（部活動の参加具合にもよるが、大抵はハードな活動と両立しながら受講している）。やはりどこかで細かく各自の探究のチェックや提出をさせることでペースづくりとする必要はあったのかもしれない。20人を超えるような多い受講生を抱え始めると授業内個別チェックというのは難しくなる。各自探究を行う際のスケジュール管理は、生徒のみならず教員側の課題としてのしかかってくる。2本柱で進む授業のタスクイメージ自体はこちらも繰り返し説明していたので理解はできていたと思うが、こちらがどうしても伝えっぱなしになってしまっていたという問題が残る。WWLCの授業は様々な事柄に授業として挑戦していくものであるが、課題の負荷が大きいという特徴も同時にある。内容だけではなく、タスクを管理してスケジュールリングをうまく行いながらそれらをこなしていくということ自体にも学習価値があるのではないかと考える。1つ1つをただこなすのではなく、高い質を維持しながら行っていくという力が求められることを改めて感じた。

#### ・目標6) について

授業②における「1年間の学びの記録—平和構築のための私の調査報告と提言」というテーマの2分間発表とそのまとめレポートは、多くの生徒が発表時間を超え、レポートの文字数をオーバーしたいとの申し出をしてきた。こちらが考える以上に生徒たちの中には、伝えたい、表現したい内容が多かったということである。発表時間は人数の関係上これ以上伸ばすことはできなかったが、レポートの文字数はもっと多く設定すべきであった。今回は今まではなかった、「平和構築のための提言」というテーマも入っている。学びの集大成として、各自フィールドスタディや様々な外の世界とアクセスして学んだ者として、ぜひ世界の問題を他人事ではなく「社会の中の自己」という認識のもと、考えを構築してほしいという願いがあった。3年時には海外の高校生とともに具体的なアクションを起こしていくという目標がある。それにつながるよう、まずはグローバル課題の様々な側面からの認識、違いや価値の認識、自分なりのテーマの探究、企業やNGOなどのフィールドでの学び、海外とのディスカッションなどを今年度は行ってきた。生徒たちの発表内容は、それら今年度の様々な経験を自分なりの思考と結びつけながら整理・分析し、高校生らしい柔軟で軽やかな提案が生み出されており、非常に興味深い内容であった。しかしながら、中には具体的な提言まではできていないものもいて、明確な方向性に欠ける者もいた。これは、テーマの大きさによるところもあった。しかし、アクションを大きな目標としておいてこなかった今年度の授業内のまとめとしては、目標として記述はしたものの、こちら側はあまりそれを求めていないところもあるため、問題には感じていない。それよりも、生徒たちの発表は、見事にグローバルな問題の中から自分事のできるテーマに結びつけながら、社会の中の自らの役割を自覚しつつ解決を見出そうとする内容が非常に多かった。それは、1学期、2学期のまとめの内容から確実に発展、深化した者であったように感じる上に、そのことを自分なりによく言語化して表現できていた。

#### ・まとめ

【異なる立場への理解】【解決策の模索】【まとめ・表現】という観点からこの第4フェーズ(違いを知る、共に考える)を整理する。【異なる立場への理解】については、インドネシア高校生とのWorkshopという経験は現時点で我々が用意できる最善の学習機会であり、反省はあるもののできる限りの準備をして臨んだ結果、生徒たちにとっては反省の時間に様々な意見が出てくる有意義な経験となったことを感じた。それは、単に上手くいった経験というよりはむしろ、違いによる理解し合いの難しさや予想外の認識やコミュニケーションのズレの経験からこそむしろ学ぶことが多かったように感じた。異なる立場への理解は、あるいは相手に関する調査を必要とするのであろうが、異なる立場というものへの理解は確実に深まった。【解決策の模索】については、1年間の最後の各自のまとめ作業の中で平和構築の提言というテーマを入れるところで各々がアイデアを出すこととなった。授業内では解決策を見出すという観点でのワークや知識は何も取り入れていないため、生徒たち自身がこれまでの間接的な学びや各自で進めてきた調査の中からヒントを見出して取り組む結果となった。そのため、人によ

て解決策そのものの現実性や具体性に非常に大きな差が生まれてしまったという反省点がある。しかしこれは、個人で探究を行うと決めた今年度の方針自体がその結果をある程度決定づけていたという面が否めない。解決のアクションそのものは3年生の目標として設定されているため、あまり力を入れてこなかったという現実もある。授業の最終的な方向性については今後も検討の余地があるように思うが、少なくとも解決策を模索しようとする姿勢自体はほとんどの生徒が獲得したのではないかと考える。【まとめ・表現】については、こちらの設定した発表の時間やレポートの文字数が少なかったという反省があるため、生徒の立場からしてみると、十分に具体的な探究活動の経験や思考を表現しきれなかったという面があるかもしれない。しかし、伝えたいことが明確であればあるほど、指定された字数や発表時間に的確に答えることは可能になるはずである。大幅に時間を超えず、短くとも要点を効果的に盛り込んだまとめの技法についても、身につけて欲しいと感じる。表現はほぼ全ての生徒が非常に長けており、態度も堂々としていた。しかし、(時間的制約上)グループ内発表という形をとったため、ややリラックスした状況であり、発表のピリッと緊張感の漂う正式な雰囲気は欠いてしまったようにも感じる。場の提供は教師側の役割であるため、より「特別な状況」の中、それでも簡潔に的確に相手に伝えるという経験を積極的にさせていく必要を感じた。

##### 5. 今後改善すべき点 (フェーズ4と1年間全体において)

###### ・インドネシア Workshop について

どうしても3学期という時間的制約が伴うものの、インドネシア Workshop の様々な反省から考えると、やはりまだもう1段階ほど、準備に時間を費やせばよかったように感じる。それは特に、相手側(インドネシアという国・文化・歴史など)についてよく知るといことである。英語についても、ディスカッションで予想されるキーワードを中心に、相手に噛み砕いて説明できる程度には準備しておく必要がある。テーマについては、引き続き生徒自身から湧いてくる興味に添いつつも、それが十分にディスカッション可能な者なのか。そして相手にテーマを伝える際に認識のずれが発生しないようにするにはどうすれば良いのかについて、検討する必要がある。英語力自体を急に伸ばすことはできないため、それを十分に補えるだけの準備をさらに工夫する余地は十分にある。

###### ・問題解決のためのアクションについて

カリキュラム上、3年生のグローバルスタディで実際のアクションを起こすという目標がある。しかも、昨年度は2年時にアクションを取り入れた結果、それがし辛くなったという反省点があった。そこで、今年度はアクションについては極力具体的に考えさせる機会を授業内には敢えて作らないようにした。しかしながら、2年 WWL 最終プレゼンテーションのテーマが平和構築への提言ということもあり、最後はそれに添わせる形で、各自に提言を考えさせた。もし来年以降もこの方向で行くのであれば、やはり解決アクションそのものについて考える機会を持ちたいと考える。そして、最終プレゼンの発表者が提言に組み込んだアクション自体を実際にどのように取り組んでいくのか、誰が責任を持つのかなどについて、うやむやにならないように扱いたい。

###### ・個別の探究活動について

生徒には十分に説明したつもりではあるが、前述したように、海外との Workshop と各自の探究との同時並行で進めていた。しかしながら、実際に授業時間内に取り組むのは海外 Workshop の方に偏りが出してしまうため、各自の探究は各自に任せる形となってしまった。Workshop の経験を各自の探究学習にどの程度盛り込んでいくのかはそれぞれに任せる形にもなり、ほとんど探究活動は授業では扱えなかった。その間、学外でオンラインセミナーに参加する者、自分で新聞社を訪問したり外の仲間と問題解決アクションを進めている者、探究甲子園など学外の発表の場に参加する者、様々な違いが生じたが、同時に何も行わない者もいた。この、人による「火がつく、つかないの差」については最後まで手を入れることができなかったことが反省である。

###### ・「気候変動」というテーマについて

気候変動というテーマは、非常にグローバルな問題(国境がほぼ意味をなさないという意味で)であり、広がりのある問題であり、解決に向けて考える時には世界の様々な構造的問題も見えてくるという重要なテーマであると考えている。

しかも、気候変動に結びつけたとしても各自の探究テーマを様々な設定することも可能である。2年グローバルスタディでは海外の高校生とディスカッションを行うという目標がある。その際に、各自の探求の学びを生かしつつ、他国の高校生とも一緒に話し合えるというイメージであった。しかしながら、現実的には海外の高校生と気候変動というテーマを話すことは、技術的に非常に難しいことも如実に明らかとなった。授業の探究テーマを気候変動に再び据えたとしても、海外交流の際は、もう少し話しやすいテーマを別に設定する必要があるのかもしれないと感じた。

## 【2学年全体プログラム 「ソーシャル探究」について】

今年度2年生は、昨年度3学期に同じく「ソーシャル探究」プログラムとして、Classi社提供の教材を使用しSDGsの17の目標から「地球温暖化」「水問題」「ジェンダー」等の社会問題をピックアップし、まずは各クラス内でグループ単位のプレゼンテーションを行い、そこで選ばれた代表グループが学年全体会でのプレゼンテーションを行うという、「SDGsの基本」をベースとした探究型活動を行った。

昨年度のホームルームや英語の授業等を巻き込んだ学年全体での取り組みの過程で、グローバル探究BASICを受講していない、いわゆる一般的な生徒の間での、課題解決型・探究型の授業への期待を感じることができたことを受け、今年度はJTB社と連携し、毎年6月に予定されている校外行事及び、その後文化祭までの期間を含めてより大がかりな計画を行った。

具体的には、私学である本校がこれまで課題としてきた「地域とのつながり」を取り上げ、JTB社との協働のもと、本校生徒達が主に在住している近隣自治体8市町から、それぞれ実際の地域課題を提示して頂き、その課題に生徒達が各クラスグループ単位で取り組むというものである。このプログラムは5月から11月頃までの長期に渡って、主にホームルームの時間を使用しながら実施していくものとし、その過程で、6月の校外行事を自分達が考えた課題解決案の実効性を考えるためのフィールドワークとして設定した。その後、フィールドワークの結果をもとに改めて検討を重ね提案をブラッシュアップし、最終的には11月の文化祭時に各自自治体の担当者を招いての発表会を行うというものである。

コロナ禍により、残念ながら6月の校外行事は実施できなかったため当初の予定通りとはならなかったが、12月にフィールドワーク及びクラス内での発表を、そして1月にZoomを用いてのオンライン形式とはなったが、各自自治体担当者を招いてのプレゼンテーションも実施することができた。

### <スケジュール>

1. 6月30日 事前学習としての講演会「地域課題とSDGs、観光のつながりについて」  
株式会社インプリージョン 森なおみ様（資料1）  
（森様は本来、最終発表会にも来校頂く予定であったが、コロナ禍によるスケジュール変更で叶わなかった）
2. 7月14日～ 各自自治体からの課題について生徒へ発表（資料2）。
3. 11月24日 事前学習としてのレクチャー 「地域振興・フィールドワークについて」（資料3）  
本校社会科 三木教諭による
4. 12月8日 各グループが担当する場所へフィールドワーク  
それぞれが担当する課題についてレポート作成（資料3）
5. 12月14日 クラス内発表
6. 1月12日、2月2日 クラス代表による全体発表。各自自治体からも観光課等の担当者にご出席頂いた

### <活動の分析と今後の展望について>

1. 協働してプログラム作成を行ったJTB社からの報告(p.19-20)にもある通り、地域との連携した活動は今後の本校の活動の軸となり得るものであると感じている。各自自治体の方々からもお褒めの言葉を頂き、代表した生徒達にとっても意義のある活動となったと感じている。
2. コロナ禍による数回に及ぶスケジュール変更の影響もあるが、生徒のモチベーションを保ち、フィールドワークをより実りあるものとするためには、自治体からの課題の吟味も含め、相応の準備期間が必要である。
3. 今回の反省点を踏まえ、来年度に向けて引継ぎを次学年と行い、現1年生においては、既に来年度に向けての準備を今年度3学期より始めている。

<各活動の様子>

1. 森様による地域と観光についての講演会（資料1）



本日の講演内容(45分)

- 1 挨拶
- 2 SDGsとは
- 3 観光とは 地域課題とSDGsについて  
観光の振興に観光が促進することについて
- 4 地域と観光の繋がりについて  
大阪ノースでの観光客増進計画（10月10日の発表、11月1日までの観光イベントなど）まちづくり事例説明。
- 5 簡単な課題説明  
これからの観光振興、楽しみながら、地域フィールドワークをするポイント
- 6 質疑応答



(c)naomi mori

2. 各自治体からの課題について（資料2：以下は一例 8市町から全部で56の課題を頂いた）

阪神北エリア（5市町）

	三田市	宝塚市
<p>題目①</p>	<p>★インスタグラムの活用</p> <p>【背景】三田市公式アカウント「さんだスマイル (@sanda_smile)」では、#さんだスマイルや#sanda_smileが付いた投稿をリポストする方式で、三田の魅力を発信しています。この方式とするのは、行政目録で発信するのではなく、「市民目録のリアルな三田のいいところ」を紹介することで、市内外の多くのユーザーに、三田の魅力を身近に感じてもらうことを目的としているからです。</p> <p>これまで様々なキャンペーンを行い、フォロワーも緩やかに増えていますが、若い世代（10～20代）と思われるユーザーからの投稿が少ないように見えています。また、幅広い世代の方へ、三田の魅力がより伝わるような工夫も必要です。</p> <p>➡若い世代（10～20代）が「三田に行ってみよう！」「自分も三田の〇〇をインスタグラムに投稿したい！」と思うようなコンテンツとは。三田のまちの良さを生かした「若い世代の誘客」に繋がり、インスタグラム投稿へ誘導する具体的な内容（三田を訪れたからこそ楽しめること）を考えてください。</p>	<p>【課題】宝塚への観光客が歌劇客（女性・30代以上）が多く、歌劇客に観光客数が依存している点</p> <p>➡【課題題目】宝塚市を他市高校生にPRする観光MAP・モデルコースとはどのようなものか。</p> <p>【課題選定理由】高校生という若い視点からみた宝塚の魅力を発掘してもらうため。</p>
<p>題目②</p>	<p>★インスタグラムの活用</p> <p>【背景】三田市公式アカウント「さんだスマイル (@sanda_smile)」では、#さんだスマイルや#sanda_smileが付いた投稿をリポストする方式で、三田の魅力を発信しています。この方式とするのは、行政目録で発信するのではなく、「市民目録のリアルな三田のいいところ」を紹介することで、市内外の多くのユーザーに、三田の魅力を身近に感じてもらうことを目的としているからです。</p> <p>これまで様々なキャンペーンを行い、フォロワーも緩やかに増えていますが、若い世代（10</p>	<p>【課題】宝塚市への外国人観光客の割合が全体の1%ほどと、大阪や京都などの近隣市と比べて少ない点</p> <p>➡【課題題目】宝塚市の外国人観光客を増やしていくにはどのような観光パンフレットがよいか。</p> <p>【課題選定理由】国際交流色の強い関学生に、宝塚に対する外国人のニーズを探求し、考察してもらうため。</p>

3. 三木教諭による「ゆるキャラ」に注目した事前レクチャー

2年 学年プログラム～地域振興を考える～ 資料1

日本経済新聞

ゆるキャラに「組織票」 ID配布、市長呼び掛けも

2018/11/16 8:44

ご当地や企業のキャラクター日本一を決める「ゆるキャラグランプリ」。大阪府東大阪市で17～18日に行われる決選投票とインターネット投票を合計して優勝が決まるが、三重県四日市市で職員らに投票用IDを配布して「組織票」を投じていたことが判明。同様の手法を取る自治体も幾つかあり、過熱する選挙対策に「やり過ぎ」と疑問の声も上がっている。

実行委員会によると、ネット投票は8月1日～11月9日に実施された。原則1人が1日に1回、1つのIDを使い好きなキャラクターに投票する仕組み。

四日市市では、観光交流課職員がフリーメールアドレスを取得して約2万枚のIDを作成し、希望に応じ各部署にIDを割り振り「こにゅうどうくん」への投票を要請した。1人の職員が複数のIDを使い、1日に何回も投票したケースがあったという。

森脇広市長が市内放送で投票を呼び掛けたこともあり、11月1日時点で約118万票とご当地部門の暫定1位。担当者は「強制はしていない。ルール違反の認識はない」と強調するが、同市の営業手伝いの女性（63）はPRのためであることを理解しつつ「少しやり過ぎ」と話す。

2位「ジャー坊」の福岡県大牟田市はパソコン操作に不慣れな高齢者向けに、公民館に置いてタブレット端末などから投票してもらおうと約1万件のIDを作成した。希望した職員にもIDを配布したが、「業務に支障のない範囲で協力をお願いしている」と説明。

「うなりくん」が昨年1位に輝いた千葉県成田市でも、職員のID約千件を作成していた。1位になって以降、市内外を問わずイベントに呼ばれる回数が増え、担当者は「ランキング上位の方が露出が多い。1位になるメリットは大きい」と明かす。



① 産後の拡大  
三重県四日市市のゆるキャラ「こにゅうどうくん」と「おにぎり」をまとめる森脇広市長（2017年6月、四日市市）＝共同

ゆるキャラブームに異変！人気投票に「組織票」が

今週日曜にご当地キャラクターの日本一を決める「ゆるキャラグランプリ」。上位の自治体で複数のIDを作成して職員に投票を動かせる「組織票」が発見し物議を醸している。多額の予算を広告代理店に払って選挙戦を展開した自治体もあり、「投票のムダ使い」「本来の理念に反する」の批判の聲も、一方、「ひこにやん」や「くまモン」など、莫大な経済効果で注目されてきた「ゆるキャラブーム」は益がかり急を過ぎている。グランプリの参加数はピーク時のほぼ半分の909団体まで減少。投票数も3分の1に、地域振興の切り札とされたゆるキャラを巡る騒動。その背景にある、自治体の疲弊する姿とあるべき振興策を考える。

出演者  
西秀一郎さん（「ゆるキャラグランプリ」実行委員会会長）  
濱谷浩介さん（日本総合研究所 主席研究員）  
パトリック・ハーランさん（タレント）  
坂田真一・田中泰（キャスター）

ゆるキャラブームに異変！人気投票に「組織票」が

ゆるキャラグランプリの投票で「組織票」を投じていた？今、話題の暫定1位と2位のゆるキャラは一体どうなるのか？それぞれの関係者が生出演！  
現在、暫定1位三重県四日市市の「こにゅうどうくん」。

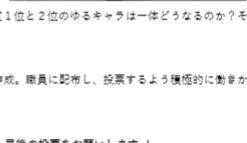
実は市が、キャラクターを1位にするため、投票に必要なIDを2万作成、職員に配布し、投票するよう積極的に働きかけていたことが明らかになりました。

市内放送（市長）  
「これが本当に本当に最後の投票になります。すべての思いを込めて、最後の投票をお願いします。」  
四日市市 市長  
「気持ちにはわからないでもないですけど、1位にして知名度をあげたいというのは、そこまでなくてもよかったと思います。」

四日市市 市長  
「そういう形で1位になっても、うれしくはないです。」  
四日市市観光交流課 課長 小松盛さん  
「(市長の方々は)こにゅうどうくんを応援したく、すごく大好きだといっていたらいい状況。今回の報道等で、ご迷惑をかけた部分では申し訳なく思っています。」

実は、こうした組織的な投票は、他の自治体でも広がっていたことが分かっています。

「目指せ、日本一！」

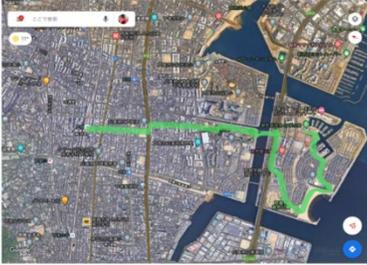


4. フィールドワークの様子と、「事前シート」・「事後レポート」

- ①2-I 4班  
岩崎、阿部、稲垣、仲埜、山口、進藤
- ②伊丹市「若い人たちが遊びにいきたいくなるような新しいイベントを企画してほしい。」
- ③阪急伊丹駅東口9時集合
- ④阪急伊丹駅から、空港までのルートを設定。伊丹スカイパークを散策予定。
- ⑤イオン伊丹と伊丹スカイパークがイベントを考える際に広い場所を確保出来ると思った。だが、そのイベント内容がまだ深く考えられていないので明日、現地に行き多くの人に楽しめるためのイベントを考えたい。



関西学院高等部2年生 地域探究フィールドワークレポート

I組	メンバー	芦屋市	芦屋市には大型の商業施設などがあるわけではないが、芦屋市は普通の暮らしや落ち着いた街並みが魅力です。芦屋市の日常の中でお気に入りの場所、風景を見つけてください。
7班	辰巳・西・松永・矢木・吉永	題目(課題)	
1. 当日の訪問先		4. 題目(課題)に対して私たちが考えた課題解決提案	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 芦屋中央公園</li> <li>② 芦屋総合公園</li> <li>③ 芦屋ビーチ</li> <li>④ 芦屋駅前近辺</li> </ul> 		<p>芦屋市が外資にしている街の風景とは、人々の生活のすぐそばにある海や川、そして自然豊かで誰でも自由に使える広い公園、これらのような決して手近ではないが生活の中に溶け込む多くの自然が芦屋の街を豊かに彩っていると感じた。</p> <p>特に気に入った場所は芦屋ビーチだが、広い上に他のビーチと比べてゴミが少なく綺麗で気持ちの良い場所だと感じた。このビーチから南東の方を見ると生い茂る木々や砂浜の境が一掃できてとてもいい景色だった。秋神祭では一番近く自然を感じられる場所だろう。</p> 	
2. 現地での調査内容		5. その他自由記載	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 芦屋市の中で自分たちが住んでいる市区町村との特筆すべき違いは何か。</li> <li>② 芦屋市の日常の風景とはどのようなものか。</li> </ul>		<p>ボールを使って自由に遊べる公園がいくつかあるのは最近では珍しいことだと思った。富川地蔵堂も残っている。海にぶつかるので波が打って来て面白かった。芦屋総合公園には自然を学ぶデジタルコースのようなものがある。</p>	
3. 現地で気づいた点や新たな発見			
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 大きな公園がたくさんあった。</li> <li>② 芦屋市の南側を走る大坂道や市街の真ん中を通る芦屋川など水と共存している町だった。</li> <li>③ 南側に住宅が密集していた。</li> </ul>			

6. クラス代表による全体発表。Zoomにて各自治体の担当者からもコメントを頂いた。



## 【研究内容3の具体的な内容とその評価】

<探究型カリキュラムの開発のために>

科目	AI活用アドバンスド	学年	3	単位	2	受講人数 35名
活動の目標	1. AI活用人材を育成する 2. AIを活用して、SDGsの各課題を解決する手法を学ぶ					
教材	自作プリント・学びの記録シート・まなボード・iPad (Classi / ロイロノート)					
留意点	1. AIに関するプログラミングや理論等を学ぶだけではなく、それらをどのように活用して社会的課題を解決するかという活用の点に重点を置いて進めるように教員は留意する。 2. 特に、2年目にあたる今年度は「AIを用いてSDGs各課題の解決手法を考える」という最終目標に向かい、企業・行政・各団体・個人それぞれの立場から実際の社会的課題にどのようにAIが応用されているか、様々な課題にどのようにAIを活用するのかといった、SDGsとAIの関連に留意する。					

<スケジュール>

・授業は、45分間×2コマ。

<p>第1フェーズ: 「SDGsとAIの関りについて学ぶ」</p> <p>・SDGsの各課題の現状やAIの活用事例について学ぶ</p> <p>・なぜSDGsの達成が難しいのか、産業の発展とSDGsの関係性について視野を広げる</p> <p>【課題の設定】</p> <p>【情報の収集】</p> <p>【整理・分析】</p>	① 4/15	<p>・ガイダンス:担当者あいさつ、授業のテーマ/ねらいの解説</p> <p>・「AIとは何か?」をキーワードに、AIのメリット・デメリットをまとめるグループワークを通して、昨年度の学びの振り返りを行う</p>
	② 4/22	<p>SDGsの各課題とAIの関連性を学ぶ①「SDGsの重要性」</p> <p>・SDGsを学ぶ意義について関西学院大学国際学部千原由莉さんの講義</p>
	③ 5/6	<p>SDGsの各目標についてさらに深く学ぶ</p> <p>・SDGs17の目標について、どのような具体的な課題があるか、それらをどのようにすれば解決できるかのディスカッション</p>
	④ 5/13	<p>SDGsの各課題とAIの関連性を学ぶ②「マスメディアにおけるSDGsとAI」</p> <p>・マスメディアにおけるSDGsに関する取り組みとAIの関連性についてMGスポーツ代表取締役社長長谷川昌男さんの講義</p>
	⑤ 5/27	<p>日本産業の歴史とSDGsの関連性について学ぶ</p> <p>・日本の産業の発達とSDGs各課題の関連性についての講義とディスカッション</p>
	⑥ 6/3	<p>SDGsの各課題とAIの関連性を学ぶ③「行政から見たSDGsとAI」</p> <p>・行政の立場から見たSDGs各課題とAIの関連について千葉県市原市副市長東宣行さんの講義</p>
	⑦ 6/10	<p>SDGsの各課題とAIの関連性を学ぶ④「ジェンダー問題から考えるSDGsとAI」</p> <p>・病児保育の現状を通して、ジェンダーに関するSDGs各課題とAIの関連についての講義</p> <p>・5/27の授業で行ったワーク「日本におけるSDGsの達成度が低い課題の要因に関する考察とその改善案」のアイデアの共有とグループディスカッション</p>
	⑧ 6/17	<p>SDGsの各課題とAIの関連性を学ぶ⑤「福祉から見たSDGsとAI」</p> <p>・障がい者福祉におけるSDGs各課題とAIの関連性について特定非営利活動法人みらいず2理事の若松周平さんの講義</p>
	⑨ 6/24	<p>SDGsの各課題とAIの関連性を学ぶ⑥「大規模企業におけるSDGsとAI」</p> <p>・大規模企業におけるSDGsに関する取り組みとAIの関連性について阪急阪</p>

		神ホールディングス式部加那子さんの講義
	⑩ 7/1	・グループプレゼンテーション「日本における SDGs の達成度が低い課題の要因に関する考察」の発表
第2フェーズ: 「SDGs を AI で解決する」 ・AI の構造とその開発について学ぶ ・SDGs を解決するための AI 活用法を考える  【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】	⑪ 9/9	・1学期の学びを振り返り、SDGs の様々な側面についてディスカッション ・グループ毎に、「AI を用いた SDGs 課題の解決手法案」をまとめる
	⑫ 9/16	SDGs の各課題と AI の関連性を学ぶ⑦「衣料業界から見た SDGs と AI」 ・衣料業界における SDGs の各課題と AI の関連性について株式会社フルカイトン代表取締役社長瀬川直寛さんの講義
	⑬ 9/30	2・3年生合同授業「騒がしさを判定する AI 技術の活用」① ・関西学院大学工学部巳波弘佳教授の講義動画を視聴し、Scrach の演習、また「騒がしさを判定する AI」の活用法に関する異学年合同ディスカッション
	⑭ 10/7	2・3年生合同授業「騒がしさを判定する AI 技術の活用」② ・「騒がしさを判定する AI」の活用法に関する異学年合同プレゼンテーション ・関西学院大学工学部巳波弘佳教授よりまとめの講義
	⑮ 10/21	・AI の内部構造とシステム開発の流れについて、関西学院大学工学部巳波弘佳教授の講義 ・「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」最終プレゼンテーションの準備
	⑯ 11/11	・「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」最終プレゼンテーションの準備 ・関西学院大学工学部巳波弘佳教授、および研究室の方々にも参加していただき、ブラッシュアップ
	⑰ 11/18	・1 時間目は 3 年生 WWLC3科目合同プレゼンテーション①に参加し、グローバルスタディクラスの発表を視聴 ・2 時間目は「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」最終プレゼンテーション①として、3 つのグループが発表。
	⑱ 11/25	・1 時間目は 3 年生 WWLC3科目合同プレゼンテーション②に参加し、AI 活用クラス・ハンズオンスタディクラスの発表 ・2 時間目は「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」最終プレゼンテーション②として、3 つのグループが発表 ・2年間の授業のまとめ

<各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について>

#### 第1フェーズ:【 SDGs と AI の関りについて学ぶ 】

##### 1. このフェーズでの目標

目標 1) SDGs の各目標の内容とその現状を知り、なぜ SDGs を学ぶ重要性を学ぶ

目標 2) SDGs の達成度合いに差異があることを知り、なぜその達成が難しいのかその要因を考える

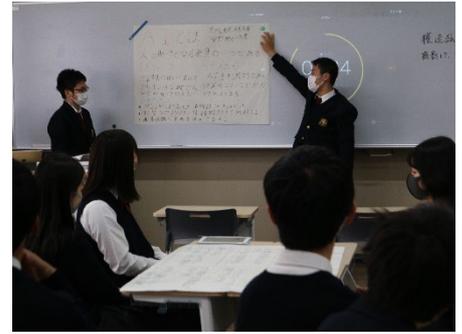
目標 3) SDGs の解決に向けて様々な取り組みをされている企業、団体、行政の実例を学び、AI の活用事例を考える

##### 2. 具体的な活動

① 4/15(木)

・最初に授業オリエンテーションとして、担当者の紹介、そして授業2年目の目標等についてガイダンスを行った。

・その後、昨年度の授業の振り返りを行った。8つのグループに分かれ、「AIと〇〇である」をテーマに、この空欄に当てはまる言葉を埋めるワークを行った。最後に、AIのメリット・デメリットについても書き足し、まなボードにまとめて発表・提出させた。昨年度の授業をもとに、定義を表すもの、実例を表すもの、負の部分を表すものなど、様々な回答が出された。



② 4/22(木)

・SDGsを学ぶ重要性について学ぶため、本校の卒業生であり、サークルでSDGsダイアリー普及の活動を行っている関西学院大学国際学部3年生千原由莉さんをお招きし、SDGsによって世界の国々や企業にどのような変化が生まれているかご講演いただいた。



・2時間目は、SDGsを学ぶ理由について、個人で考えたことをポストイットに書き出し、その後9つのグループに分かれて、それぞれの意見の共有を行い、グループとしてSDGsを学ぶ理由をまなボードにまとめ提出させた。ESG投資やCSR活動等、SDGsが企業に与える影響について様々な話題が出た。最後に、学びの記録をまとめ提出させた。

③ 5/6(木)

・前回の授業において、各グループから出されたSDGsを学ぶ理由について全体で共有を行い、SDGsが国、企業、個人に様々な影響を与えること、さらにこれからの世界においてSDGsが大変重要なものであることを再度確認した。

・その後、全体を4つのグループに分け、それぞれのグループがSDGs17の目標をいずれかを担当する形で、現在世界でその目標についてどのような取り組みがされているか、もしそれをAIを用いて行うとしたらどのようなアイデアがあるかグループ毎にディスカッションを行った。

④ 5/13(木)

・マスメディアにおけるSDGsに関する取り組みとAIの関連性について学ぶため、スポーツのテレビ放送等を行っているMGスポーツ代表取締役社長長谷川昌男さんをお招きし、スポーツ放送においてどのようにAIが活用できるか、また現状すでに活用されている実例等についてご講演いただいた。スポーツ中継にAIを利用することでスタッフの人数を減らすことができる等、様々な話題が提供された。最後に、学びの記録をまとめ提出させた。



⑤ 5/27(木)

・SDGsの現状と世界の産業の発展の関連性について学ぶため、地球誕生から21世紀の現在まで、地球上の資源を人類がいかに利用・消費してきたか、Society5.0に至る過程で、特に産業革命以降環境破壊が進行している経過を講義した。

・その後、「日本におけるSDGsの達成度」を調べ、達成度が低い目標についてその要因を見極め、その改善案を考えるワークを個人で行った。

⑥ 6/3(木)

・行政の立場から見た SDGs 各課題と AI の関連性について学ぶため、千葉県市原市副市長の東宣行さんをお招きし、市原市が行っている SDGs に関する取り組みと AI の活用事例等についてご講演いただいた。特に市原市は「SDGs 未来都市」と「自治体 SDGs モデル事業」にダブル選定されており、様々な取り組みについて学ぶことができた

・2 時間目には「アートの中で SDGs を解決する市民の取り組み」をテーマにグループワークを行い、各グループが考えたアイデアを共有した。最後に、学びの記録をまとめ提出させた。



⑦ 6/10(木)

・病児保育の事業を展開している認定 NPO 法人ノーベルについて調べ、女性の社会進出にはどのような問題があるのか講義を行った。

・7 つのグループに分かれ、5/27 の授業で行ったワーク「日本における SDGs の達成度が低い課題の要因に関する考察とその改善案」のアイデアの共有を行い、グループとしての意見をまとめるためにディスカッションを行った。最後に、学びの記録をまとめ提出させた。

⑧ 6/17(木)

・障がい者福祉における SDGs 各課題と AI の関連性について学ぶため、特定非営利活動法人みらいず2理事の若松周平さんをお招きし、障がい者福祉の現状と SDGs に関する取り組みについてご講演いただいた。福祉の重要性を学びつつ、人的リソースの不足をどのように解決していくかという話題が提供された。

・2 時間目には「社会福祉サービスの需要と供給の不一致を AI を用いてどのように解決するか」をテーマにグループワークを行い、各グループが考えたアイデアを共有した。最後に、学びの記録をまとめ提出させた。



⑨ 6/24(木)

・大規模企業における SDGs に関する取り組みと AI の関連性について学ぶため、阪急阪神ホールディングスの式部加那子さんをお招きし、阪急電鉄が行っている SDGs トレイン等の取り組みについてご講演いただいた。企業は、その企業ならではの強みを生かしながら、SDGs に関する取り組みを行っていることを学んだ。

・2 時間目には「関西学院のリソース(強み)を生かして、どのようにすれば SDGs を解決できるか」をテーマにグループワークを行い、各グループが考えたアイデアを共有した。最後に、学びの記録をまとめ提出させた。

⑩ 7/16(木)

・「日本における SDGs の達成度が低い課題の要因に関する考察とその改善案」をテーマに、7 つの班がプレゼンテーションを行った。評価は教員の他、生徒同士も他者評価を行った。



3. 活動の評価方法

ルーブリックについては、以下のものを使用した。

●グループワークプレゼンテーション「SDGsの達成度が低い要因の考察プレゼンテーション」評価ルーブリック

	課題の考察やその提言に独創性があるか。	課題の考察からその提言に至る論理に説得力があるか。	課題の考察からその提言に至る論理に一貫性があるか。	課題の考察からその提言に至る論理にAIが十分関連しているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	発表の時間は守られているか。
A	課題の考察やその提言に独創性があり、AI活用を学んできた者ならではの発想を含んでいる。	課題の考察からその提言に至る論理にデータが効果的に使われており、説得力がある。	課題の考察からその提言に至る論理に一貫性があり、誰もが納得できる内容である。	課題の考察からその提言に至る論理にAIが十分関連しており、これまでAI活用の授業で学んできた内容を含んでいる。	発表者の声量や視線からこのプレゼンテーションに対する熱意が感じられる。	7分間プラスマイナス30秒で発表が行われている。
B	課題の考察やその提言に独創性が弱い。	課題の考察からその提言に至る論理にデータは使われているが効果的とはいえず、説得力が弱い。	課題の考察からその提言に至る論理に一貫性はあるが、論理の飛躍もあり、わかりづらい部分がある。	課題の考察からその提言に至る論理にAIは関連しているが、その関連性が強いとは言えない。	発表者の声量や視線がこのプレゼンテーションに対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	7分間プラスマイナス60秒で発表が行われている。
C	課題の考察やその提言に独創性がない。	課題の考察からその提言に至る論理にデータは使われていない、あるいは説得力が極めて弱い。	課題の考察からその提言に至る論理に一貫性が弱い。	課題の考察からその提言に至る論理にAIは関連していない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	7分間プラスマイナス60秒以上で発表が行われている。

●「学びの記録」評価ルーブリック

	知識/技術	または	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。情報が整理されている。		知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。深い洞察とクリエイティブな広がりが見られる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。		多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。		感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

●その他、プレゼンテーションについては生徒同士の相互評価を行い、生徒評価の高かった生徒には加点を行っている。

4. 検証

● 目標の達成度・課題

目標 1)SDGs については、BASIC 受講生は1年生のときから、またその他の生徒も昨年より一貫して聞いている内容であるため、一定の理解はしていると感じている。そこには、一般論として重要性を感じている生徒も多いと思うが、それが自分たちの将来に大きく関わっていること、また生徒たちが日常接する様々な企業、団体にとって大きな判断基準の1つとなっていることをこのときに再度確認してもらいたいと感じており、第1フェーズでは少し時間をかけながら行ってきた。その成果もあり、受講生全員に一定の理解は与えることができたように感じている。特に、ESG 投資に関する話題や行政による取り組みが住民サービスにつながっている点等は生徒の関心も高かったように感じる。今後はこのような話題を学習当初の段階で入れるのも効果的かと感じている。

目標 2)SDGs の達成が難しいことは既知の事実であるが、各目標によってその達成度には大きな違いがあり、そこには構造的要因がある場合が多い。今回は日本史担当の教員が本授業を担当したため、日本そして世界の産業の歴史と SDGs に関して理解を促した。そこから第1フェーズ最後のプレゼンテーションに持って行ったわけだが、生徒たちもこの視点は新しいものであったようで積極的なディスカッションが行われていた。特に、江戸時代の日本は SDGs の達成度が非常に高いこと等、教科横断型ならではの学びもあり、生徒への知識の定着も大きく図られたと考えている。

目標 3)第2フェーズで行う「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」提案に向けて、まずは SDGs の具体的な課題や AI 活用の先事例を学ぶことは最も重要な目標であると感じていた。そのため、可能な限り多様な分野、多くの講師をお招きし、様々な講演を行っていただいた。様々な角度からの話題提供となったため、若干わかりにくかったり、同じような議論が続くこともあったりしたことは残念であるが概ね生徒の理解も進んでように感じている。また、そのような話題の深さの差異こそが、各分

野における AI 活用の浸透度、また SDGs 解決に向けての力の入れ具合であることもわかり、一定の達成が図れたものと考えている。

## 5. 今後改善すべき点について

・専門家をお招きすることは非常に効果的である一方、先方の都合等もあり、なかなか授業スケジュールが定まらない点が懸念される。また、AI の活用具合にも大きな開きがあるのが現実である。講師の調整をさらに早くから行いながら、できるだけ AI を十二分に活用している講師な検討が必要である。

・「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」のアイデアを考える上で、それらアイデアが既の実現中、または検討中であることも否定できない。最新の事例にさらい触れる機会を作る必要がある。

## 第2フェーズ：【 SDGs を AI で解決する 】

### 1. このフェーズでの目標

目標 1) 実際に使われている AI の構造や機能について知り、システム開発の流れについて学ぶ

目標 2) AI の活用法についてディスカッションを通して学び、SDGs を解決するための AI 活用法を考える

### 2. 具体的な活動

#### ⑪ 9/9(木)



・1 学期の授業内容について振り返り、7 つのグループに分かれて、SDGs 各課題の中で最も優先して解決すべきと考えるものを話し合い、それを AI を利用して解決する手法をディスカッションした。

・その際、これまで学んできた AI は万能ではないという点を十分に考慮に入れ、どのような AI をどのように組み合わせるのか。果たして、それで本当に課題は解決できるのか。また、コストやリソースの面から考えて実現可能か、商品として成立するのかといった多様な側面から検討することを適宜伝えながらワークを行った。

#### ⑫ 9/16(木)

・衣料業界における SDGs の各課題に関する取り組みと AI の関連性について学ぶため、AI を利用した衣料品の在庫管理マネジメント業務をされている株式会社フルカイテン代表取締役社長の瀬川直寛さんに、在庫管理の必要性とそれらをどのように AI を駆使して行っているのかについてご講演いただいた。

・特に、在庫管理の重要性については、衣料業界が抱える衣料の大量廃棄の問題をお聞きすると同時に、在庫管理の難しさをサイコロを用いた簡単なゲームで分かりやすく解説していただいた。また、生徒の質問から話は瀬川さんがなぜこのような会社を起業したのかという話題にまでおよび非常に充実した講演になった。

・最後に、今回学んだことについて Classi のアンケート機能を用いて振り返りを提出させた。





⑬ 9/30(木)・⑭ 10/7(木)

・2回連続で2年生、3年生の合同授業を行った。関西学院大学工学部巳波弘佳教授の講義動画を視聴し、Scrach の操作を学んだ後に、AI ブロック「騒がしさを判定するAI」を用いて、その活用法に関する異学年合同ディスカッションを行った。

・全体を10グループに分け、それぞれのグループでディスカッションした内容をまなボードにまとめた。

・特に、「騒がしいことが良いと評価される場面」と「騒がしいことが悪いと評価される場面」の2つの場面をヒントとして与え、各グループが自由にディスカッションを行い、最後に全体で共有した。

・巳波弘佳教授にもご参加いただき、最後にフィードバックをいただいた。

⑮ 10/21(木)

・関西学院大学工学部巳波弘佳教授にお越しいただき、AI の内部構造とシステム開発の流れについての講義を伺った。AI の構造やその開発に関する話題は、専門用語も多く、多くの生徒が苦戦していたが、商品というミスが絶対ないものを作るためにどのような手順を踏むのかというテーマは、これまで活用法に関するディスカッション等が多かったため、新鮮な話題として皆が学んでいた。

・その後、本学期の目標である「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」プレゼンテーションの準備を行った。巳波弘佳教授、また教員も順次机間巡視しながら、9/9 に考えたアイデアをブラッシュアップさせるアドバイスをを行った。



⑯ 11/11(木)

・本時も前回の続きとして、最終プレゼンテーションの準備を行った。今回は、関西学院大学工学部巳波弘佳研究室の学生さん3名にも加わっていただき、3名の研究内容についても伺ったりしながら、各グループのアイデア、プレゼンテーション内容のブラッシュアップを行った。

・最終のプレゼンテーションということで、これまでのプレゼンテーション等を振り返り、動画や音楽等、あらゆるリソースを使いながら、自分たちのアイデア、意見をどのようにすればオーディエンスに的確に効果的に伝えること

ができるか、各グループ工夫しながら準備を行った。

⑰ 11/18(木)

・1時間目は3年生 WWLC3科目合同プレゼンテーション①に参加し、グローバルスタディクラスの発表を視聴した。

・2時間目は「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」最終プレゼンテーション①として、3つのグループが発表した。



⑱ 11/25(木)

・1時間目は3年生 WWLC3科目合同プレゼンテーション②に参加し、AI 活用クラス・ハンズオンスタディクラスの発表を聞いた。



- ・2 時間目は「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」最終プレゼンテーション②として、3 つのグループが発表した。
- ・いずれの発表もこれまでにない工夫を凝らしたものはかりであり、発表のレベルの高さを知ることができた。
- ・発表の最後には、枝川豊高等部長より講評をいただいた。
- ・最後に2年間の授業のまとめとして、2 年前、この授業の最初のころであるグループがアイデアとして発表した「炎上防止 AI」が facebook などで実用化されたことを話し、それぞれのアイデアがただのアイデアではなく、実

用化される可能性がすぐそこまで来ていることを説明し、授業を終えた。

・評価は教員の他、生徒同士も他者評価を行った。また、今回学んだことについて Classi のアンケート機能を用いて振り返りを提出させた。

### 3. 活動の評価方法

ルーブリックについては、以下のものを使用した。

#### ●グループワークプレゼンテーション「SDGs 解決のための AI 利用手法プレゼンテーション」評価ルーブリック

	課題（困りごと）からその解決までの道筋がわかりやすく具体的にかつ明確に示されているか。	設定した課題を解決した際のインパクトは、十分に大きいといえるか。	使用されているAIについて、その構造がよく検討されており、実現可能性は高いか。	プレゼンテーションの方法が効果的で、主張をわかりやすく伝えることができているか？	プレゼンテーションの方法が独創的で、ユニークなものだったか？	プレゼンテーションは定められた時間で行われていたか？
A	課題からその解決までの道筋が、非常に具体的かつ明確に説明されている	設定された課題が社会的にも大きな問題として認識されており、解決した際のインパクトも非常に大きい	使用されているAIについて、その構造がよく検討されており、実現可能性も高い	プレゼンテーションが非常にわかりやすかつ効果的に作られており、グループの主張の理解を助けるものであった	プレゼンテーション全体が非常にユニークで独創的なものであった。	10分間プラスマイナス30秒で行われていた。
B	課題からその解決までの道筋が語られているが、具体的かつ明確とは言えず疑問が残る部分がある	設定された課題が社会的に大きな問題として十分に認識されておらず、解決した際のインパクトも弱い	使用されているAIについて、その構造がよく検討されている部分もあるが、全体として実現可能性が高いとは言えない	プレゼンテーションはわかりやすく作られているが、効果的とは言えず、主張の理解を補助しているとは言えない	プレゼンテーションの方法の中には、一部非常にユニークで独創的なものがあった。	
C	課題からその解決までの道筋に論理の飛躍等があり、不明な部分が多い	設定された課題が個人の域を出ておらず、解決した際のインパクトも非常に弱い	使用されているAIについて、構造の検討が不十分であり、実現可能性は低い。	プレゼンテーションにわかりにくい部分、もしくは完成度の低い部分が残っている	プレゼンテーションは独創的とはいえ、これまでもあるような内容であった。	10分間プラスマイナス30秒以上で行われていた。

#### ●グループワークプレゼンテーション「SDGs 解決のための AI 利用手法プレゼンテーション」で気づいたこと評価ルーブリック

	今回のグループプレゼンテーションにおいて「今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだこと」を具体的な事例や体験を含んで400字程度で書きなさい。
A	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことが明確に書かれており、さらにそれが、どのような経験や気づきから学べたのかが論理的に説明なされている。
B	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことは書けているが、それが、どのような経験や気づきから学べたのかが具体的に書けていない。もしくは、それらの因果関係が論理的に書かれていない。
C	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことを明確に書けていない。もしくは、文字数が著しく不足している。

#### ●9/16 第 12 回授業、10/7 第 14 回授業振り返り評価ルーブリック

	今回の授業において学んだことを具体的な事例や体験を含んで400字程度で書きなさい。
A	今回の授業を通して学んだことが明確に書かれており、さらにそれが、どのような経験や気づきから学べたのかが論理的に説明なされている。
B	今回の授業を通して学んだことは書けているが、それが、どのような経験や気づきから学べたのかが具体的に書けていない。もしくは、それらの因果関係が論理的に書かれていない。
C	今回の授業を通して学んだことを明確に書けていない。もしくは、文字数が著しく不足している。

●「学びの記録」評価ルーブリック

	知識/技術	または	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。		知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエイティブな広がりがみられる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。		多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。		感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

●その他、プレゼンテーションについては生徒同士の相互評価を行い、生徒評価の高かった生徒には加点を行っている。

4. 検証

(ア) 目標の達成度・課題

目標 1)AI の機能やその構造の深堀については、十分に時間がとれず達成度は十分でなかったように感じている。特に、システム開発における仕様書等の作成については実例の紹介まで持つていくことができなかつた点が非常に残念である。企業等の方にご講演いただく機会は何度か持ったが、それぞれの広報・業務執行・システム開発の担当者が別であることも多く、一体的な話を聞く機会を持てなかつた。このあたりは次年度以降の課題として考えたい。

目標 2)「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」を提案することは2年間何度も行ってきたことであり、一定の達成度に達したと考えている。特に2年目にあたる本授業では、AI のアイデアをただ出すだけではなく、コストや実用性、リソース等、様々な面から考えられるようになったことは大きな一歩であると考えている。しかしその一方で、課題の設定の部分において、本当にその課題に必然性があるのかという点についてまだまだ甘い部分もあり、だからこそ社会での実例をもっと知っていく必要があるように感じた。

5. 今後改善すべき点について

・様々な企業、団体に訪問し、AI を活用し課題を解決している実例を知る機会をさらに増やしていきたい。その中で、システム開発の場面、商品設計の場面、課題解決の場面とそれぞれの場面について学ぶ機会を得ると同時に、事前にリサーチし、当日の講演と質疑応答、そしてそのまとめと授業の組み立てをもう少し時間をかけて着実にを行う形に整えていきたい。

・自分たちが考えた「AI を用いた SDGs 課題の解決手法」アイデアについて、アカデミックな立場の先生方以外に、実際に企業等で課題に取り組まれている研究者や開発者からのフィードバックや評価を受けるような機会を作っていきたい。

科目	ハンズオンラーニングアドバンスド	学年	3	単位	2	受講人数 20 名
活動の目標	2. 広い意味での「平和」に関わる社会的課題について、自分の言葉で語る事が出来るようになる。 2. 「戦争」「エネルギー問題」という平和に深く関わる社会的課題について、自分事してとらえ、ローカルな視点で語る事ができる。 3. 2 年次から引き継いでいる上記 1, 2 の目標について、社会的な課題を解決するアクションを起こす事ができる。もしくはアクションの内容を考え、計画する事ができる。					
教材	自作プリント・学びの記録シート・参考資料 iPad (Classi / ロイロノート)・ビデオカメラ・マイク					
留意点	1. 生徒たちが自分で決めて主体的に活動する場面をできるだけ多く作れるよう教員は留意する。 2. 各生徒の活動に対する評価のフィードバックは、できるだけ活動後すぐに与えるよう教員は留意する。					

<スケジュール：1 学期>

※①4/15 ②4/22 ③5/6 ④5/13 (⑤5/27 は合同) ⑥6/3 については、a) 「平和」グループ b) 「エネルギー」グループが、主に別々で授業を展開したため、各授業で以下にスケジュールを記載。

a) 「平和」グループ ①～⑥

(昨年度の活動より継続)  第 4 フェーズ 「行動する」  ・完成した Map を用いて、教室を飛び出して平和を伝える活動を展開する  【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ・表現】	①4/15	・ガイダンス：担当者あいさつ / スケジュール確認 ・授業における活動の目的の再確認/言語化 (各自発表) ・翌週の出張授業の指導案作成
	②4/22	・関西学院大学法学部高島ゼミにて出張授業開催
	③5/6	・『原発とヒロシマ「原子力平和利用」の真相』についてのディスカッション ・KG Peace Map を今後どう広げるかのディスカッション
	④5/13	・神戸新聞による取材 ・KG Peace Map を用いた具体的な活動の検討/作業 (グループワーク)
	⑤5/27	・京都大学複合原子力科学研究所山村朝雄教授ご講演 「プルトニウムの光と闇」 「核燃料リサイクルの可能性」
⑥6/3	・KG Peace Map を用いた具体的な活動の検討/作業 (グループワーク) ・各グループによる進捗状況の 5 分間の報告	

b) 「エネルギー」グループ ①～⑥

第 4 フェーズ 「議論の準備」  【事例】 【共通の土台】 【ハンズオン目線】	①4/15	・ガイダンス：担当者あいさつ / スケジュール確認 ・高校生作成動画「世界一大きなやかん」の要点整理
	②4/22	・科学者同士の意見対立－原発推進派(澤田哲生東工大准教授)と廃止派(小出裕章元京都大学准教授)の討論の音声記録を聞きながらワークシートを埋めていく
	③5/6	・講演「脅威にも福音にもなるアルファ放射体」(山村朝雄教授)と高校物理の教科書を使って原子力発電に使われる核分裂について科学的な基本知識を確認する。
	④5/13	・この授業の目的と今後の方針の確認 ハンズオンの在り方を事例(関西電力 40 年超の美浜原発再稼働)研究 ・科学的論拠のまとめとして反原発の論客(高木仁三郎氏)の主張を読む

	⑤5/27	・京都大学複合原子力科学研究所山村朝雄教授ご講演 「プルトニウムの光と闇」 「核燃料リサイクルの可能性」
	⑥6/3	・経団連の発題を受けて議論を開始 ①「原発は本当に〇〇か？」との形式で問いを立てる。 ② 一人ひとつ文献を選んで問いに対して考察



※ ⑦6/10 ⑧6/17 ⑨6/24 ⑩7/1 は合同授業

<p>第5フェーズ 「さらに知る」</p> <p>・社会課題について、自分が学んできたことを基に、さらに知識と理解を広げ深める</p> <p>【課題の「再」設定】</p>	⑦6/10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後のスケジュールの説明</li> <li>・新しく4グループを再結成（「平和」「エネルギー」グループの解体）</li> <li>・各グループの今までの学びの紹介（グループ内発表）</li> <li>・次回発表（大テーマ「原爆」）のための事前調べ</li> </ul>
	⑧6/17	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ発表</li> <li>・2学期最終ゴールの提示</li> </ul>
	⑨6/24	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関西学院大学ライティングセンター大福聡平助手による講義 「論理的思考の概念（トゥルーミンモデル）に関する解説（主張・根拠・論拠・条件）</li> <li>・大テーマ「被爆と被曝」中テーマ「エネルギーと戦争」について、Newspicksを用いた下調べ</li> </ul>
	⑩7/1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「エネルギーと戦争」に関わる新聞記事の切り抜き：夏の課題の予行演習</li> </ul>

<スケジュール：2学期>

a) 「平和」グループ ⑪～⑬

第6フェーズ 「さらに行動する」  ・1学期に引き続き、KG Peace Mapを用いて、教室を飛び出して平和を伝える活動をさらに展開する	⑪9/9 合同	・ガイダンス：宿題回収、福島PBLの報告、今後のスケジュール ・自分の理想像
	⑫9/16	・自分の理想像の共有 ・KG Peace Mapプロジェクトの目的確認 ・プロジェクトの大枠、担当者決め
	⑬9/30	・各グループによる本日のプロジェクトの計画の報告1分間 ・各グループ別活動 ・各グループによる本日のプロジェクトの進捗の報告1分間
	⑭10/7	・各グループによる本日のプロジェクトの計画の報告1分間 ・各グループ別活動 ・各グループによる本日のプロジェクトの進捗の報告1分間
	⑮10/21	・各グループによる本日のプロジェクトの計画の報告1分間 ・各グループ別活動 ・各グループによる本日のプロジェクトの進捗の報告1分間
	⑯11/11	・各グループによる本日のプロジェクトの計画の報告1分間 ・各グループ別活動 ・各グループによる本日のプロジェクトの進捗の報告1分間
	⑰11/18	・WWLC3年生 授業成果報告会 ・ルーブリックを用いた自己評価
【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ・表現】	⑱11/25	・WWLC3年生 授業成果報告会 ・最終課題の提示、作業

b) 「エネルギー」グループ ⑪～⑬

第6フェーズ 「学びの表現」  生徒の手でこれまでの学びを整理し表現する	⑪9/9 合同	・ガイダンス：宿題回収、福島PBLの報告、今後のスケジュール ・自分の理想像
	⑫9/16	・最終プロジェクトの方向性を生徒が主体となって考え始める
	⑬9/30	・1学期に提案した原発に関する質問への専門家の返答をめぐって生徒間で対話
	⑭10/7	・福島県庁復興総合計画課の佐藤安彦さんからZOOMを通して被災地の視点からの話を聞く
	⑮10/21	・これまでの授業を振り返り、プロジェクトでの発表の論点を絞り役割を決定 ・プロジェクトの形を具体化
	⑯11/11	・原稿を同じ論点同士ペアになって相互チェック ・リハーサルを枝川部長に聞いてもらって論評を頂き対策を立てる
	⑰11/18	・グローバルスタディの海外との双方向授業を、Zoomを通じて見学・参加する ・各自練り上げてきた原稿作成者が読み上げ、他の者は論点の終わりに気づいたことを指摘
	⑱11/25	・これまでの学びを討論劇「どうする日本の原発」を聴衆にも賛否投票に参加してもらう形で発表。本番を終えての振り返り

<各フェーズの1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について>

●平和グループ

第4フェーズ：行動する 【情報の収集】【整理・分析】【まとめ・表現】

①4/15 ②4/22 ③5/6 ④5/13 (⑤5/27は合同) ⑥6/3

## 1. このフェーズでの目標

目標 1) KG Peace Map を用いて、他者に平和について考えてもらう機会をつくること出来る

目標 2) 実践を通して改善・反省点を見出し、次のアクションへと繋げることが出来る

目標 3) KG Peace Map を用いた、さらなるアクションを起こすことが出来る

## 2. 具体的な活動

### ① 4/15

- ・4/22 の関西学院大学法学部高島ゼミでの出張授業に向けての授業プランの作成 (資料1)、準備物の確認、当日の役割分担。

### ② 4/22

- ・関西学院大学法学部高島ゼミ生 14 名と共に、KG Peace Map を用いてキャンパスを回る。その後、会議室にて平和について考えてもらうワークショップ (個人・グループワーク) と共に、KG Peace Map についてのアンケートを実施 (資料2)。終了後、課題として学びの記録 (資料3) を提出。
- ・「原子力平和利用」をキーワードに、ヒロシマと原子力を考えていくきっかけとして「原発とヒロシマ：『原子力平和利用』の真相」を読むことをGW中の宿題として指示。



### ③ 5/6

- ・「原発とヒロシマ：『原子力平和利用』の真相」について、「原子力平和利用」は実際にあり得るのか、について以下の点に触れながらディスカッションを実施。  
核兵器禁止条約 / 外務省の見解 / 次回の山村教授への質問
- ・KG Peace Map を今後どのように広めていくか、について、学びの記録を用いながら、マップの改善点や今後の宣伝方法などについてディスカッションを実施。

### ④ 5/13

- ・神戸新聞による取材
- ・1)各学部への呼びかけグループ 2) Map30 秒紹介動画 3)アッセンブリー/オープンハイスクール呼びかけグループの3つのグループに分かれ、Map を広げていく具体的な作業を実施、企画書 (資料4) の作成と提出。



### ⑤ 5/27

- ・京都大学複合原子力科学研究所山村朝雄教授による講演「プルトニウムの闇と光」「核燃料リサイクルの可能性」
- ・課題として、「プルトニウムの闇と光」「核燃料リサイクルの可能性」の内容を自分の言葉で200字程度で考察。

### ⑥ 6/3

- ・1)各学部への呼びかけグループ 2) Map30 秒紹介動画 3)アッセンブリー/オープンハイスクール呼びかけグループの3つのグループに分かれ、Map を広げていく具体的な作業を実施。
- ・スライドを用いて、各グループによる進捗状況の5分間 (3分発表2分質疑応答) の報告 (資料5)。ルーブリックを用いた評価を実施。



### 3. 活動の評価方法

#### ● 活動のルーブリック

#### ② 4/22 出張授業の学びの記録

	知識/技術	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエイティブな広がりが見られる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

#### ⑤ 5/27 「プルトニウムの闇と光」「核燃料リサイクルの可能性」の内容を自分の言葉で200字程度で考察

課題①：講演で触れられた内容を基に、プルトニウムの闇と光の内容を自分の言葉で200字程度で述べなさい。  
課題②：講演で触れられた内容を基に、核燃料リサイクルの可能性について200字程度で考察しなさい。

	課題①	課題②
A	2つのポイントの内容について、大変簡潔且つ明確に自分の言葉で述べている。	講演の内容と自分の意見とが有機的につながり、大変深い考察がなされている。
B	2つのポイントの内容について、ある程度簡潔且つ明確に自分の言葉で述べている。	講演の内容と自分の意見とがある程度つながっており、考察がある程度なされている。
C	2つのポイントの内容について、簡潔且つ明確に自分の言葉で述べていない。	講演の内容と自分の意見とがあまりつながっておらず、考察があまり見られない。

#### ⑥ 6/3 各グループによる進捗状況の5分間の報告

各班取組進捗報告

- ・3分間で報告をすること
- ・その後の2分間の質疑応答についても自分たちで司会をすること

	簡潔さ	時間内
A	ポイントに従って、カードを用いながら大変簡潔に進捗状況を説明することができる。	時間設定の+-15秒で3分間の報告を終えることができる
B	ポイントに従って、カードを用いながらある程度まとめて進捗状況を説明することができる。	
C	ポイントに従って、カードを用いながら進捗状況をあまり説明できていない	時間設定の+-15秒で3分間の報告を終えることが出来ない

#### 4. 検証 (⑤5/27についてはエネルギーグループに記載)

##### ● 目標の達成度・課題

KG Peace Map を用いた大学生に対する出張授業を実施したこと、またその体験からさらに具体的な活動へと広げていけるようになることが第4フェーズの大きな目標であったが、以下に記すように概ね達成できたように思われる。大学生からのアンケート回答を基に、自分たちが良かれと思っていた内容について見直す結果ともなり、学びを深め広げる姿が多々見られた。

##### <目標1)2)3)について>

- ・しっかりと計画した大学生への出張授業で得たアンケート回答を通して、学びの記録にあるように、生徒たちは自分たちの活動の良かった点や改善点を知ることが出来た。それらを基に、さらに活動を広げるべく、企画書を作成し、それに基づいてグループに分かれて活動を行った。生徒集会、オープンハイスクールなどでのKG Peace Mapの発表とアピール、そのための動画作成、キャンパスにある大学の各学部事務室へMapを置いてもらうためのポスター作りと交渉など、出張授業から得たアイデアを、自分の役割に責任を持って取り組む姿が大変印象的であった。
- ・進捗状況の報告については、それぞれの活動内容の共有を通して、グループを超えて協力して取り組めることがあることに気づき、互いに声を掛け合う場面が見られた。
- ・以上のことから、目標1)2)3)については高いレベルで達成することが出来たのではないかと考えられる。

#### 5. 今後改善すべき点について

・Mapを作成して終わり、ではなく、Mapを用いた活動を実施することで、さらなる探究のサイクルが実践されることを生徒ともに体験することが出来たことは大きいことであった。授業として、例えば生徒が変わったとしても来年度も継続してこの活動を行えるかがどうか課題であることが見えてきた。

##### ●エネルギーグループ

#### 第4フェーズ：議論の準備 【事例】【共通の土台】【ハンズオン目線】

①4/15 ②4/22 ③5/6 ④5/13 (⑤5/27は合同) ⑥6/3

##### 1. このフェーズでの目標

- 目標1) 原発に対する議論の事例を自分たちの議論に取り入れる
- 目標2) 議論をかみ合わせるために何が必要かを確認する
- 目標3) 議論の中にハンズオンならではの視点を入れることができる

##### 2. 具体的な活動

###### ① 4/15

- ・昨年度のまとめと課題の確認
- ・動画「日本で一番大きなやかん」から論点を整理し賛成派反対派それぞれの主張をまとめる

###### ② 4/22

- ・原発推進派(澤田哲生東工大准教授)と廃止派(小出裕章元京都大学准教授)の討論の音声記録を聞きながら二人の討論を整理し論点をあげそれに関する双方の主張を左右に書き並べてシートを埋めていく

###### ③ 5/6

- ・講演「脅威にも福音にもなるアルファ放射体」(山村朝雄教授)と高校物理の教科書を使って原子力発電に使われる



核分裂について科学的な基本知識を確認する。

④ 5/13

- ・この授業の目的と今後の方針の確認(ハンズオン:現場で学び、社会的課題への当事者意識を育む)
- ・ハンズオンの在り方を事例を用いて考察 事例：関西電力美浜原発で 40 年超の原子炉を来月下旬から稼働させることについて当事者(美浜町民)の立場で考える。
- ・科学的知見のまとめとして高木仁三郎さんの著書からの引用(ロイノート資料室)を読んで、「パンドラの箱を開けた」に対する自分なりに解釈する

⑤ 5/27

- ・京都大学複合原子力科学研究所山村朝雄教授による講演「プルトニウムの闇と光」「核燃料リサイクルの可能性」
- ・課題として、「プルトニウムの闇と光」「核燃料リサイクルの可能性」の内容を自分の言葉で 200 字程度で考察。

⑥ 6/3

- ・経団連の発題を受けてまずは個人内で議論を開始。具体的に「原発は本当に〇〇か？」との形式で問いを立て一人ひとつ文献を選んで問いに対して考察する

3. 活動の評価方法

● 活動のルーブリック

- ① 4/15 「日本一大きなやかんの話」のまとめと考察  
(1.原発推進派の主張 2.原発廃止派の主張 3.気になった言葉 4.考察)
- ② 4/22 原子力に関する研究者同士の議論に関する学びの記録
- ③ 5/6 原子力技術の関する基本的な知識の整理に関する学びの記録
- ④ 5/13 この授業の目的と今後の方針の確認(ハンズオンの在り方を事例を用いて考察)に関する学びの記録
- ⑤ 6/3 経団連の発題を受けて原発可否に関する議論の意義と具体的方法に関する学びの記録

	知識/技術	意見/考察
A	自分の視点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエイティブな広がりが見られる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

⑥ 5/27 「プルトニウムの闇と光」「核燃料リサイクルの可能性」の内容を自分の言葉で 200 字程度で考察

課題①：講演で触れられた内容を基に、プルトニウムの闇と光の内容を自分の言葉で200字程度で述べなさい。 課題②：講演で触れられた内容を基に、核燃料リサイクルの可能性について200字程度で考察しなさい。		
	課題①	課題②
A	2つのポイントの内容について、大変簡潔且つ明確に自分の言葉で述べる事ができている。	講演の内容と自分の意見とが有機的につながり、大変深い考察がなされている。
B	2つのポイントの内容について、ある程度簡潔且つ明確に自分の言葉で述べる事が出来ている。	講演の内容と自分の意見とがある程度つながっており、考察がある程度なされている。
C	2つのポイントの内容について、簡潔且つ明確に自分の言葉で述べる事が出来ていない。	講演の内容と自分の意見とがあまりつながっておらず、考察があまり見られない。

⑦ 原発問題に関する問いを立て、それに関して自分で答えるレポート課題

原子力発電をめぐる対話を作成する(800字) その際の章立てとして  
 第一章 まず問いをたて、自分でそれに答える。その際に ①データなど客観的な根拠 ②参考文献からの引用を明確に示すこと。 第二章 自分で掲げた答えに、③推進派・廃止派がそれぞれどのように受け止めるかを想定した文章

	①客観的な根拠	②参考文献	③原発推進派・廃止派との共有点
A	根拠が明快でデータなどで明確な裏付けがされている	主張に対し必要な引用がなされ、それが的確である	推進派・廃止派双方の考えをよく理解しており、かつ共有できる部分を明確にししている
B	根拠が質・量が十分でない	引用が質・量が十分でない	双方の考えの理解や、共有できる部分がやや不明瞭
C	客観的な根拠が示されていない	引用されていない	内容が曖昧ではっきりしない

4. 検証

● 目標の達成度・課題

原子力発電の推進・廃止に関する議論を深めることが大きな目標だったが、そのために、まず 1) 原発に対する議論の事例を提供したり、2) 議論が噛み合うように共通の土台となる科学的知見を確認したりしたが生徒たちはあまり興味を示さなかった。それを感じつつも予定をこなすため 3) 議論の中にハンズオンならではの視点を取り入れた課題を課しこの問題に関する自分自身の問題意識を前面に出すレポートを提出させた。後になって分かったことだが、1 学期の学びが生徒自身の活発な参加につながらなかったのは彼らが原子力発電の賛否に興味がなかったというよりも自分たちが何を求められているのか十分理解していなかった面が大きかったと思われる。この点はカリキュラムを組んだ教員側にも責任がある。しかしながらそうは言っても 2 学期をもってこの授業は終了することを考えると、生徒の問題意識が十分反映される最終的な発表の形を用意することが急務である。

5. 今後改善すべき点について

生徒たちはこの授業に意欲を失ったわけではなく社会の問題を自分たちの手で解決することには興味を持っている。ただその問題意識が原発問題とは結び付かないでいた。今後は最終的な発表の仕方を自ら考案することにより自分自身の問題意識を実際の原発の推進・廃止の議論の中で生かすことである。

● 合同授業

第5フェーズ：さらに「知る」 【課題の「再」設定】

⑦ 6/10 ⑧ 6/17 ⑨ 6/24 ⑩ 7/1

1. このフェーズでの目標

目標 1) 今まで学んできたことを整理し、自分の関心を掘り下げることが出来る

目標 2) 平和・エネルギーグループが一緒になって、2 学期に向けてのアクションを企画することが出来る

## 2. 具体的な活動

### ⑦ 6/10

- ・今後の大きなテーマとなる「核『被爆と被曝』」について生徒に紹介し、各グループが混ざった新しい4グループを作成。
- ・新しい各グループ内において、互いのグループのこれまでの学びの紹介をマナボードを用いて実施。
- ・「原爆」について、各グループで以下のテーマを選んで調べ、次回の授業で発表するための下調べ。
  - 1) 核兵器をめぐる世界の現状と核兵器禁止条約について
  - 2) 核兵器の仕組み（広島型、長崎型などの型や科学的な危険性など）
  - 3) 広島の歴史（原爆が落とされた時の被害状況やその後の復興の様子など）
  - 4) 長崎の歴史（原爆が落とされた時の被害状況やその後の復興の様子など）

### ⑧ 6/17

- ・各グループによる発表（発表8分、Q&A2分）（資料6）
- ・2学期最終ゴールの提示、ならびにテーマ設定のための事前調べ
  - ・大テーマ：核「被爆と被曝」
  - ・中テーマ：「エネルギー」「戦争」
- ・宿題の提示
  - ・自分たちが調べていくテーマについて、2つの社会的ニュースやインターネットでピックアップ（キーワード：「アクション」）が関わっている記事を最低1本ずつ。ロイロで次回の授業までに提出。）

### ⑨ 6/24

- ・関西学院大学ライティングセンター大福聡平助手による講義/ワークショップ「論理的思考の概念（トゥルーミンモデル）に関する解説（主張・根拠・論拠・条件）」

最後の活動に向けて、自分たちが今まで学んできたことを振り返り、自分の興味・関心を再度掘り下げることによって、今後自分が何をすべきかの方向性を確かめるワーク（資料7）を実施。
- ・大テーマ「被爆と被曝」中テーマ「エネルギーと戦争」について、Newspicksを用いた下調べ。

Newspicks for Education を利用して、テーマに関わる記事をグループ内で共有。さらにはそれらについての各自のコメントについても書き込むことで話題を提示。



### ⑩ 7/1

- ・夏の課題の予行演習として、新聞から「戦争」「エネルギー」をキーワードとする記事を5つ切り抜きさせて、ワークシート（資料8）に記入することを通して、さらに今後自分がどのようにテーマについて関わっていきたいかを掘り下げる。
- ・夏休み課題の提示

戦争またはエネルギーどちらかに関する3つの新聞記事(3つとも片方にするのではなく、両方を扱う)を切り抜いてそれぞれに関するワークシートを作成する。ワークシート左側に論旨(誰が、何を)を記入し、記事には、事実に関する記述に赤線、意見に関する記述に青線を引く。

記事はワークシートに張り付けワークシートの右側を完成させる。

### 3. 活動の評価方法

#### ● 活動のルーブリック

##### ⑧ 6/17 原爆についての発表

「原爆」について、各グループで以下のテーマを選んで調べ、次回の授業で発表：1グループ8分・質疑応答2分 ①核兵器をめぐる世界の現状と核兵器禁止条約について ②核兵器の仕組み（広島型、長崎型などの型や科学的な危険性など） ③広島歴史（原爆が落とされた時の被害状況やその後の復興の様子など） ④長崎歴史（原爆が落とされた時の被害状況やその後の復興の様子など）				
知識	整理	視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	時間
A 課題で必要とされた自分が得た「知識」について量と質が十分である	伝えたい知識が簡潔に整理されている。	文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意が感じられる。	設定された時間の+-15秒で発表を行った。
B 課題で必要とされた自分が得た「知識」について量と質がある程度ある	伝えたい知識がある程度整理されている。	文字のフォントやグラフ・図がある程度効果的に用いられている。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意がある程度感じられる。	設定された時間の+-15秒で発表を行うことが出来なかった。
C 課題で必要とされた自分が得た「知識」について量と質があまりない	伝えたい知識があまり整理されていない。	文字のフォントやグラフ・図があまり効果的に用いられていない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	

##### ⑩ 7/1 夏休み課題

ハンズオン 2021 夏の課題	戦争またはエネルギーどちらかに関する3つの新聞記事(3つとも片方にするのではなく、両方を扱う)を切り抜いてそれぞれに関するワークシートを作成する。 ワークシート左側に論旨(誰が、何を)を記入し、記事には、事実に関する記述に赤線、意見に関する記述に青線を引く。 記事はワークシートに張り付けワークシートの右側を完成させる。 ※2学期始業式に尾城に提出すること。		
ワークシート	①記事の提示と論旨説明	②共感・自分の体験	③どのように関わりたいか
A	事実と意見が明確に区別され、論旨も明確に記述されている	具体的にわかりやすく記述されている	他の人が読んで応援したくなるように記述されている
B	事実と意見の指摘や論旨が曖昧	内容が曖昧で説明として不十分	内容が曖昧であったり具体性に欠ける
C	事実や意見が示されていない。記事の論旨が分かりにくい	内容が分かりにくい	内容が分かりにくい

### 4. 検証

#### ● 目標の達成度・課題

##### <目標 1)について>

- ・大福先生のワークショップで作成したワークシートの内容を見る限り、生徒たちは自分の関心について自分なりに掘り下げることが出来たのではないかと感じる。
- ・ただ、今後グループで活動する上では各自がどのような思いや関心を持っているかについて共有する工程が必要であったが、それが出来なかったために、各自の中で留まってしまい、グループでの活動に対して個人の関心をつなげることができなかった。
- ・夏休みの宿題の内容を見る限り、ほとんどの生徒が平和とエネルギーのどちらの問題もよく理解しており適切な記事を見つけ出して自分なりの視点でとらえることができていた。中には記事の内容に刺激を受けて今後の自分の学びに具体的に活かそうとするものもあった。

##### <目標 2)について>

- ・授業担当者としては、それぞれ別の観点を持った2つのグループの生徒たちが混ざり合って2学期の最終活動につなげるスタートとする1学期後半の予定であった。しかしながら、生徒たちに話を聞く限り、生徒たちはグループ

- が一緒になることを望まず、それぞれが別の活動を続けることを希望してきた。夏休み中にオンライン会議も行い、生徒と教員が相談することを通して、最終的には2学期にはグループを元に戻し、別々に活動することとなった。
- ・「核」ということをテーマに、「原発」「戦争」ということについて学習した生徒たちが重なることで生まれる学びの相乗効果をデザインしていたが、それがうまくいかない結果となってしまった。別々の活動をする時間が長すぎたこと、2つのグループがいつ重なるかということに都度意識させることができなかったこと、またそのような授業のねらいを説明しきれなかったことがその理由であると考えられる。
  - ・しかしながら、生徒と教員が相談し、今後の授業デザインや方向性を互いに納得して決めるプロセスを踏めたことが大きかったように思う。

## 5. 今後改善すべき点について

- ・目標 2)について検証で述べたことと関わるが、探究授業における授業のデザインの方法については見直しが必要であるように強く感じた。授業にはある程度の大枠が必要ではあるが、活動を続けていく中で生徒たちの心の中にも「こうしたい」という思いが芽生え、その声を聞きながら授業の枠を修正していく過程を踏まえていくことの必要性を実感した。

### ●平和グループ

#### 第6フェーズ：さらに行動する 【情報の収集】【整理・分析】【まとめ・表現】

①9/9 (合同) ②9/16 ③9/30 ④10/7 ⑤10/21 ⑥11/11 ⑦11/18 ⑧11/25

#### 1. このフェーズでの目標

目標 1) KG Peace Map を用いて、他者に平和について考えてもらう機会をつくること

#### 2. 具体的な活動

##### ① 9/9

- ・最後の2学期を迎えるにあたり、それぞれ個人としてどのように授業を締めくくるということを意識するために、「自分の理想像」を以下の設問についてポートフォリオで論述（資料9）。

「2年間の集大成として、ハンズオンラーニング最後の時間に、自分はどうなっていたいか、自分の理想像を、理由、経緯を踏まえて400字程度で論じなさい。」

##### ② 9/16

- ・「自分の理想像」について、平和グループ内において1分間スピーチ。他者の思いを認識した上で、グループプロジェクトに臨むことを確認。
- ・その後、グループとしてのKG Peace Map プロジェクトの活動目的を全員でディスカッション。結果、「幅広い年代のピースビルダー育成」を目的にすることで一致。
- ・リーダーの生徒2名による今後の流れのビジョンの説明があり、各プロジェクトの大枠のイメージを全員と共有。プロジェクトの内容をブレインストームし、以下の4つのプロジェクトグループの内容と担当者を決定。
  - 1) 広報：SNS/ポスター/様々なイベントでの発表
  - 2) KG 内活動：関西学院内への呼びかけ
  - 3) KG 外活動：語り部・戦争経験者へのインタビュー
  - 4) 関西学院初等部・中学部との交流

⑬ 9/30 ⑭ 10/7 ⑮ 10/21 ⑯11/11

・各プロジェクトグループの内容と成果は以下の通りである。

1) 広報：SNS/ポスター/様々なイベントでの発表

- ・中学生対象のオープンハイスクールで KG Peace Map の取組について発表（2回）。
- ・WWLC2年生主催の「第2回 SDGs オンライン生徒交流会」での取組成果の発表。
- ・WWLC3年生が対象の授業成果報告会にて取組について発表。

2) KG 内活動：関西学院内への呼びかけ

- ・ポスター（資料10）を作成し、キャンパス内の中学部・高等部・大学の各学部室に KG Peace Map と共に設置。
- ・1/11, 18の2回に渡り、1年生の WWLC 探究 BASIC の授業にて KG Peace Map の出張授業を実施（資料11・12）。

3) KG 外活動：語り部・戦争経験者へのインタビュー

- ・広島市が取り組んでいる「被爆体験伝承者養成事業」に参加され、2020年3月に被爆体験伝承者と認定された鎌田真さん（本学職員）に Zoom インタビューを実施し、本校 OB の戦争体験者へのインタビューの方法を学習。
- ・関西学院中学部の OB で戦争を体験された渡邊康彦さん、野田一夫さんに戦争体験のインタビューを実施。そのインタビュー動画を編集し、出張授業にて使用。

4) 関西学院初等部・中学部との交流

- ・関西学院中学部の礼拝にて、中学生に対して KG Peace Map を用いたワークショップを開催し、アンケート（資料13）を実施。

⑰ 11/18

・今までの2年間の KG Peace Map に取り組む中で、このプロジェクトと自分の関わりを客観的に見つめるために、「未来の教室：コモンルーブリック」を用いて自己評価を実施（資料14）。

⑱ 11/25

・最終課題「KG Peace Map プロジェクトを通じて感じた『私にとって平和な社会とは』を自分の言葉で800字程度で伝えてください」の提示、実施。

### 3. 活動の評価方法

● 活動のルーブリック

⑪ 9/9：400字程度のポートフォリオのルーブリック

	考察	文字数
A	自分の理想像と、経緯・理由が有機的につながり、考察までに発展した記述が多くみられる	400字程度におさまっている。
B	自分の理想像と、経緯・理由がある程度つながり、考察までに発展した記述がみられる	
C	自分の理想像と、経緯・理由があまりつながっておらず、考察までに発展した記述があまり見られない。	400字程度におさまっていない。

⑬ 9/30 ⑭ 10/7 ⑮ 10/21 ⑯ 11/11：各プロジェクトにおける計画・進捗状況についての自己評価ルーブリック

	①計画性	②成果	③協働
A	具体的、且つ詳細な計画を作成することが出来た	計画通り、あるいはそれ以上の成果を得ることが出来た	しっかりとメンバーで作業を分担し、効率的且つ思いを共有して協働して取り組むことができた
B	ある程度、具体的且つ詳細な計画を作成することが出来た	ある程度計画に近い成果を得ることが出来た	ある程度メンバーで作業を分担し、効率的且つ思いを共有して協働して取り組むことができた
C	あまり具体的且つ詳細な計画を作成することが出来なかった	あまり計画にあるような成果を得られなかった	メンバーで作業を分担し、効率的且つ思いを共有して協働して取り組むことがあまりできなかった

⑰ 11/25：800字程度のポートフォリオのルーブリック

KG Peace Mapプロジェクトを通じて感じた「私にとって平和な社会とは」を、自分の言葉で800字程度で伝えてください。

観点	説明	A	B	C
適切な主張の提示	課題に応じて、適切な主張が提示されているか	課題に応じて適切な主張の提示が簡潔かつ明確になされている	課題に応じて適切な主張の提示がなされている	課題にふさわしくない主張の提示がなされている
主張となる根拠の成立	主張したい事柄に対する根拠を、KG Peace Mapプロジェクトの経験から探し出しているか	主張したい事柄に対する根拠が、KG Peace Mapプロジェクトから必要かつ十分な形で探し出している	主張したい事柄に対する根拠を、KG Peace Mapプロジェクトから探し出している	根拠なく主張がなされている
論理的なストーリー	主張したい事柄に対する根拠を明示し、理由に説得力がある	主張したい事柄に対する根拠を明記し、そう主張する理由に極めて十分な説得力がある	主張したい事柄に対する根拠を明記し、そう主張する理由に説得力がある	主張したい事柄に対する根拠を明記していても、論理に飛躍があるため十分な説得力をもたない。
文字数	800字程度書けているか	800字程度で書けている		800字程度で書けていない

4. 検証

● 目標の達成度・課題

<目標 1)について>

- ・1学期に比べ、より生徒に自由な時間を与え、自分たちでプロジェクトを進めていくように教員として心掛けた結果、こちらが想像した以上の成果を生徒たちは収めた。具体的には、1年生のWWLC探究BASICでの出張授業の授業計画においては、2学期で経験した取り組みを基に、教員が何も言わずとも授業案やアンケートを作成し、授業を実施することが出来た。また、戦争体験者へのインタビューについても、その動画をうまく教材化し、出前授業で使用していた。違う2つのプロジェクトが協働して取り組んだ1つの成果でもあり、大きな達成感を生徒たちは得ることが出来たように感じる。
- ・他者に平和を考えてもらうためには、セミナー形式のように少人数で相手の顔が見える距離で行うことの必要性があるという結論に生徒たちは達した。大人数に対してプレゼンテーションをして伝える、という安易な結論や方法ではなく、多少手間がかかったとしても参加者と会話を交わしながら親密に行うワークショップなどを通じたほうが平和についてしっかりと考えてもらえるという実感を生徒は得た。それについては、どちらの方法も生徒たちが経験をしたからこそ得られた実感であると考えられる。まずはやってみる、というステップを踏めたことが大きな成長のきっかけとなった。
- ・最終課題で課したポートフォリオ（資料15）にもあるように、自分たちが得た知識と、今の高校生として自分が置かれている立場とが有機的につながるコメントが多く見られた。学びを自分事として自分で認識することのできた1つの証拠であるように感じる。他者に平和について考えてもらう工夫を通じて、自分自身で深く平和について考えるきっかけとなったことが伺えた。また、自分の言葉で平和について語るができるようになった。

5. 今後改善すべき点について

- ・KG Peace Mapについて、作成した生徒たちが卒業してしまうため、来年度も継続してこの活動を行うことの難しさを感じている。内容のアップデート、アプリの運営など、次の学年に引き継ぐには作業量が多すぎる。担当教員はシステムだけを残すことが出来るが、活動の主体となる生徒がいなかったために2年間だけの活動にならざるを得ないのが残念である。

- ・それぞれグループに分かれて活動をするため、個々の関わりやそれぞれのグループ活動内容を公平に評価することができなかった。何を持って評価するのか、明確なものを打ち出すことが出来ず、結果として振り返りポートフォリオを中心とした評価となった。それぞれの活動のまとめの発表などを行って評価すべきだったのか、今でも頭を悩ませている。

## ●エネルギーグループ

### 第6フェーズ： 「学びの表現」 【整理・分析】【まとめ・表現】

⑪9/9（合同） ⑫9/16 ⑬9/23 ⑭10/7 ⑮10/21 ⑯11/11 ⑰11/18 ⑱11/25

#### 1. このフェーズでの目標

学んだことを生徒自身の手でまとめ表現することができる

#### 2. 具体的な活動

##### ⑪ 9/9

- ・最後の2学期を迎えるにあたり、それぞれ個人としてどのように授業を締めくくるといふことを意識するために、「自分の理想像」を以下の設問についてポートフォリオで論述（資料9）。

「2年間の集大成として、ハンズオンラーニング最後の時間に、自分はどうなっていたいか、自分の理想像を、理由、経緯を踏まえて400字程度で論じなさい。」

- ・2学期は「平和グループ」と「エネルギーグループ」が合流してひとつのプロジェクトを立ち上げることを計画したが、生徒たちにそれを提案するとそれぞれでプロジェクトを立ち上げたいとの希望が多かったのでそれぞれで活動することになった。「エネルギーグループ」はこの時より最後の形に向けての模索を始めた。

##### ⑫ 9/16

- ・宿題のポートフォリオを基に、「自分はこうなっていたい」という発表をロイロカードを用いて1分間以内で行う。「PBL 福島で学ぶ復興と原発問題」を通じて知り合った福島県庁職員(佐藤さん)と2名の生徒のやりとりを紹介。かねてから希望のあった原発反対派の専門家を決めて交渉に入る

##### ⑬ 9/30

- ・9/28に2名の生徒が原発廃止派の研究者である朴勝俊(かつとし)関西学院大学総合政策学部教授を訪問し約2時間に渡って朴先生のお考えと研究成果をお聞きし、生徒たちからの質問にも答えて頂いた。この日の授業はその内容の報告があった。この辺りから授業の主導権を実質的に生徒が握るようになっていった。

##### ⑭ 10/7

- ・福島県庁復興総合計画課の佐藤安彦さんからZOOMを通してお話を聞く。福島原発とその立地地域を訪問することはできなかったが、佐藤さんの丁寧なお話のおかげで被災地域の当事者の方の声を聞くことができた。

##### ⑮ 10/21 ⑯11/11⑰ 11/18

- ・この3回は生徒が進行役となり発表の形と内容を詰めていった。発表の形をディベート劇とし、発表を聞く3年生の生徒に発表の前と後に原発に関する賛否を投票する形をとることにした。その意図はエネルギーグループの生徒たち自身が原発稼働に対する態度が揺れていて決めかねており、その状態をそのまま聴衆となる生徒たちにも体験してもらおうということである。したがって選択肢は賛成か反対の2者択一ではなく推進派を積極的(再稼働・新增設)と消極的(現状維持)、廃止派を積極的(即時廃止)と消極的(新增設・再稼働しない)の2つずつに細かく分けて聴衆の考えの変遷がより詳しくわかるようにした。ディベートの論点はこれまでの学びを踏まえて①原発は安全か②環境の面で原発は日本に向いているのか③経済の面で原発は日本に必要なか、の3つに絞り、推進派、廃止派をそれぞれ決めてシナリオ作成に入った。以後リハーサルとシナリオ改善を繰り返した。皆この時が一番真剣だったと思う。

- ・本番はほぼ予定通り行うことができた。聴衆側の生徒もディベートを真剣に聞き原発に対する自分たちの立場を投票した。発表後はこの授業の総括を書式に従って行った。

### 3. 活動の評価方法

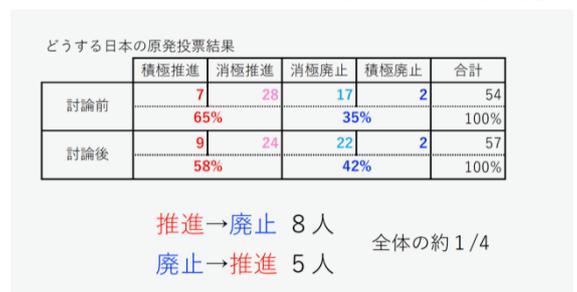
最終発表で担当した役割の内容・原発問題の本質に関するエッセイ・高校生へのプロジェクトの提案内容

成果物	発表 「どうする日本の原発」	日本の原発問題の本質 に関するエッセイ	【高校生向け原発プロジェクト】 兵庫県の高校生が原発稼働の問題を自分のこととして考えるためのエネルギーグループ主催のプロジェクトを以下の章立てで400字以内でロイロノートに提案してください。 1.序章(兵庫県の高校生のこの問題に対する捉え方—対象の現状認識) 2.本論(プロジェクトの全体像…規模・期間を具体的に記述し、またこの2年間のハンズオンの学びとの関連性を示す)	
			①現状分析とその対応	②プロジェクトの構成
評価	A~C	A~C	A~C	A~C

### 4. 検証

#### ● 目標の達成度・課題

- ・1学期はテーマの大きさに対する躊躇や知識不足により停滞していた感があったが、2学期に入って学びの主導権を生徒に渡してから徐々に取り組みの姿勢が積極的になり、発表のスタイルからディベートの論点まで生徒の提案が実施された。またこれまであまり出なかった質問も出るようになり、それを生徒が答えるという生徒間でのコミュニケーションも盛んになされるようになった。この時点で目標 2 はかなりの程度達成されていたと言える。そのような彼らの真剣な姿勢と生き生きとしたが発表を聞いた生徒たちの心を動かし、全体の約 25%が討論を聞いて原発に対する考え方を考えることにつながった。
- ・また目標 3 に関しても、高校生に対しての働きかけるプロジェクトをそれぞれ考えた。残念なのは、発表の必要に応じてこれまでに学んだことを再認識はしたが、教えられた以上に深く掘り下げるには至らなかったこととエネルギーの問題に精一杯で、目標 1 が今後の課題として残ったことである。



### 5. 今後改善すべき点について

- ・今回の WWL の授業で、生徒自身が学びのきっかけをつかめば生徒同士でどんどん学びを進めていくことがわかった。そのきっかけは一部の生徒の積極的な行動であり、それを押し進めたのはこれまでの学びを形にしたいという生徒全員の意欲であった。その意欲を引き出し生徒に任せる部分と教師が教える部分のバランスを見極める必要があるだろう。

<成績算出方法について>

テストを行わない探究授業ではあるが、必修選択授業という正課の科目であるため、他の WWLC 科目である AI 活用科目、グローバルスタディ科目と共通して、以下のように成績を算出する運びとなった。

生徒の成果物に関する学び / 思考	
＝① 成果物（プレゼンテーション、レポートなど）	： 40～60%
生徒の授業内の学び / 思考	
＝② 学びの記録 + ③ 振り返り（ポートフォリオ）	： 40～60%
合計：100%	

これに従った各学期におけるハンズオンラーニングの成績の割合は以下の通りである。

1 学期

- ① 成果物：60%
  - ・ グループ発表 2 回
- ② 学びの記録：10%
  - ・ 2 回
- ③ ポートフォリオ：30%
  - ・ 2 回

2 学期

- ① 成果物：60%
  - ・ 個人ワーク 1 回
- ② ポートフォリオ：40%
  - ・ 2 回

昨年度同様 2 グループに分かれて活動をするが多かったために、成績の基準となるものが実質的に異なる場面も多かった。そのために、以下の点に留意をしながら成績算出を行うことで、特に問題が起きることもなく、生徒、教員の双方が納得のできる成績を生徒に提示できることが出来た。

- ・ 担当者間で常に課題の内容、ループリックの確認を行った。
- ・ 各評価におけるループリックをできるだけシンプルな 3 段階とし、A を 5 点、B を 3 点、C を 1 点と統一した。
- ・ 評価が分かれるような課題については、2 人で同じループリックを用いて合議の上採点を行った。
- ・ どのような課題においても徹底してループリックは課題の指示と同時に提示をし、生徒たちに課題の目標を明確にした。
- ・ フィードバックについては、単に ABC をつけるだけでなく、全体へのコメント、個人へのコメントを個別に書いて丁寧に返却することを心がけた。また実際に返却する際には単に返却するだけでなく、口頭でも良かった点や改善点などの説明を添えた。
- ・ ポートフォリオ課題については、一連の活動の区切りごとに実施することが出来た。生徒にとっては、自分の取り組みを振り返る良い機会になったと思われる。

しかしながら、各個人が取り組むプロジェクトの内容が大きく異なったため、その成果物自体を評価するには至らず、それらに取組んだ振り返りのポートフォリオや取り組みについての発表を評価するに留まった。性格の異なるプロジェクトであっても、共通する項目を抜き出してループリックを用いて評価するには、そのプロジェクトの進捗具合に従った形成的な評価などをするべきだったのか、依然明確な方法が思いつかない状態である。

## <全体のまとめ>

以下に、ハンズオンラーニングアドバンスト授業全体の活動目標を再度記す。

1. 広い意味での「平和」に関わる社会的課題について、自分の言葉で語る事が出来るようになる。
2. 「戦争」「エネルギー問題」という平和に深く関わる社会的課題について、自分事してとらえ、ローカルな視点で語る事ができる。
3. 2年次から引き継いでいる上記1, 2の目標について、社会的な課題を解決するアクションを起こすことができる。もしくはアクションの内容を考え、計画することができる。

目標1, 2, 3について、平和グループにおいて概ね達成できたのではないかと考える。平和グループは自分たちが作成したKG Peace Mapを用いて、他者に平和を考えてもらう機会をつくるという目的のもと、グループに分かれてプロジェクトに取り組んだ。いずれのプロジェクトにおいても、教室外に飛び出し、自分たちから発信する形で高等部生以外の人たちと関わりを持ちながら進めることが出来た。平和教育という分野において生徒という立場だけでなく社会の一員として積極的に参画した1年間であった。

一方エネルギーグループは、平和という言葉は出なかったが、討論劇で論点とした①原発は安全か②環境の面で原発は日本に向いているのか③経済の面で原発は日本に必要なか、は「原発は日本の平和に貢献するのか」ということが含まれていた。国政選挙を意識した賛否投票形式をとったことにより、自分たちの意見や考えが国の在り方につながっているということと同級生に訴えた。

いずれにしても、両グループとも平和という大きな課題について、戦争、原発というテーマに関わりながら自分事の問題として解決しようとする試みを主体的に行って1年間を締めくくることが出来た。昨年度同様コロナ禍における活動の制限や急な予定変更などが伴ったものの、この1年最後の授業成果報告会で生徒自身が報告したように、自分たちが考える平和構築の方法を自分たちで実践し、自分たちなりの言葉で表現することができた。

【資料1：出張授業プラン】

2021年4月22日(木) 13:45~14:45 法学部 高島千代先生ゼミ 出張授業 授業指導案				
生徒数：14名 準備物：KG PEACE MAP 20部				
到達目標		① KGの戦争の歴史を身近に感じてもらう。 ② 平和について考えてもらう機会をつくる。 ③ 大学生から地図の改善点の意見をもらう。		
時間	担当	授業内容	準備物	留意点
13時45分	久保田	大学博物館前集合 ・ごあいさつ ・マップ配布 ・一日の流れの説明 ・グループ分け 高等部生：2・2・2・2・3 (計11名) 大学生：2・2・3・3・4 (計14名)	・マップ30部	・事前に高島先生から学生に連絡をしてもらい、「マチアルキ」アプリを各自のスマホにダウンロードをお願いしておく
13時50分 30分間	各グループ	キャンパスをグループで歩いて回る		・奉安庫は必ず回る ・歩く中で、マップに書いてある内容を直接口頭で伝える
14時20分 25分間	東谷 本橋 橋本(板書)	法学部3階大会議室(エレベーターを降りて廊下右奥突き当り) ・個人ワークとグループワーク 1) あなたにとっての平和とは何ですか? 2) この活動に参加する前とした後で、平和に対する意識が変わったことはありますか? ・アンケート 1) KG Peace Mapの良かった点を教えてください。 2) KG Peace Mapの改善点を教えてください。 3) 今日一日のご感想を自由にお書きください。	ワークシート作成：佐藤	
14時45分		終了・高等部に戻る		

【資料2：KG Peace Map のアンケート】

**質問・アンケート** 2021年4月22日

本日はこのような機会を設けていただき、ありがとうございます。大学生の皆さんからご意見をいただき、私たち高校生の学びに生かしたいと考えています。以下の質問とアンケートの回答のご協力をお願いします。

**質問**

1) あなたにとって平和とは何ですか。  
 (世界中の人の命が互いのことを思いやり、平和でいえる状態。)  
 平和な世界とありたいです。

2) 今回の活動に参加する前とした後で、平和に対する意識が変化しましたことはありますか。  
 (開学以来の歴史があり、戦争により色んな制限があったこと、今の日本は、とても自由で平和でいえる状態です。)

**アンケート**

1) 今回の活動はいかがでしたか。  
とても良かった まあ良かった あまり良くなかった 全く良くなかった

2) マップとコンテンツの良かった点を教えてください。  
 (マップ: 写真が綺麗で、分かりやすく、見やすい。)  
 (コンテンツ: 一つ一つ詳しく説明があり、とても興味深い。)

3) マップとコンテンツの改善点を教えてください。  
 (マップ: 特にないです。)  
 (コンテンツ: )

4) その他、ご感想があればお願いします。  
 (とても楽しかったです。)  
 (開学を好きになり、この活動を通して、)

ご協力ありがとうございました。

**質問・アンケート** 2021年4月22日

本日はこのような機会を設けていただき、ありがとうございます。大学生の皆さんからご意見をいただき、私たち高校生の学びに生かしたいと考えています。以下の質問とアンケートの回答のご協力をお願いします。

**質問**

1) あなたにとって平和とは何ですか。  
 (戦争によって命を失うことのない状態。)

2) 今回の活動に参加する前とした後で、平和に対する意識が変化しましたことはありますか。  
 (上ノ原八幡神社を見たことで、舟屋空襲の歴史、その他関係者の人を知ることができた。今の平和があることを改めて認識できた。)

**アンケート**

1) 今回の活動はいかがでしたか。  
とても良かった まあ良かった あまり良くなかった 全く良くなかった

2) マップとコンテンツの良かった点を教えてください。  
 (マップ: 場所をわかりやすく映像で見ることができて、とてもおもしろかった。)  
 (コンテンツ: 今まで知らなかった開学の歴史を知ることができて、とても良かった。)

3) マップとコンテンツの改善点を教えてください。  
 (マップ: 全体のマップも表示して、見やすかった。)  
 (コンテンツ: 映像を途中で止めた方がよかった。)

4) その他、ご感想があればお願いします。  
 (とても楽しい時間でした。)  
 (ありがとうございました。)

ご協力ありがとうございました。

【資料3：学びの記録】

本日の授業で知った新しい知識（事実）	他者や自分の考え・意見
<p>3年生の方だったのがマップのほとんどの場所に行ったことがあり、せかくの貴重なプログラムなので遠出しようとなり八幡神社に行きましたが「普段いつも通るのに戦争の跡地でこんな歴史があったなんて知らなかった」と言っていて興味を示してくださっていたので今まで大切にしていた「ローカルな視点」や「身近さ」がよく活かされていると感じた。</p> <p>また、奉安庫に案内した時も「こんな所に御真景なんているんだ」という反応だったので今まで行ったことがある場所でも知られていない歴史がたくさんあると思うので知ってほしいなと感じた。</p> <p>自分が作ったコンテンツを見て新しく歴史を知ってもらえたり考えていただけで達成感があったのもという人々に体験してもらいたいと素直に思った。</p> <p>あいている時にも歴史の紹介がたくさんできたらもっと楽しんでいただけたらと思うので知識をつけて今後も同様な機会があればその時に活かせるようにしたい。</p>	<p>コンテンツを見ていたときに動画が5分以上あると最後のほうは少し見るのが疲れてしまっていたりアンケートにもある通り要点があかりにくそうだったのでもう少しコンパクトにしてもらえないか。</p> <p>充電と通信量の消費が大きく体験中に言われたりアンケートにもあったのでマップに目立つように注意書きがあればいいなと思った。</p> <p>今日はプログラムだったのがマップを知って体験してもらえたけどそのような授業がなかったらこのマップのことを知らなかったと思うので学校生活のいつかの場面でもマップを宣伝する場を設けたりもしることができるなら関学のホームページなどで紹介している人々にマップの存在を知ってもらうことから始めなければならぬ。</p> <p>興味を持ってもらえなければマップを知っても実際に体験してもらえないので体験していただき、たんにレビューを書いてもらっていただくことが伝わるようにする。</p> <p>今後他の人に体験していただくプログラムがあったらモバイルバッテリーやポケットWiFiの持参の推奨を事前にお伝えしておいたり、ホームページでの紹介が可能だったら付け加えたらいいかもしれない。</p>

【資料4：Map 活動の企画書】

Map 普及活動：企画書 2021.5.13

1) 各学部への呼びかけグループ：佐藤・龍谷・久保田・橋本 2) 30秒動画：山田・田端・本橋 3) a)アソシエイト / b)アドバイザー：山本悠・東谷・酒板

目的	生徒・先生にMAPの存在を伝える		
対象 / ターゲット	生徒・先生・保護者		
時期 / 期間	6/23(水) アゼンブリー	場所	高等部チャペル
準備物	原稿、スライド、動画、(MAP)	Map 必要枚数：	— 枚
具体的内容	<p>プレゼン形式</p> <p>原稿(東谷、山本)</p> <p>スライド(山本)</p> <p>読む(山本、東谷)</p>		
方法	<p>＜制作目的＞</p> <p>30秒動画のナレーションで PEACE MAPの概要をYahoo!ニュースや神戸新聞社の取材のような社会に公開されているという情報をスライドに盛り込ませる。</p> <p>＜原稿内容＞</p> <p>アドバイザーで紹介する内容と合わせる。(WWLに開拓事項はアゼンブリーでは取り扱わない)</p> <p>① PEACE MAPを完成にさしかけ ←(平和意識を強めてほしいという思い)</p> <p>② PEACE MAPの料中の1ヶ所の情報を添えて、簡単にこのプロジェクトを体験してもらう。</p> <p>③ PEACE MAPを使うことで、自分たちの活動実績を伝えることが主眼にあるので、</p> <p>* 細かい学習内容の説明はしない。</p> <p>* もとのプロジェクトに詳しく知りたい人は「3A 4年・3A 酒板・36 東谷」までお待ちしております。</p>		

## 【6/3(木)進捗状況報告】

グループ a) 各学部へ呼びかけ    **b) 30秒動画**    c) アッセン/OHS

### 1) 本日起り組んだ内容

○台本決め

場所: 屋上 → 校門前 → 神社 → 新月池 → 礼拝堂 → 中央芝生 → 時計台

動き:

パッとセリ替え

15~20秒

足下 → マップ → iPad  
→ 3秒カウント カメラ → 暗転

10~15秒

### 2) 今後の予定

○撮影(6/6)

○編集(6/17まで)

○全体にロイロで共有(6/18)

### 3) 課題・相談事

・あれば貸してほしいもの

→ 手ぶれ補正器具、ドローン

・アップテンポでおしゃれで平和なBGM(フリー音源)

## 【資料6：原爆についての発表フィードバック例】

### 「原爆」についての発表

「原爆」について、各グループで以下のテーマを選んで調べ、次回の授業で発表：1グループ8分・質疑応答2分

- ①核兵器をめぐる世界の現状と核兵器禁止条約について
- ②核兵器の仕組み（広島型、長崎型などの型や科学的な危険性など）
- ③広島市の歴史（原爆が落とされた時の被害状況やその後の復興の様子など）
- ④長崎市の歴史（原爆が落とされた時の被害状況やその後の復興の様子など）

	知識	整理	視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	時間
A	課題で必要とされた自分が得た「知識」について量と質が十分である。	伝えたい知識が簡潔に整理されている。	文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意が感じられる。	設定された時間の+15秒で発表を行った。
B	課題で必要とされた自分が得た「知識」について量と質がある程度ある。	伝えたい知識がある程度整理されている。	文字のフォントやグラフ・図がある程度効果的に用いられている。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意がある程度感じられる。	設定された時間の+15秒で発表を行うことが出来なかった。
C	課題で必要とされた自分が得た「知識」について量と質があまりない。	伝えたい知識があまり整理されていない。	文字のフォントやグラフ・図があまり効果的に用いられていない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	

#### ② 核兵器の仕組み

概要があるのは大変良いです、聴衆はどのような構成で論が進められるのか頭に入りやすいです。長崎型と広島型の違いの説明は端的でした。それぞれの科学的な説明については詳しく調べてくれたことはよく分かります。ただ、専門用語をどこまで使いながら説明するのか、というのがカギです。聴衆の理解のレベルをよく考えたときに、それらを使うことが理解を助けるか阻害するかについては慎重にならないといけないはずですが、ほんの一例ですが、TNT 火薬 2 万トンに相当する、と言われてそれが一体どれほどのものなのか聴衆がイメージできて伝わるか、についてはよく考えたほうが良かったと思います。「科学的な危険性」について、広島・長崎型で説明の枠組みを合わせたほう（例：説明する項目を同じにする）が聴衆は分かりやすいはずですが、山田さんと山本さんが事前に相談・整理して、例えば同じ表を使うなどして比較検討するともっと分かりやすくなったと思います。佐々木さんのエピソードは、発表を聞き取りここでは必要ないのではないのでしょうか。このテーマはあくまで「科学的な危険性」であり、「核兵器の仕組み」です。被害の「ストーリー」ではないと思います。

〇〇さんは原稿見ずに行いましたが、多くの人は手元の原稿に視線が集まっています。手を使ってスライドを示しているのはよいですが、もう少し聴衆の存在を意識した発表を期待します。

【資料7：大福先生によるワークシート】

①これまで調べたことを整理してみよう

これまでの研究などで明らかになっている事実は何だろう？

<b>事実①</b> ヨーロッパの脱原発が進んでいる	<b>根拠①</b> 書籍
<b>事実②</b> 脱原発に民主主義が関わっている	<b>根拠②</b> 書籍、ニュース
<b>事実③</b> ドイツは発電力の5割を占める原子力を止め、再生エネルギーを進めている	<b>根拠③</b> ドイツの資料

調べていて疑問に思ったことは何だろう？

なぜ同じ民主主義である日本は脱原発しない、出来ない？

自分が明らかにしたい問い

日本はなぜ民主主義をあまり推していない？

明らかにするためにやること

国民の意見を聞くデモット

②自分の関心を掘り下げてみよう

一番おもしろいと思った事実を選んでください

・なぜ、どんなところがおもしろいと思った？

②

「原発と民主主義」関わっていたこと  
 → 日本は脱原発に関しては、電気会社や政府が動いているイメージがあるけれど、国民が動くことで、そこに政府が関係して。その違いが、環境問題や原子力のあり方について多岐が広がったこと。

なぜおもしろいと思ったのか更に掘り下げてみよう

・その事実に関連するような経験を書いてください  
 ・その事実と自分のつながりを書いてください

・スウェーデンは20代から80代までの年代も投票率が80%あるに对比、日本は60%超は高齢者のみで、若者は40%以下。  
 ・ドイツの対策も、福島も、もんじゅも、原発が後に回っている。  
 ↳「へばりた」という国民の意見を踏まえれば、関わるとも思えない。

【資料8：夏休みワークシート】

新聞記事から発見する

テーマ：戦争・エネルギー（どちらかに○をつける）

A. 1つの記事に書かれている課題や取り組みを書き出す

具体的に提起されている課題や取り組みは何ですか？

①誰が	何を(何に)

課題として(取り組んでいる)

(記事貼り付け欄)

B. 自分の関心を掘り下げてみよう

②共感

・なぜその課題に興味を持ったのだろう  
 ・取り組みのどんなところに共感したのだろう

自分の体験

・課題や取り組みに関連する自分の実体験は？

③自分はどうに関わりたいか？

組 番名前

【資料9：自分の理想像】

2年間の集大成として、ハンズオンラーニング最後の時間に、自分はどうなっていたいか、自分の理想像を、理由、経緯を踏まえて400字程度で論じなさい。

今まで原爆ドームや資料館に行ったり語り部さんの話を聞いたりして、自分の中では理解しているつもりでいました。しかし、行ったことまでは覚えていてもその内容はほぼ覚えていないことに気づきました。それに気づいたのは前にエネルギーグループと合同で発表した時です。情報集めのために持っていた長崎平和資料館のパンフレットを見返しましたが、表紙の場所しか覚えてませんでした。これは、私自身が戦争を昔のこと・自分とは関係ない遠い場所にある物だと思い込んで関心がなかった事や、怖くてリアルな歴史から目を逸らしていた事などが理由です。そこで初めて自分と物事を無意識に切り離して考えていたことに気がつきました。いくらネットで調べてもお話を聞いても、自分の興味がなければ、自分事として捉えていなければ、ただ理解した気持ちになっているだけです。その事から私は、物事を他人事だとはじかずに自分事として捉え、自分の中に落とし込んで本当に理解できるような人間になりたいです。

<全員への内容・評価についてのコメント>

皆さん全員の大変心強い、そして芯のある「こうなりたい」という理想像に感銘を受けています。是非ともそのような皆さんを最後まで教員として、また身近な大人としてサポートしたいと思いを新たにしました。以前、3年生の学年礼拝でも話をしましたが、現在の自分がすべきことを、過去からではなく、未来から逆向きに設計して考えてほしい、と伝えました。1年後、3年後、10年後の自分はこうありたい、だけれども過去の自分はこうだった、だから今これをするんだ、というように、日々の生活における自分の立ち位置を明確にしなが、未来に向けて自分で意味と意義を生み出す行動を今起こしてほしいと思います。

さて、書き方についてです。このようなエッセイであれば、英検のライティング同様、まずは「私はこうなりたい」という結論を先に書くことが鉄則です。半分以上の人がそう書き出しています。そう思うに至った理由・経緯をその後続けることで、読み手は皆さんの結論を常に意識しながら内容を繋げて理解することが出来ます。また、ハンズオンラーニング、というのがキーワードなので、授業内の具体的な出来事や内容が土台となって考察することが期待されていますが、抽象的な言葉に留まっている人が散見されます。誰にも書けない自分オリジナルの理想像だからこそ価値があるので、エッセイも自分事してみてください。

<個人への評価についてのコメント>

授業の中での具体的なエピソードがあることはとても良いのですが、緑色の部分は文の最初に持ってきたほうが、読み手は助かります。

	考察	文字数
A	自分の理想像と、経緯・理由が有機的につながり、考察までに発展した記述が多くみられる	400字程度におさまっている。
B	自分の理想像と、経緯・理由がある程度つながり、考察までに発展した記述がみられる	
C	自分の理想像と、経緯・理由があまりつながっておらず、考察までに発展した記述があまり見られない。	400字程度におさまっていない。



# KG PEACE MAP

アプリ「マチアルキ」を使って、関学の戦争の歴史を知ろう！

## KG PEACE MAPって??

関西学院高等部ハンズオンラーニング受講生が制作した、  
関西学院構内や上ヶ原八幡神社などに散りばめられた  
ARスポットを散策しながら  
関西学院と戦争の歴史について知ることが  
出来るマップです！

### どこにあるの？

各学部事務室、事務室前に  
配置しています。

是非お取りください！！



このようになマップです！

関西学院高等部  
ハンズオンラーニング受講生一同

## 【資料11：出張授業の指導案】

### 1月11日(火) 15:45~16:40 授業案

到達目標	①KGの戦争の歴史を身近に感じてもらう ②平和について考える機会を作る
------	--

事前に準備しておくもの: ワークシート、KG PEACE MAP(BASIC受講者の人数分)

時間	内容	準備物
15:45~16:05 (20分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート、KG PEACE MAP配布(2分)</li> <li>・あいさつ(3分)</li> <li>・今回の授業の趣旨説明(3分)</li> <li>・各自ワークシート記入(2分)</li> <li>・生徒ディスカッション(5分)→ワークシートの内容や戦争についての知識をグループ間で共有(マナボードに記入)</li> <li>・ディスカッションで出た意見を全員で共有(5分)</li> </ul>	<b>【BASIC生徒】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・筆記用具</li> <li>・iPad</li> <li>・スマートフォン</li> </ul> <b>【ハンズオン生徒】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・説明用パワーポイント</li> <li>・ワークシート</li> <li>・KG PEACE MAP</li> <li>・マナボード/マジックペン</li> </ul>
16:05~16:27 (22分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動画への導入(2分)</li> <li>・KG OBの戦争体験者の方へのインタビュー動画(20分)</li> </ul>	<b>【ハンズオン生徒】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・動画</li> </ul>
16:27~16:39 (12分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート記入(2分)</li> <li>・グループ間で意見を共有&amp;マナボードにまとめる(5分)</li> <li>・グループ間での意見を全体で共有(3分)</li> <li>・次回の授業説明&amp;ワークシート回収(2分)</li> </ul>	<b>【ハンズオン生徒】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート</li> <li>・マナボード</li> <li>・マジックペン</li> </ul>

### 1月18日(火) 15:45~17:00 授業案

到達目標	①KGの戦争の歴史を身近に感じてもらう ②平和について考える機会を作る
------	--

事前に準備しておくもの: ワークシート、KG PEACE MAP(BASIC受講者の人数分)

時間	内容	準備物
15:45~15:55 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート再配布&amp;あいさつ(2分)</li> <li>・歌集の説明(5分)→使い方、プロジェクトの紹介、アプリのダウンロード</li> <li>・歌集のグループ決め(3分)</li> </ul>	<b>【BASIC生徒】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・筆記用具</li> <li>・iPad</li> <li>・iPhone</li> </ul> <b>【ハンズオン生徒】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・説明用パワーポイント</li> <li>・ワークシート</li> <li>・予備のKG PEACE MAP</li> </ul>
15:55~16:40 (45分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>各グループに分かれてキャンパス内を歌集</li> <li>→あらかじめ設定した3ルートの中から1ルートを選んで歌集</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スマートフォン</li> </ul>
16:40~16:47 (7分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動画の説明(2分)</li> <li>・KG OBの方からのメッセージ動画(5分)</li> </ul>	
16:47~16:59 (12分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート記入(5分)</li> <li>・グループ間で意見を共有&amp;マナボードにまとめる(5分)</li> <li>・グループ間での意見を全体で共有(3分)</li> <li>・あいさつ&amp;ワークシート回収(2分)</li> </ul>	<b>【ハンズオン生徒】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート</li> <li>・マナボード</li> <li>・マジックペン</li> </ul>

1年 組 番 \_\_\_\_\_

KG PEACE MAP を使って関学の歴史を知り、平和な未来を考えよう！！

1. 散策してみて、一番印象に残ったスポットとその理由を書いてください。

[ ]

2. 下の ( ① ) と ( ② ) に当てはまるように2回の授業を通して変化したことを書いてください。

戦争や平和について、

(①) \_\_\_\_\_ )とっていたけれど、  
(②) \_\_\_\_\_ )と思うようになった。

3. 平和について考える機会が少ない今、私たち高校生にできることはなんだと思いますか。

[ ]

4. 今回の活動(2回の授業)はいかがでしたか。良かった点と改善点を教えてください。

○マップやARコンテンツについて○

良かった点	改善点
[ ]	[ ]

○授業の進行や内容について○

良かった点	改善点
[ ]	[ ]

5. その他、ご感想があれば書いてください。

[ ]

年 組 番

### KG PEACE MAP～関西学院の戦争史を知って平和な未来へ繋げよう～

本日はこのような機会を設けていただきありがとうございます。楽しんで平和についての学びを深めていただければ幸いです。中学生のみなさんの平和に対する考えを、私たちの今後の学びに活かしたいと考えています。以下の質問の回答のご協力をお願いします。

●以下の質問は発表を聞く前にお答えください。

次の中で正しいと思うものに印をしてください。

- 関西学院は1929年に現在の上ヶ原にキャンパスを移転した。
- 校歌『空の翼』が歌えない時期があった。
- 関西学院のキャンパス内には神社があった。
- “Mastery for Service”はC.J.L ベーツ(第4代院長)が提唱したものである。
- 時計台に掲げられたエンブレムは取り壊されたことがある。
- 関西学院は海軍と関わりがあった。

●以下の質問は発表を聞いた後にお答えください。また、これらの質問に正解はないので、正直に答えていただけると幸いです。

1. あなたは今回の発表を聞いて関学の戦争の歴史について興味を持ちましたか？

当てはまるものに○をしてください。

興味を持った 5 4 3 2 1 全く持たなかった

2. MAPの裏面「各スポットの説明」に記載されているスポットの中で、1番興味を持ったスポットとその理由を書いてください。

スポット：

理由：

3. (①)と(②)に当てはまるように発表を聞いて変化したことを書いてください。

(①) )とっていたけれど、

(②) )と思うようになった/だった。

●その他、発表を聞いた感想を書いてください。

【資料14：自己評価】

観点	説明	4	3	2	1
平和な未来の創造のために、他者と協働しようとする人間性	<p>【オナーシップ】 自分と社会に責任を持たせらるる大切にする姿勢が自分にはあるか</p> <p>&lt;根拠&gt; SDGs 16の「平和と公正をすべての人に」の目標を達成するために、まずは身近な競争者に目を向けた。その後、KGと戦争の歴史を探るために学院史編集部に入社し、知れぬIIエングルの悲しい歴史的事実を教わった。KG PEACE MAPという形に残した。SDGsを目指して、社会のために自分でも行動をやりたいと思う。</p> <p>【他者との協働力】 クラスメートやその他の人々と協働してプロジェクトに取り組めるか</p> <p>&lt;根拠&gt; ハルステーションの授業は、友達と協力して、前に進めたい。KG PEACE MAPは1人1人が自分の役割を担って進めていく。皆が1人で進めたい。これは協働が大切だと気づいた。SDGsは協働が大切だと気づいた。皆が1人で進めたい。これは協働が大切だと気づいた。</p> <p>【課題発見力】 与えられた、もしくは自分の関心のあるテーマから課題を発見することができるか</p> <p>&lt;根拠&gt; 「問い」が答えではなく、自分で探っていく授業だと。最初は難しいけど、正しい答えは自分で探っていく授業だと。最初は難しいけど、正しい答えは自分で探っていく授業だと。最初は難しいけど、正しい答えは自分で探っていく授業だと。最初は難しいけど、正しい答えは自分で探っていく授業だと。</p>	<p>少なくとも1つの場面で、自分と社会のあり方を理解し、わきまをもち、両方達成しようとする姿勢または行動がわかる</p> <p>グループの中で、1人で自分の役割を担うことができる</p> <p>授業から与えられた課題を、自分が取りたい形に変換して取り組むことができる</p>	<p>自身の学びを大切にしようとはしており、また社会の構成員としての自覚を持っている</p> <p>グループの中で、1人で課題解決に向けて取り組むことができる</p> <p>授業から与えられた課題をそのまま使っている</p>	<p>1</p> <p>自身の学びを大切にすること、また社会の構成員としての自覚を感じている</p> <p>対戦について何らかの説明をしている</p>	
未知の状況から本質的な課題を発見し、解決に取り組む思考・判断・表現力	<p>【思考力】 対象について分析・比較検討・考察し、結果導かれる結果を自分の言葉で明らかにすることができるか</p> <p>&lt;根拠&gt; 「問い」が答えではなく、自分で探っていく授業だと。最初は難しいけど、正しい答えは自分で探っていく授業だと。最初は難しいけど、正しい答えは自分で探っていく授業だと。最初は難しいけど、正しい答えは自分で探っていく授業だと。</p> <p>【判断力】 目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができるか</p> <p>&lt;根拠&gt; 目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。</p> <p>【表現力】 他者に対して結果意図を伝えることができるか</p> <p>&lt;根拠&gt; 目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。</p>	<p>対象について説明することができる。また、ゲーム、美術、法則などの根拠、もしくは論理が他者に説明可能な可能性を備えている場合がある</p> <p>目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる。</p> <p>他者に対して意見を表明する際、一通りの表現やコミュニケーションの手段を活用することができる</p>	<p>目的を設定し、それを達成するための手段を選ぶことができる</p> <p>目的とは何か、手段と何が、ということを知ることができる</p> <p>自分の意見を文章にするには至らない</p>	<p>目的とは何か、手段と何が、ということを知ることができる</p> <p>自分の意見を文章にするには至らない</p>	
実社会の課題を解決するために活用できる知識・技能	<p>【知識】 課題を解決するために必要な知識を身に付けていて、それを他者に説明することができるか</p> <p>&lt;根拠&gt; KG PEACE MAPに集まった7人。自分も調べた「エングルの悲しい歴史的事実」を教わった。これからは、もっと詳しく歴史を調べたいと思う。自分も調べた「エングルの悲しい歴史的事実」を教わった。これからは、もっと詳しく歴史を調べたいと思う。自分も調べた「エングルの悲しい歴史的事実」を教わった。これからは、もっと詳しく歴史を調べたいと思う。</p> <p>【技能】 課題を解決するために必要な技能を身に付けていて、それを他者に教授できるか</p> <p>&lt;根拠&gt; 発表資料を107ポイントを使って、自分の平和のために活用できる知識・技能を全然持っていないなと思う。プレゼンでは、自分の考えを他者に伝える方法を教わった。プレゼンでは、自分の考えを他者に伝える方法を教わった。プレゼンでは、自分の考えを他者に伝える方法を教わった。</p>	<p>基礎的な知識を身に付けている</p> <p>基礎的な技能を身に付けている</p>	<p>基礎的な知識を身に付けている</p> <p>基礎的な技能を身に付けている</p>	<p>基礎的な知識を学習する必要がある</p> <p>基礎的な技能を学習する必要がある</p>	

## 【資料15：平和グループ最終課題の一例】

KG Peace Map プロジェクトを通じて感じた「私にとって平和な社会とは」を自分の言葉で800字程度で伝えてください。

KG PEACE MAP プロジェクトを通じて感じた私にとって平和な社会は、「個を隠さず、自分がやりたい事に思う存分取り組め、かつ安心して過ごせる社会」です。

このように感じた理由は3つあります。

1つ目は、編集室の池田さんのお話を聞いて知った、戦争中に関西学院や関学生が「個」を消していた歴史です。空襲を避けるために関西学院のシンボルである時計台は黒く塗られ、目立たないために中学部生はカーキのゲートルを履いていたと仰っていました。また当時は、それによって誇りを失ったと感じた関学生もいたそうです。そのように、「個」を隠して自分を殺しながら過ごすことは平和ではなく、堂々と個を出して認められる社会が平和だと思いました。

2つ目は、自分がやりたいことに思う存分取り組めるかどうかです。KG PEACE MAP を作るために、皆で話し合ったりインタビューしたり、色々な方の協力を得たりしました。KG PEACE MAP を完成させることが出来たのは、自由に考えて行動し、やりたいと思った時に思う存分取り組める環境やサポートしてくれる環境が整っていたからだと思います。関西学院と戦争の歴史の中には、関学生が学徒出陣に行かされたり、航空隊に所属しなければならなかったりと、自由に行動が出来ないことがたくさんありました。そのように、行動が制限され自分がやりたいことに思う存分取り組めない社会は平和ではないと感じました。

3つ目は、安心して過ごせるかどうかです。2年生の夏休みに調べた第二次世界大戦についてのプレゼンをした時、戦争孤児や飢餓の問題について聞いた事がとても印象に残っています。その中でも、空襲に怯えながら、その日の食料について考えながら1日1日を生き延びることに必死だったという内容が衝撃的で、安心して毎日を過ごすことができない社会は平和ではないと感じたことを覚えています。

これらの理由から、「個を隠さず、自分がやりたい事に思う存分取り組め、かつ安心して過ごせる社会」が私の感じた平和な社会です。

科目	グローバルスタディアドバンスド	学年	3	単位	2	受講人数	14名
概要 1 学期	<p>2021 年度 3 年生の授業は、2 年間通して計画する 2 年目にあたり、2 年目として初の取り組みとなる。グローバルスタディアは、これまで SGH 終盤から 3 年生で実施していた海外の高校生との通信型 PBL 授業(定期的な英語によるオンラインディスカッションを通じて身近な課題解決の実践に取り組む)という既定路線があった。そして、これまでの通信型 PBL 授業については、軽薄な実践になりがちで、しっかりした問題の理解や分析が欠如しやすいという反省があった。それを受け、WWL 事業で引き継いだこの授業では、1 年目は問題を「知る」過程を重視し、そのうえで海外の高校生との PBL に取り組む段階を迎えることとなった。</p> <p>2020 年度は、温暖化をテーマに、温暖化を知ること重点を置きつつ、温暖化に対する実践を知り、行動する主体や行動することについて学ぶ機会も増やし、高校生にできる実践(以下、「マイアクション」とする)に意識を向けさせた。その結果、生徒が各自で温暖化のなかでも特に問題と感じる分野に気づき、それを改善できるマイアクションとして具体化させた。計画当初は、その実践は 2 年次で完結させ、そこで学んだプロセスを活かして、3 年次からは海外の高校生との協働で新たな実践に取り組む予定だったが、生徒からは一度考えたマイアクションの続行を望む声が多く、継続的な取り組みから学べることも多いと考え、それを継続させることとした。</p> <p>2020 年度の「知る」と「行動・実践する」に加え、2021 年度は「国際協働」の要素も含ませ、実践を通じて実践的なスキルを身につけること、さらに異なる価値観や文化的背景の人たちとの協働について学ぶことを目標とした。これまでの企画実践においては、緻密な計画、他者や外部との連携・巻き込み、広報の戦略や方法といった実践的なスキルの習得が期待できた。今回は、そのうえに英語ディスカッションの要素を加えた。具体的には、1 学期は全 10 回の授業で 5 回のオンラインディスカッションを組み入れ、マイアクションに協働の要素を取り入れてブラッシュアップする期間と位置づけた。これまで通信型 PBL 授業の初期では、1 学期ないし 2 学期だけの全 10 回程度の授業で、ほぼ毎回英語ディスカッションを実施してプロジェクトの完結、報告まで完了させていたが、昨年度からは質を重視すべく、オンラインディスカッションの頻度を減らし、内容の理解や消化を重視した。定期的な英語ディスカッションによるプロジェクト実践は、単なる国際交流として楽しい企画に終わらず、価値観の違いや細かな言語コミュニケーションに起因する、意思疎通や合意形成の困難さも体験できる機会として貴重である。</p> <p>指導の体制としては、2 年次に担当していたうちの 1 名(社会科)がそのまま引き続き担当し、新たに英語科の教員が 1 名加わった。また、海外の提携先とのコーディネートについては、引き続き With The World 社に担当いただき、今回の海外提携先は、フィリピンのマニラ近郊、Quezon City にある Saint Patrick School となった。With The World 社には、オンラインディスカッション(Zoom)の運用だけでなく、生徒(グループ)にラーニングアシスタントを付けていただき、継続的な指導や評価にも協力いただいた。</p>						

## 1. 1 学期の目標

以上のような目的に沿って、次のような目標を設定した。根底には、これまでの PBL 型授業では企画の実施自体に意識が集中ししまい、当初の目的を見失ったり、やりきった達成感だけで実施後に十分な振り返りができなかつたりといった反省がある。企画の実施自体を目的化せず、実践を学びの対象として捉えること、PDCA サイクルでいう C・Check と A・Action の段階を意識させることを目標とした。また、双方の提案については、昨年度の通信型 PBL 授業で試行した取り組みで、日本と海外がそれぞれ別に進めてしまうことを避ける目的がある。そして、英語ディスカッションについては、英語力だけでなく、ディスカッションにおけるファシリテートやタイムキーパーなど、議論の流れを読みつつ、全体を意識して行動できるようなスキルを意識した。これについては、With The World 社のラーニングアシスタントの活躍によるところが大きい。

- ①マイアクションの実践に対して、自身で客観的に捉え、成果や課題を見つめる
- ②マイアクションの実践の理解・分析を、英語を用いて相手に正確に伝える
- ③相手の考える社会問題に対して、自身の経験や知識を活用し、相手の状況や立場に応じた解決策を考える
- ④相手と良好な関係を構築し、英語を用いたディスカッション(意思疎通や合意形成)に慣熟する

⑤英語ディスカッションに際し、相手との議論や日本人どうしの協力において各自が有効な役割を果たす

## 2.1 学期の実施内容

### ①4/15 <オリエンテーション>

- ・授業のねらい、オンラインディスカッションの概要、評価方法などを説明
- ・次回授業(「マイアクション」)に取り組んでの成果と課題についての発表の説明と準備
- ・次々回授業(フィリピン側とのオンラインディスカッション 1 回目)の説明と準備
- ・提出物について説明

### ②4/22 <クラス内発表>

- ・クラス内の 3 つのマイアクションについての発表(テーマに関する知識や理解の深まり、成果と課題)

### ③5/6 <フィリピンとのオンラインディスカッション 1 回目>

- ・アイスブレイク:自己紹介、地元や学校の紹介
- ・マイアクションについてのプレゼンテーションとディスカッション(質疑応答)
- ・フィリピン側からの身近な社会問題についてのプレゼンテーションとディスカッション

### ④5/13 <準備>

- ・次回授業(オンラインディスカッション)に向けての準備  
(フィリピン側の社会問題を受けての提案を考える)

### ⑤5/27 <フィリピンとのオンラインディスカッション 2 回目>

- ・フィリピン側に解決策を提案する
- ・フィリピン側からの提案を受ける

### ⑥6/3 <準備>

### ⑦6/10 <フィリピンとのオンラインディスカッション 3 回目>

- ・マイアクションにフィリピン側を巻き込む提案や計画

### ⑧6/17 <フィリピンとのオンラインディスカッション 4 回目>

- ・マイアクションにフィリピン側を巻き込む提案や計画

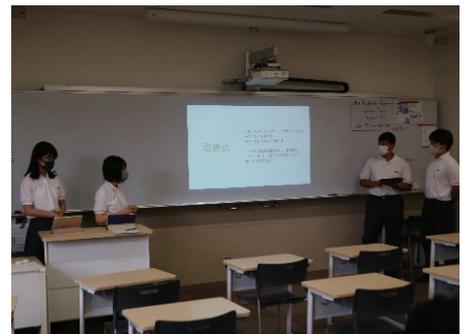
### ⑨6/24 準備

### ⑩7/1 <フィリピンとのオンラインディスカッション 5 回目>

- ・フィリピン側との協働の要素を組み込んだマイアクションの概要について発表

#### 内容

- ・2月の計画から一定の進捗を経て、アクションを一步踏み込んで、何のためにどう改善できるか(改善したか)
- ・どう海外の高校生を巻き込むか
- ・高等部生など周囲にどう影響できたか
- ・そもそも最初の問題意識と結びついているか
- ・そもそもの問題の理解が深まったか



### 3.評価の仕組み

評価の仕組みについては、基本的には昨年度から変わらず、日常的な知識の獲得と思考を可視化する学びの記録と、各種成果物の評価で行った。今学期から、3つのマイアクションに分かれての活動であったため、評価もグループ評価と個人評価の2階建てとした。

まず、個人評価の対象としては、①学びの記録と②最終レポート、③英語ディスカッションの際に課したセルフリフレクション(後述)、④最終プレゼンテーションの英語パフォーマンス(準備や表現力)、⑤最終プレゼンテーションでの質疑応答、⑥ラーニングアシスタントによる評価がある。学びの記録の評価方法は昨年度と変えず、獲得した知識の整理を主とした部分、既存の知識や経験との結合を主とした着眼点、疑問や発見を深化させる考察の3つで評価した。

最終レポートは、「海外の高校生とのディスカッションを通じて学んだこと(英語力以外で)」、「アクションの計画、実践のために必要な力」というテーマ設定で課し、内容の考察の深さ(表面的か本質的か)、その根拠の両面を評価の視点とした。

英語ディスカッションの際のセルフリフレクションと最終プレゼンテーションの英語パフォーマンスは、英語科の教員による評価で、昨年度にはなかった視点であり、有効であった。

最終プレゼンテーションでの質疑応答については、積極性だけでなく質問の内容が本質的かどうかも含めて評価した。ラーニングアシスタントによる評価は、With The World 社との連携のなかで続けてきたもので、少人数の生徒に継続的に接し観察してきてくださった故に可能な、この授業でも重要な評価といえる。具体的には、英語コミュニケーションの積極性、英語ディスカッションに向けた準備やリサーチの質、プレゼンテーションのスキル、グループ活動におけるリーダーシップや発想力、サポート力といった個人の適性を評価している。

続いて、グループ評価の対象には、①最終プレゼンテーションと、②ラーニングアシスタントによるマイアクションの規模、目的意識や問題分析、オリジナリティ、計画性の評価が挙げられる。最終プレゼンテーションは、以下のルーブリックを用いて評価した。

	A	B	C
計画後のアクション実施の評価・分析	実施内容について、本質的な評価・分析ができている	実施内容について、表面的・技術的な評価・分析に留まっている	実施経過の報告に留まっている
実施の評価・分析とアクションの改善とのつながり	実施の評価・分析が合理的にアクションの改善につなげられている	実施の評価・分析とアクションの改善のつながりが希薄である	実施の評価・分析がアクションの改善につなげられていない
アクションの改善	明確な目的に沿った改善が盛り込まれている	表面的・技術的な改善に留まっている	計画時点から改善がみられない
海外の高校生の巻き込み	明確な目的や理由に基づいて、海外の高校生の特性を活かした巻き込み、協働が出来る	表面的な協働に留まっている	海外の高校生との協働がほとんどできていない
高等部生など周囲への普及	非常に積極的に、有効な方法で高等部生徒への普及・発信がなされている	高等部生に一定の普及・発信が見られる	高等部生への普及・発信がなされていない
最初の問題意識との結びつき	海外の高校生との協働など、あらゆる面で常に最初の問題意識に沿って自然に考えられている	多少強引ながら最初の問題意識につなげて考えられている	問題意識が最初から全く変わってしまっている
問題の理解の深まり	新しい知識や経験を得て、問題に対する理解が非常に深められている	問題に対する理解が一定程度深められている	問題に対する理解が変わっていない
スライドの工夫	論理的に構成されており、視覚的にも図表やグラフなどのデータが効果的に作られている	論理的な構成が見えづらく、図表やグラフなども十分に活用されていない	情報の羅列に終わっており、視覚的な工夫も見られない
発話	声量や視線・表情、原稿を見る頻度など発表に対する熱意が感じられる	声量や視線・表情、準備などに十分な熱意が感じられない	情報の伝達に留まっており、発表者に熱意や準備が感じられない
時間	9'30～10'30	8'30～9'30'、10'30～11'30	～8'30、11'30～

なお、学びの記録の評価については昨年度から継続しているが、プレゼンテーションやレポートの評価に際しては、ルーブリックの事前公表はせず、評価の視点のみに留めている。評価を意識し、それに合わせた作文をすることを避けるのが目的であるが、学期末にはルーブリックを公開して説明しており、そういった機会を重ねていけば、自然とこちらの想定する評価基準が生徒に伝わるのではないかと考えている。また、評価の基準も「表面的」「本質的」というような抽象的な表現ではあるが、生徒はこの授業での活動を続けることで、徐々に本質的な思考に慣熟している印象を持っている。

#### 4.成果と検証

1 学期の最大のポイントは継続的な英語ディスカッションの導入であり、英語を学ぶ通常の英語の授業と異なり、英語で内容を議論することに対しては生徒の不安も大きかった。開始当初の英語ディスカッションは、プレゼンテーションとすることで、予めスライド(視覚資料)とスクリプト(台本)を準備することができるようにした。しかし、コミュニケーションは低調で、ディスカッションには程遠い内容となっていた。どうしても「授業」という意識を持って取り組むなかで、いかにコミュニケーションを活発化できるかについて考え、英語ディスカッションの最初にアイスブレイクのプログラムを組み込むように工夫した。具体的には、生徒が使うタブレット端末で校内を案内し、高校生の等身大の「日常」を伝えられるオンライン学校紹介を行った。フィリピン側も学校や自宅など、生徒本人のリアルな周囲を体験できるコンテンツを準備してくれ、生徒どうしの距離感は縮まったように思う。そのほかにも、生徒のマイブームを紹介し合うなどすることで、授業や成績の対象としてではなく、いち友人として接することができ、同年代の外国人とコミュニケーションをとることが楽しいと思える空気を作ることができた。結果として、生徒のなかには個別に SNS アカウントを交換し、授業に関する内容だけでなく日常的にコミュニケーションをとるようになった生徒もいた。フィリピン側の生徒も個性的で魅力的な生徒が多く、たとえばプレゼンテーションのセンスなど、生徒にとって刺激となることも多く、関係は次第に良くなっていったように感じる。そのような関係性の改善と、何より継続的にディスカッションの回数を重ねることで、生徒のなかでは英語ディスカッションにも慣れていったようだ。



一方、継続的な英語ディスカッションに関して予想された課題として、価値観の差をどう受け止めるか、という点がある。この学期では、たとえばフィリピン側が提示してきた身近な環境問題が「タバコ」の問題だったことがあり、日本とフィリピンとで認識のズレが見受けられた。身近な問題に対して解決策を提案するという課題に即し、生徒は戸惑いながらも試行錯誤を続けていたが、身近に感じる問題の違いそのものが価値観の差でもあり、生徒にとって結果的にいい経験となった。

これまでの通信型 PBL 授業では、同じジャンルの問題に対して、互いの国で別々に取り組むことになり協働の要素が薄れたり、途上国に対して支援してあげるといった姿勢が現れたりといった課題があったが、今年についてはフィリピンの私立学校ということで、生徒の個性やプレゼンテーションのセンスなど、いい意味でフィリピンの持つ一般的な「途上国」というラベルを剥がし、いち高校生として対等な関係性で臨めた点は重要である。

PBL 型であるこの授業のひとつの核はアクションの実践にあるが、その面において重視したこととは、そもそもの目的意識を大切にすることである。このマイアクションは、1 年間の学びを経て、生徒が自ら気づいた問題意識に基づいており、表面上は植樹をしたり訪問授業をしたりエコバッグを推進したりという一般的な実践であっても、背後にそれだけの重みがある。実践段階になると、どうしても楽しく実践することに意識が行きがちになるなか、折に触れて当初の目的意識に沿っているのか、その実践がもともと感じた問題の解決につながるのか、という本質的な意識を持たせるよう心がけた。その結果として、1 学期最後の発表においては、表面的な質問だけでなく、常に当初の問題意識を忘れず取り組む姿勢、他のチームにもそれを問える力や姿勢がはっきりと見受けられた。これは、この 3 年生 1 学期の取り組みだけで得られたものではなく、一昨年度に BASIC 講座でじっくりと「本質的な問い」の姿勢を習得し、昨年度に時間をかけて温暖化について学んで問題の全体が掴めたことによる成果である。この点は、この科目の大きな成果であり、一連の探究科目が目指すべきところだと感じている。

#### 5.改善点

初めて 2 年連続でカリキュラムを編成するにあたり、1 年間じっくり時間をかけて問題を考えることができた一方、1 年目と 2 年目とのつながりに課題を残した。もともと既定路線であった通信型 PBL 授業という条件と、1 年間の学びの結果ある程度たちのできあがっていたマイアクションとがうまくつながらなかったということである。これまでの通信型 PBL 授業では、本校の生徒、海外の生徒ともにゼロから実践を考える(互いに自身が問題と感ずることをプレゼンし、解決策を提案し合い、協働して実践に取り組む)という過程を踏んでいた。しかし、今回は、マイアクションが実施可能など



ころまで詰められており、海外の高校生にとっては、スタート時点でかなり差がある状態になってしまった。関与できる要素が少なく、途中から参加する海外の高校生をどう巻き込んでいくか、主体的に取り組んでもらうかが今学期の課題であった。

この授業はメンバーも変わらず 2 年間継続で行われ、しかもマイアクションに継続的に関わり続けた点、通常のような試験がなく、毎回のワークや定期的なプレゼンテーションなど評価の対象が多岐に渡り多いことなどから、生徒にとっての負担は大きい。毎回の授業時間内だけでは準備しきれず、プレゼンテーションの準備などは宿題として自宅や休日に取り組まざるを得ない状況になっていたのは課題である。毎回のワークやプレゼンテーションに慣れた生徒や、マイアクションの実践に意欲的な生徒にとってはその負担も乗り越えられ、さらに高めていける一方で、どうしても取り残される生徒が出てくる。このプログラムに積極的な生徒と、低調な生徒とに二極化してきたのがこの時期であった。提出物の状況や内容にはっきりと差が現れるようになり、チームでマイアクションに取り組むなかで個人の様子が見えづらくなったこともあり、低調な生徒に参加を促す働きかけが不足してしまった。従来のような記憶や演習などの試験勉強が成績に直結する科目ではなく、考察の深さを言語化しないといけない科目である。この授業を通して、「成績」には結びつかない手応えや喜びが動機や熱意となり得るのだということが教員にも分かってきた学期であった。



<p>概要 2学期</p>	<p>2 学期はこの 1 年間だけでなく、3 年間の集大成となる学期であり、一定の結果、成果を出すことを意識してカリキュラムを組んだ。基本的な指導体制や授業進行の形式は 1 学期から継続し、内容も 1 学期から引き続きフィリピンの高校生も巻き込んだマイアクションへの取り組みとした。2 学期は、11 月に文化祭があり対外的な発表や実践をしやすいこともあり、マイアクションのまとめに適した時期である。</p> <p>成果発表においては、従来通りの成果発表プレゼンテーションを行うこととしたが、せっかくの通信型授業である特性を活かし、日本とフィリピン合同でプレゼンテーションを行うことを必須とした。また、限られた時間を有効に使うため、マイアクションの実施内容の報告ではなく、あくまでそれを通じて得た学びに焦点を当てさせ、より本質的な内容を意識した。最終発表に先駆け、中間発表の場を設け、他のグループの生徒や教員とのディスカッションを通じ、方向性の修正や内容のブラッシュアップができるようにした。</p> <p>また、2 学期独自の試みとして、通常のプレゼンテーションのほかに、自由な形式での成果物作成を課題として設定した。具体的には、生徒には動画やリーフレットなどを例として示した。これまで授業における「成果物」といえば、生徒にとってはプレゼンテーションが一般的である。プレゼンテーションの作成については、生徒には一定のスキルの蓄積もあり、慣れている分野ではある。ただ、プレゼンテーションは生徒にとっても、あくまで「授業内」あるいは「成績評価の材料」という印象が強い。自由な形式で取り組ませることは、マイアクションの内容を客観的に振り返り、その成果を誰かにより「分かりやすく伝える」ことを考えられるのはプレゼンテーションと同様ながら、誰かの目に触れるもの、何らかのかたちで残るものとして、生徒にプレゼンテーション以上のやり甲斐を感じてもらえ、様々な形式を考えることで創造性が高められるというメリットを想定してのことである。</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>活動成果物について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○表現する対象は、3 年生でのフィリピンとの協働企画全体             <ul style="list-style-type: none"> <li>・動画であれば、フィリピンとの協働企画のプロモーションビデオというイメージ (SNS で発表した実際の動画そのものではない)</li> <li>・リーフレットであれば、SNS で公開したポスターそのものだけではない</li> </ul> </li> <li>○できる限りフィリピンとの共同作業を含めて制作する</li> <li>○成功だけでなく、うまくいかなかったことも含めて考察・報告する</li> <li>○課題設定、解決策、実施、結果など一連のつながりとして考える</li> </ul> </div>

## 1.2 学期の目標

一定の成果を出し、それを発表できるようまとめることを意識し、以下のような、マイアクションの実践に重点を置いた目標を設定した。

- ①当初の目的に沿って、それを実現するための具体的な計画立案ができ、それを実行することができる
- ②英語ディスカッションに際し、相手との議論や日本人どうしの協力において各自が有効な役割を果たす
- ③海外の高校生とともに、具体的な計画立案やそれに沿った実践ができる
- ④海外の高校生との英語ディスカッションの際、互いの要求や対応の可否を考慮した交渉や妥結ができる
- ⑤海外の高校生とのマイアクション実践について総括し、効果的に伝達・発表できる
- ⑥他のグループの発表を、客観的な問題意識・批判的思考をもって観て、質問や指摘が出来る

## 2.2 学期の実施内容

### ①9/9

- ・2学期の方向性について説明
- ・次回授業でのオンラインディスカッションの準備

### ②9/16 <フィリピンとのオンラインディスカッション 1回目(通算 6回目)>

- ・提出物、成果物作成について説明
- ・自己評価の仕組み、個々の目標設定について説明
- ・互いの夏休みの生活について マイアクションの進捗について 今後の計画やスケジュールの確認

### ③9/30 <準備>

- ・成果物作成、最終プレゼンテーションについて追加説明
- ・マイアクション実践の準備

### ④10/7 <フィリピンとのオンラインディスカッション 2回目(通算 7回目)>

- ・次回授業での中間発表について説明
- ・アイスブレイクとして、日本語とタガログ語での Word Exchange
- ・マイアクションの実践について準備



### ⑤10/21 <中間発表>

- ・最終成果発表の内容や方向性をグループごとに発表
- ・他のグループの生徒、教員との質疑応答
- ・自己評価 1回目

#### 最終成果発表の内容

日・比 各 6～7分(動画があればそれも含んで)

テーマ「フィリピンとの zoom セッション型授業で温暖化問題に取り組んでみて学んだこと」

- ・海外とのセッションに取り組んでみて
- ・温暖化に実際に取り組んでみて

### ⑥11/11 <フィリピンとのオンラインディスカッション 3回目(通算 8回目)>

- ・次回の最終成果発表に向けた準備

⑦11/18 <フィリピンとのオンラインディスカッション 4 回目(通算 9 回目)>

- ・グループごとの最終成果発表(1 番目の発表は、3 年 WWL3 科目合同成果発表を兼ねる)
- ・クローゼンイベント



⑧11/25

- ・他の 3 年 WWL 科目の成果発表に参加
- ・今後のグローバルスタディに必要なことについてクラス内でディスカッション

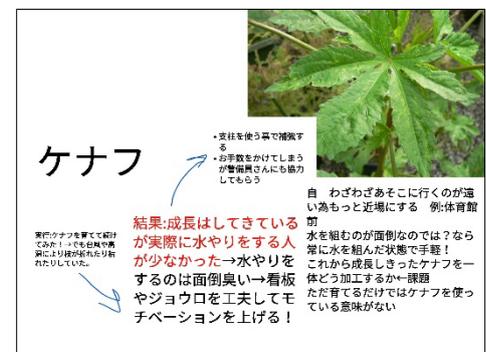


3.評価の仕組み

評価の仕組みは 1 学期と基本的に同じく、グループ評価と個人評価の 2 階建てとした。

個人評価の対象としては、①学びの記録 2 回と②最終レポート、③ラーニングアシスタントによる評価、④英語表現のリフレクションを設定した。

学びの記録は、1 学期に 4 回設定したが、手書きであったことに負担を感じる生徒が多かった。3 年生になって授業内容が英語ディスカッションとマイアクションという「実践」にシフトしたことで、それぞれの準備が主な学習活動となり、それまでの個々の考察を主体とした活動と大きく変化した。学びの記録のために新たな知識を書き出すこと、考察を可視化することが追加的な作業となり、生徒の負担になったと推測される。そこで、2 学期は学びの記録をデジタルでも作成できるようにした。具体的には、学校で導入している教育支援ツールの「ロイロノート」のカードの形式をとった。「知識」の部分については、デジタルでも可とし、実際の準備で用意したスライドやプレゼンテーションの原稿などでも代用できるようにし、手書きでなくてもキーボード入力できる、いつでもメモできる環境とすることで生徒の負担を軽減できるようにした。なお、学びの記録の評価基準はこれまでと同じである。



最終レポートは、個人評価の要となるもので、2 年間の探究活動を通じて、何をどう学んだかをまとめるものとして、以下の要点を示した。

- ・2 年生の学びで、何が問題だと感じたのか(課題発見)
- ・その問題を解決するには何が必要だと考えたか(仮説)
- ・解決のために何を大切に計画・実行したか(plan・do)
- ・その計画・実行を通して「できたこと・成果」と、「できなかったこと・課題」(検証・check)
- ・今後も継続するとしての展望 どんなことに注意するか、何を大切にするか など(action)
- ・2 年間の探究での自身の成長

これらを具体的な根拠を示して書く。このレポートの評価に際しては、考察の深さ、根拠、展開の論理性、成果・具体的

な学び、成長・本質的な学びの5項目について4段階での評価を重ねた。

ラーニングアシスタントによる評価の枠組みは1学期と変わらない。

続いて、グループ評価は、①英語プレゼンテーション、②最終成果物、③ラーニングアシスタントによる評価を対象とした。英語プレゼンテーションについては、今年度指導に加わった英語科の教員が行い、

- ・validity(妥当性)/reliability(信頼性)/trustworthiness(信憑性)を要素とする Content(内容)、
  - ・eye contact(アイコンタクト)/pronunciation(発音)/preparation(準備)を要素とする Delivery(伝達)
  - ・accuracy(正確さ)/fluency(流暢さ)を要素とする Language(言語表現)
  - ・stages(展開)/logical development(論理性)を要素とする Structure(構成)
  - ・timing(タイミング)/appropriateness(適切性)/cooperation(協力)を要素とする Interaction(相互関係)
- の5つの視点で5段階の評価を行った。

最終成果物については、内容(全体を網羅できているか、論理的な展開、本質が表現できているか)、表現力(伝える工夫ができているか)、協働性(チームでの共同作業やフィリピンとの協働が活かしているか)の観点で4段階評価をした。ラーニングアシスタントによる評価は、アクションの規模(いかに他者を巻き込めているか、積極的に外部にコミットできているか)/オリジナリティ/計画性や緻密さ/リサーチや問題分析の丁寧さについて評価をしていただいた。

さらに、今学期は、成績算出には組み込まなかったものの、提携している With The World 社によるコンテンツとして、自己評価の仕組みを試験的に導入した。13の項目[チャレンジ精神/他者・異文化理解/主体性・積極性/自己効力感/思考力/想像力・創造力/ファシリテーション力/気遣い・思いやり/チームワーク/傾聴力/英語コミュニケーション力/英語学習

に対する学習意欲/社会問題・SDGs への理解]があるなかで、チャレンジ精神と他者・異文化理解の2つは全員共通で設定し、あと3つを生徒が個人で選び、計5つの力について、各自が自己評価していく仕組みである。0~4の5段階のルーブリックが用意され、そこから予め目標を設定し、事前(スタート時)・中間・最終と自己評価を重ねることで自身の成長を可視化しようという試みである。最終的には、グループ内の他の生徒とラーニングアシスタントからのコメントを含めてフィードバックできた。継続的に生徒と関わってくれたるラーニングアシスタントならではの仕組みといえる。

自己評価	タイム	目標	事前	中間	最終
★	チャレンジ精神	3	2	2	2
★	他者・異文化理解	3	2	2	3
★	想像力	3	2	2	2
★	自己効力感	3	1	2	2
★	主体性・積極性	3	1	2	2

自己コメント

チャレンジ精神

他者・異文化理解

自己効力感

想像力

主体性・積極性

アシスタントスタッフからのコメント

#### 4. 検証

2学期の授業では、課題の内容や提出時期も含め、学期全体の予定を学期当初に示した。これは、その学期にすべき課題や時期が分かっていると計画立てて取り組みやすいという生徒の声に応えたもので、当然といえば当然の対応であるものの、生徒の主体的な活動を走らせながらそれに即応する形式の授業ではなかなか難しかった対策ではある。今回は最終成果発表を含むということで計画が立てやすかったが、探究型の授業では今後も必要となる視点であろう。ただ、生徒の主体性をどこまで許容するのかという根元的な問題にも通ずる難しさはある。

この授業の核である PBL の要素に関して、まず1学期の課題であった海外の高校生とのモチベーションの差や巻き込み方といった問題については、いまだ企画書や机上のものに過ぎなかったマイアクションが可視化できる段階になったことで壁を乗り越えた印象があった。もともとこの通信型 PBL 授業は、海外の高校生と企画を実践したという手応えを最大の魅力とするものだった。しかし、コロナ禍が続き、以前のような対外的な実践が出来ず、しかも既に決まったマイアクションに海外の高校生を巻き込んでいくという制約も加わり、停滞するリスクがあったものの、ようやく具体的なゴールや目標が設定できたことで、ディスカッションも具体的なものになり、生徒にも手応えのようなものが感じられるようになった。教育に関心をもち、系列の小学校への訪問授業を計画したグループはフィリピンの高校生に授業で流す動画を

作成してもらい、植樹に関心を持ったグループは、リーフレットを共同作成することになったが、フィリピン側にイラストやデザインに長けた生徒がいたことから、それをきっかけに具体的な話し合いが進行していった。具体的な目標があるのは PBL 型授業の最大の強みだと実感できた。

一方で、英語ディスカッションのもうひとつの目的である、異なる価値観の人たちの協働については、やはり壁に当たる経験をしていた生徒は多かった。事前に約束していたスケジュールが守られないこと(輪番制の SNS 投稿など)、日本側の思惑とフィリピン側の思惑が一致しないまま進めてしまったことなど、細かいものから比較的大きなもので、海外の人たちとのコミュニケーションで起こりうるトラブルを経験できた。なかには、WEB のツールを用いてスケジュールやタスクを共有・管理してそのトラブルを回避できたグループもあったが、いわゆる「日本人特有」の控えめなコミュニケーションの姿勢に起因するものが目立った。日本人はどうしても自分の主張を強く出せず、相手のことを気にして相手に合わせようとしたり、つい笑顔で頷き続けてしまったりというケースが多いと言われるが、まさにそのようなケースで、ディスカッションが終わってからどうしようかと悩んでいる姿を見かけた。教員から、相手は別に押し通したいと思っているわけではなく、こちらも自分の主張をはっきりと言えば意外と聞き入れてくれるものだというようなアドバイスをすれば、うまく進展したケースもあり、そういった海外の人たちとのカルチャーギャップを身を以て体験できたことは大きい。

とはいえ、英語ディスカッションにおいては、2 学期を通じて通算 9 回を経験できた。各回およそ 60 分に及び、「英語」の勉強ではなく、英語で内容を追求するコミュニケーションを実践できた経験は、他の生徒にはない経験である。しかも、その都度ラーニングアシスタントが関わってくれ、ブリーフィングで今日の目的を確認し、日によってファシリテーターやタイムキーパーなどの役割を交代して経験でき、最後に再度のブリーフィングで振り返りをしてもらえたこともあり、生徒のコミュニケーション力は確実に上達したといえる。最終的に、温暖化という入口から入り、3 つのグループはそれぞれ異なる問題意識を持ち、それぞれの実践を行った。

植樹が重要なのは当然ながら、最後はその植物の持つ二酸化炭素を固定化しないと無意味(たとえば燃やしてしまえば、結局二酸化炭素が放出されてしまう)だということにこだわりを持ったグループは、ケナフを育て、最終的に繊維をハガキにして卒業式に配るという企画を考えた。しかし、実際に育てる過程での分担でうまくまとまらないことなどがあり、最終的にはハガキの作成までには至らなかった。フィリピン側との協働という点では、ガーデニングやクラフトを SNS で紹介するという企画を行った。リーフレットの作成ではフィリピン側との意思疎通が詰め切れないところもあった。表面上は失敗に見えるかもしれないが、温暖化という問題がいかに大きなことかは身を以て体感できたであろうし、何より他の生徒を巻き込むことの難しさを経験できたこと自体が学びといえるのではないかと考えている。



温暖化の重要性にもかかわらず、それを体系的に学べる機会が少ないと感じ教育に問題意識を持ったグループは、近隣の高校生とのオンラインディスカッションと、系列小学校への訪問授業を企画した。近隣の 10 以上の高校に呼びかけたものの、年度末(2020 年度末)という時期的なこともあり、参加者は 2 名だった。しかし、それでも参加してくれた高校生からは、温暖化という問題に対して考え方の多様さを感じることが出来た。呼びかけの際には、同じように他の人たちとの意識の違いや温度差を感じつつ、自分たちの企画を説明する必要性や難しさを体感し、たった 2 名でも他校の

生徒の声を聞いたことは大きな成果だった。その後は、系列小学校への訪問授業に専念し、昨年度2学期の訪問授業の経験を活かして、授業の内容や進め方に磨きをかけようとした。昨年度の訪問授業では小学6年生が想像していた以上に多くの知識を持っていたこと、一方的な講義になりがちだったことを受け、思い切って内容のレベルを上げ、グループワークにもチャレンジした。フィリピン側との協働として、フィリピンの人たちが感じる温暖化の危機意識を動画にしてもらい、生徒が字幕を付け、授業でビデオレターのようにして用いた。小学生にも、少しは教科書のなかのことでなく、少し身近な人が伝えてくれているという印象を与えられたように思う。また、授業の内容では、ありがたい先進国と途上国という枠組みから脱し、一緒に考えて行動していかないといけないというメッセージを盛り込んでおり、それは大きな成果といえる。一般的には「途上国」とされているフィリピンの等身大の高校生と接したことで、途上国という思考について考えられたのではないかと思う。これに関わった生徒からは、「知識ではなく教養が必要」という言葉が聞かれたが、それは知識が繋がったもの、知っているだけでなく何かに応用・活用できるもの、という意味を指すとのこと、こういったことを得てくれたことも大きな成果だと考えている。

これから関西学院高等学校での学びの1歩を踏み出す人へ

みなさんと一緒に探求できることを楽しみにしています

皆さんのこと思いやり満載なプログラムです  
新しい学び、新しい出会い、新しい視点をきっと見つかるでしょう

共に、これからの未来を担う  
グローバル人材になる準備をしませんか？

**CHANGE THE WORLD WITH US!!**

2022

**SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS**

持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals)とは

2015年9月の国連サミットで採択された「2030年持続可能な開発目標」は、2016年1月1日より発効された。2015年9月の国連サミットで採択された「2030年持続可能な開発目標」は、2016年1月1日より発効された。2015年9月の国連サミットで採択された「2030年持続可能な開発目標」は、2016年1月1日より発効された。

SDGsは「誰一人取り残さない (leave no one behind)」を理念としている。SDGsは貧困、健康、質の高い教育、ジェンダー平等、持続可能な消費と生産、気候変動、海の豊かさ、陸の豊かさ、エネルギー、平和と公正、パートナーシップの17の目標からなる。日本としても積極的に関与している。

**WELC (World Wide Learning Consortium)**とは

国際科学技術教育の発展を目的とした「ワールドワイドラーニングコンソーシアム」は、グローバルな視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。

**グローバル教育とは**

グローバル教育とは、国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。

**今年、何が起きているのか**

今年、何が起きているのか。今年、何が起きているのか。今年、何が起きているのか。今年、何が起きているのか。

**温暖化がもたらす悪影響**

温暖化がもたらす悪影響。温暖化がもたらす悪影響。温暖化がもたらす悪影響。温暖化がもたらす悪影響。

私達の学び

**MY PROJECT × 国際交流**

01

02

「私達の学び」は、国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。

**MY PROJECT × 国際交流**

「私達の学び」は、国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。

**「私達の学び」**

「私達の学び」は、国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。

**「私達の学び」**

「私達の学び」は、国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。

初等部訪問

**オンラインディスカッション**

03

04

初等部訪問は、国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。

**オンラインディスカッション**

オンラインディスカッションは、国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。

**「私達の学び」**

「私達の学び」は、国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。国際的な視点から教育の発展を促進することを目的として設立された。

グレタ・トゥーンベリさんを考えることから始まった一連の授業で、1 人の大きな行動よりも多くの人の行動が必要だと感じたグループは、ヴィーガンやエコバッグ、ゼロウエストといった身近な実践の普及にこだわった。当初は SNS で方法や実践例を広めるなどの方法しかとれなかったが、じっくりと時間をかけて計画を立て、2 学期はオリジナルのエコバッグの販売を実現した。単に売るだけでなく、エコバッグを普及させる必要がある層をアンケート等も行ってじっくり考え、染色などオリジナルの要素を取り入れ、費用面も自立できるまで綿密な計画を立てた。最終的に用意したエコバッグは完売し、2 万円を超える利益を得ることができた。もともと利益は寄附する計画であったが、2 年次のオンラインディスカッションで「多くの人の行動」という視点を与えてくれたフィリピンの NGO に寄附することができた。その販売は文化祭で行われ、本来であれば多くの来場者向けにできたところ、コロナ禍のため一般来場者を入れない環境で行われたのが唯一残念な点ではある。それでも、周囲に成果が見えるという点では最も分かりやすく、影響力が大きかった企画である。



このように各グループが一定の成果を実現できたが、何より目先の企画実践に終始し、最初の目的意識を見失うことはなかったのが何よりの成果だったといえる。それは、2 年間をかけて取り組んできた故の成果であると考えられるし、ひいてはそれに先だって 1 年次に本質を批判的に考えることを訓練したベーシックの授業が基礎にあつてのことである。2 年次の 1 年間をかけ、じっくりと「知る」ことに取り組めたからこそ、3 年次の PBL が生きてきた。2 年次の 1 年間を改めて振り返ると、以下のようなプロセスを経た。

- ・「豊かさ」について考えることで、人々の目的は同じでも、実現の方法や考え方は多様であること
- ・グレタ・トゥーンベリさんに関する賛否両論を考えることで、多層的な物事を分解して考えることと気候変動の問題の深さを考える
- ・フィリピンの NGO とのオンラインディスカッションを通じて、気候変動に関する外国の価値観に触れる
- ・企業/スタートアップ企業/NGO について学び、「行動すること」(問題意識にこだわりを持つこと、ターゲットやゴールの意識)について考える
- ・「温暖化」について相互に授業をすることで改めて知る
- ・「温暖化」について知り、そこから個々が感じた問題意識から、自分に出来る対策を考え、練り上げていく

このような過程を経て、改めて PBL に取り組んだことで、PBL が上辺だけのものでなく、熱意を持って取り組めるものとなったと感じている。この 2 年を通じ、生徒が自ら獲得した知識は、単なる講義で得た知識とは違ってしっかり定着すること、「行動」や「実践」をするに当たっては、学校の教員ではなく、実際に行動・実践している人から学ぶこと・感じ取ることが大きいことは強く実感する。自ら獲得した知識という点については、教員が直接講義をするのに比べれば確かに量的には少ないかもしれないが、しっかり定着しているということは知識量と引き換えにできない魅力がある。実際に行動・実践している人と接する点については、国際交流アドバイザーとして、オンラインディスカッションのコーディネートを担当していただいている五十嵐氏自身が、オンラインディスカッションによる教育コンテンツの普及を手がける起業をされている人物であり、その起業に関する経験や想いは生徒にとって大きな影響を与えたことは間違いない。

また、生徒の多くは、この授業の受講生と、そのほかの一般の生徒とで意識が大きく異なることにショックを受けている。同じ学校の生徒でもこれだけの差がある以上、一般社会ではそれはもっと大きなものであるし、そういった意識や温度差という点も重要な要素といえる。以上の点は、今後探究の学びを広げていくにあたり重要なポイントとなろう。

この通信型 PBL 授業は、これまでの蓄積もあり、過去のケースでは、企画の緻密さや外部との調整、ターゲット応じ

た広報戦略やそのために必要な自己分析などが養えるスキルとして想定されていた。今回、WWL においては全般的に生徒が考える過程に重点を置いて取り組んだが、コロナ禍という情勢もあり、特に生徒が「考える」活動が増えた。この2年間の授業を通じて特に感じるのは、生徒の本質を批判的に考える力と、そもそもの目的や目標を意識できる力、目先のことだけでなく全体を見渡せる力である。具体的には、「常にそもそもの温暖化の改善という目的に立ち返る姿勢」に帰結するのではないかと考えている。あらゆる力が、何のためにこれをしているのか、新しい手立てを考えた時も改めてそれが目的に即しているのか、などを常に考えることに収斂されていくように感じた。常に目的を意識できるということは、客観的に自分たちの目的を理解していないとできないことであり、それには正確な知識や分析、しかもそれを自分たちで行うことも必要である。たとえば、エコバッグの販売を企画するグループの中間報告で、別のグループの生徒から、エコバッグの染色や販売が本当にそもそもの温暖化対策になるのかという質問をしたことがあった。それに対して、当該グループの生徒はきちんとプラスチックバッグのコストやエコバッグの耐用を計算した結果や染色にともなう環境負荷のことも準備して対応していたことは、その典型的な事例である。プロジェクトの目的意識を忘れないことは、PBL だからこそその特性といえるだろう。

そして今、改めて2年間のカリキュラム構成を振り返って言えることは、探究の学びにおいて生徒の主体性をどう扱うかという難しさである。やるべきこと、答えのない問題に対して取り組む姿勢を主体性といい、やるべきことが決まっているなかで自ら進んで取り組む自主性とは区別される。探究の本質でいえば、生徒の主体性に任せて進めていくべきなのであろうが、この授業は生徒に一定の成果や手応えを持ってもらうことを意識し、教員側が主導した性格が強かった。ただし、テーマ設定を「温暖化」という捉え方が幅広いものとしたことで、そのなかでは生徒の独自性は担保できたと考えている。高校の3年間という貴重な時間を使うにあたり、一定の成果が出せることを重視して判断したが、純粋な生徒主導の探究の学びとはいえ、そのバランスは今後も様々な試行を重ねていくべきテーマであると考えている。



## 5.改善点

今学期の改善点として挙げるとすれば、評価の項目で先述した、学びの記録へのデジタル様式の導入である。もともとは学びの記録はスキャンして文字認識機能を利用してテキスト化、さらにデータベース化して分析に用いる予定であったが、その用途が立っておらず、この授業だけでデジタル化を導入した。これにより、生徒の負担は確かに軽減されたようで、1学期に低調だった生徒の提出状況も改善された。ただ、紙ベースの自由な作業は、ロイロノートでも及ばない部分が大きかった。手書きであれば、矢印や枠などを用いて、複雑な考察を体系的・視覚的に整理できる。ロイロノートでもそのようなフリーライティングも可能ではあるものの、ほとんどの生徒がキーボードによるテキスト入力で提出しており、テキストではどうしても直線的・羅列的な展開になりがちであった。また、ロイロノートは情報をカードという単位でやり取りするが、小学校でも利用されているツールということで、紙ベースに比べて1枚のカードに記述できるテキストの分量は紙に比べて少なくなる傾向があり、学びの記録もこれまでに比べれば減少傾向にあった。学びの記録は、日々の生徒の知的活動を可視化するうえで重要なツールであり、確かに手書きの方がその効果は大きいように思われ、生徒の負担を考慮した方式を検討していく必要を感じた。

最終年度を迎えた3年間のWWL事業に関わり、生徒の成長にも接してきた。特にこの2年間のグローバルスタディの授業を通して、生徒の成長とは何なのかを考える機会が増えた。そこには、生徒が気にする評価を出すにあたり、テストではない評価の仕組みや基準を考える難しさもあるが、それよりも何を指すのかという問いの方が大きい。今回グローバルスタディの受講生は特に個々の能力が高かったのかもしれないが、その能力はどのような要素に分解できるか分析・精査することが必要であろう。ひいてはそれがコンテンツありきではない、本校が目指す探究の学びの根底にもなり得るだろう。

この1年間の学びの集大成として位置づけた最終成果発表や個人レポートでは、実践の内容や報告よりも、それに関わっての成長に焦点を当てさせた。そのなかで、生徒は様々な言葉を用いて「考える力」や「思考力」、「チームワーク」などについての成長を語っている。それを受け、「考える力」や「思考力」のうち、どんな力が目指すべきものなのか、「チームワーク」とひと言でまとめられるなかに、どんな要素が含まれているのかを吟味する必要があると感じた。たとえば、深く考えることには、知識の獲得や整理、他の知識・経験との結合や深化などが含まれるであろうし、その解釈や細分化は教員によっても異なるはずである。同じく「チームワーク」にも、リーダーシップがあれば、全員がリーダーになる必要もなく、むしろサポートする力やフォローしていく力など、様々な側面があるはずである。実際、この通信型PBL授業では、これまでも海外側との協働だけでなく、本校の生徒側のチームワークにも課題があった。それは単なる分業のやり方というだけでなく、グループ内での意識や熱意がどこまで共有できているか、という視点である。生徒にとって(あるいはおそらく教員にとっても)苦手であろう、チーム内でのしっかりした議論を通して、チームの意識を共通化させていくという過程が不足しがちで、今後も重要であろうという課題意識もある。

そして、そのような要素に細分化することで、今後探究の学びに関わる教員にとって分かりやすい指標が出来る。もちろん、そこにはそれを評価する基準も必要になる。今後、探究の学びを広げていくに際しては、より多くの教員が関わることになる。そうすれば、WWLのようなコンテンツありきの授業では限界があり、個々の教員の特性に合わせたカリキュラム構築が必要になる。そういったことを想定すると、学校として目指すべき探究の最低限の共通認識が必要になり、その目指すべきスキルがあってはじめて、各教員がそれに必要なコンテンツを組んでいけるのではないだろうか。学校として、探究によって身につけさせたい姿勢や力を列挙しておく。そうすれば、個々の教員がそれぞれの得意分野を活かして大きなゴールを設定したとしても、授業ごとに小目標として、その項目のなかから合致するものを選んで設定していけば、その方向性は保たれるであろう。くしくも、この2年間の通信型PBL授業を通して生徒が身につけた、「そもそもの目的を常に意識すること」と一致するように感じた。

## 6.英語科教員として関わっての総括(以下は、今年度授業担当に関わった英語科教員による総括である)

生徒たちが1年、2年次より継続的に取り組んできたWWLCのグローバルスタディコースに、第3学年次より英語科教員として本格的に関与することとなった。英語、学術の要素を中心に生徒たちの活動を補助した。生徒たちは2年次より継続したプロジェクトを中心に行なっていたため、彼らがそれまで暖めてきたアイデアとプランを補強する形で関わることを目指した。

具体的には英語での口頭発表時の準備補助、英語を使った海外生徒とのディスカッション後のフィードバックを英語面での関わりを中心とした。海外生とのディスカッション終了後に「ディスカッションの内容」、「何を学んだか」、「何がわからなかったか」「次のディスカッションでどのようなことを話したいか」等の内容を含んだ振り返りスピーチ動画を提出させた。また、動画形式のみではなく、具体的な英語使用に特化したやりとりもおこなった。「理解できなかった語彙・表現」、「自分が使いたかったが思い付かなかった語彙・表現」、「次のミーティングで使いたい語彙・表現」を記入、提出させ、それぞれに書面でのコメントとフィードバックをおこなった。

学術的な関わりの方針としては、英語を使った論理の構築をプレゼンテーション資料の作成、国際イベントのパンフレットや募集要項作成補助をすることが中心であった。日本語で作成した内容を翻訳ソフトで英訳することが多いため、語彙の選択というレベルではなく、論理の構成で多くの問題を孕むことがあった。そのため、思考の順序、強調する箇所の確認等に関するコメントをプロジェクトの中間発表、資料作成時に伝え、改訂に協力した。ディスカッション時の合意形成へのプロセス、異文化間での自己主張、他者理解のバランスの取り方に関しても生徒たちと共に考えた。欧米のスタンダードを念頭に置きながらも、日本で



彼/彼女らが身につけたことを上手く利用しつつ、対象者となるフィリピンの生徒たちの状況や文化を考慮してミーティングが進められるように生徒を指導した。

これらの介入は常に双方向的に行われた。対象人数が 14 名という少人数であったため、個々に応じた対応をすることができた。その結果、それぞれのアプローチやフィードバックは好意的に受け止められ、効果的に機能したとプログラム終了後の生徒たちからのコメントから判断することができた。生徒たちの英語による意思疎通の技術は回を追うごとに向上していった。

多くの英語に関する、または学術的な介入は予防的ではなく、対処的な指導の側面が大きかったように感じる。そうだった理由は前例のあるプログラムではなかったという点が強いことと、グローバルスタディを受講している生徒たちが様々なタスクを同時進行的におこなっていたため、予定されたカリキュラムの中で、英語や学際的知識に関する介入を行うタイミングを私自身が適切に把握できなかったということが原因である。

今後の探求学習としての課題は、コースのあり方、深め方に関することがある。普通科の高校段階で共存できるプログラムを実施するのか、探究を研究に繋げるのかという根本的な目標設定によって、全てのことが変わってくる。本格的に研究をする前提条件である、先行文献を精査する力、リサーチギャップを見つける力を育成するのであれば 2 年次、もしくは研究計画時の具体性、実現可能性を入念に行わなければならない。高校普通科のカリキュラムに乗った上での時間的余裕、開発的アプローチを組み込まない限り表面的な理解、新しい発見の少ないレポートで終了してしまう危険がある。

## コンピテンシーの成長を定量化することによる WWL 関連科目の教育効果の可視化と検証について

### 1. 調査設計

本検証を行うにあたり、まずは以下の内容で調査設計を行った。

※使用した IGS 社によるテスト Ai-GROW については、以下の URL を参考にされたい。 <https://www.aigrow.jp/>

項目	内容
調査目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>●コンピテンシーの成長を定量化することによる各種教育効果の可視化</li> <li>●「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」の効果検証</li> </ul>
調査対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>●関西学院高等部 2年生 378名（事前・事後で受検データのある生徒）</li> <li>●関西学院高等部 3年生 376名（事前・事後で受検データのある生徒）</li> </ul>
調査期間	<ul style="list-style-type: none"> <li>●2年生           <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前受検：令和2年12月15日（火）～ 令和3年1月15日（金）</li> <li>・事後受検：令和3年12月7日（火）～ 令和4年1月14日（金）</li> </ul> </li> <li>●3年生           <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前受検：令和3年7月19日（月）～ 令和3年8月7日（土）</li> <li>・事後受検：令和4年1月21日（金）～ 令和4年1月29日（土）</li> </ul> </li> </ul>
調査項目	<p>以下の20コンピテンシー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 認知系：課題設定、論理的思考、疑う力、創造性</li> <li>■ 自己系：個人的実行力、自己効力、耐性、決断力</li> <li>■ 他者系：表現力、共感・傾聴力、柔軟性、影響力の行使</li> <li>■ コミュニティ系：地球市民</li> <li>■ その他：主体性（個人的実行力×決断力）、協働性（自己効力×影響力の行使）、リーダーシップ（主体性×協働性）、イノベーション（課題設定×柔軟性）、批判的思考力（疑う力×表現力）、創造的思考力（創造性×共感・傾聴力）、協働的思考力（耐性×共感・傾聴力）</li> </ul>
調査方法	<p>Institution for a Global Society 株式会社が開発した「Ai GROW」を用いた潜在的な気質診断とコンピテンシー評価（360度評価）のスコアを基に調査。 気質診断：iATを用いたBig5（内向性⇔外向性、保守性⇔開放性、繊細性⇔平穏性、独立性⇔協調性、自律性⇔自由性）診断</p>

## 2. 2年生 1年間のコンピテンシーの成長

2年生に関しては、以下の3つに生徒を分類して、それぞれコンピテンシーの変化を比較分析した。

- (1) WWL 2年間：2年間 WWL 関連授業を受講した生徒（1年生時に「グローバル探究 BASIC」受講し、引き続き2年生時に3つの教科横断型・PBL 型科目「AI 活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」のいずれかの科目を受講した生徒）
- (2) WWL 1年間：1年間 WWL 関連授業を受講した生徒（2年生時より、「AI 活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」のいずれかの科目を受講した生徒）
- (3) WWL 不参加：2年間を通じて、いずれの WWL 関連授業にも参加していない生徒

### 【結果のサマリー】

#### (1) 認知系コンピテンシー（課題設定、論理的思考、疑う力、創造性）

WWL を2年間実施した生徒のコンピテンシーは全て大幅に上昇。特に平均値、中央値、最小値がポジティブに変化している。WWL を1年間実施した生徒のコンピテンシーは創造性を除き平均値、中央値に大きな変化は見られないが最大値が向上。特に上位層の成長に貢献したといえる。

#### (2) 自己系コンピテンシー（個人的実行力、自己効力、耐性、決断力）

WWL を2年間実施した生徒のコンピテンシーは全て大幅に上昇。特に平均値、中央値、最小値がポジティブに変化している。WWL を1年間実施した生徒のコンピテンシーは決断力を除き平均値、中央値に大きな変化は見られないが最小値と最大値が向上。最小値が大幅に上昇したことにより、標準偏差もポジティブに変化している。

#### (3) 他者系コンピテンシー（表現力、共感・傾聴力、柔軟性、影響力の行使）

WWL を2年間実施した生徒のコンピテンシーは全て大幅に上昇。特に平均値、中央値、最小値がポジティブに変化している。また、WWL を1年間実施した生徒のコンピテンシーも共感・傾聴力を除き全ての項目でポジティブな変化が認められる。

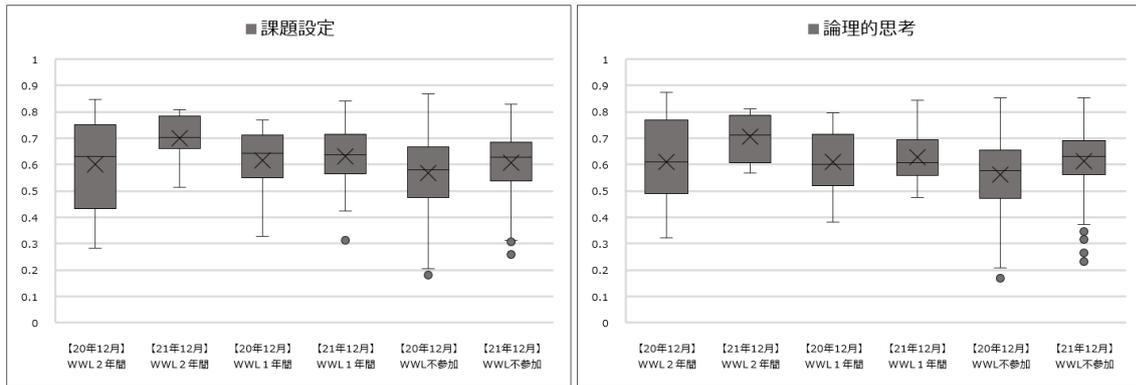
#### (4) コミュニティ系コンピテンシー（地球市民・主体性・協働性・リーダーシップ）

WWL を2年間実施した生徒のコンピテンシーは全て大幅に上昇。特に平均値、中央値、最小値がポジティブに変化している。また、WWL を1年間実施した生徒のコンピテンシーも地球市民を除き全ての項目でポジティブな変化が認められる。

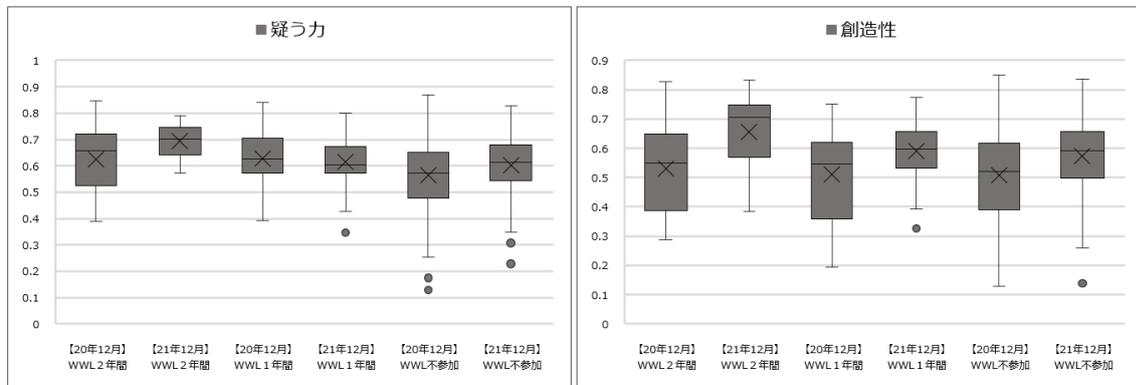
#### (5) その他のコンピテンシー（イノベーション、3つ（批判的・協働的・創造的）の思考力）

WWL を2年間実施した生徒のコンピテンシーは全て大幅に上昇。特に平均値、中央値、最小値がポジティブに変化している。また、WWL を1年間実施した生徒のコンピテンシーも全ての項目でポジティブな変化が認められる。

## 2-1 認知系コンピテンシー

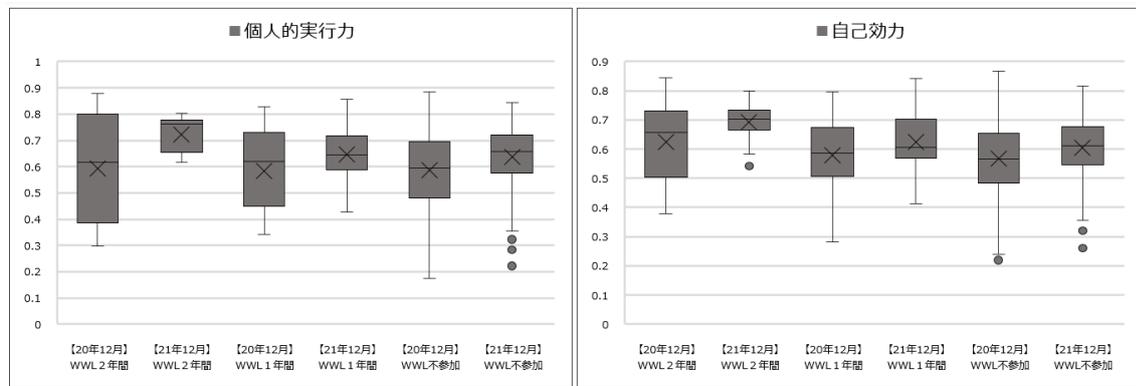


分類	課題設定						論理的思考											
	WWL 2年間		WWL 1年間		WWL不参加		WWL 2年間		WWL 1年間		WWL不参加							
受検時期	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長			
n数	14	14	14	36	36	36	328	328	328	14	14	14	36	36	36	328	328	328
平均値	0.602	0.700	0.098	0.617	0.630	0.013	0.567	0.608	0.041	0.610	0.705	0.095	0.609	0.629	0.020	0.593	0.613	0.020
標準偏差	0.169	0.081	-0.088	0.104	0.111	0.007	0.134	0.114	-0.020	0.169	0.085	-0.084	0.116	0.083	0.121	0.110	0.110	-0.012
最小値	0.284	0.513	0.229	0.327	0.314	-0.013	0.181	0.258	0.076	0.321	0.567	0.246	0.381	0.476	0.095	0.207	0.232	0.025
中央値	0.632	0.702	0.070	0.643	0.636	-0.006	0.580	0.627	0.048	0.610	0.712	0.102	0.600	0.607	0.007	0.610	0.631	0.022
最大値	0.845	0.809	-0.036	0.769	0.840	0.071	0.869	0.830	-0.038	0.874	0.812	-0.062	0.795	0.844	0.049	0.844	0.851	0.007

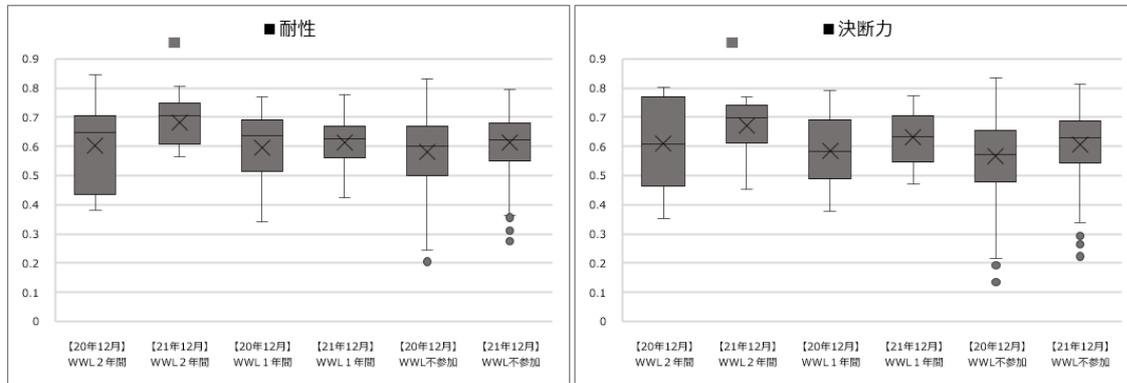


分類	疑う力						創造性											
	WWL 2年間		WWL 1年間		WWL不参加		WWL 2年間		WWL 1年間		WWL不参加							
受検時期	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長			
n数	14	14	14	36	36	36	328	328	328	14	14	14	36	36	36	328	328	328
平均値	0.625	0.693	0.068	0.626	0.614	-0.012	0.564	0.601	0.037	0.529	0.657	0.127	0.510	0.589	0.080	0.507	0.572	0.066
標準偏差	0.132	0.065	-0.067	0.116	0.090	-0.026	0.122	0.106	-0.015	0.162	0.131	-0.031	0.147	0.099	-0.048	0.150	0.123	-0.027
最小値	0.389	0.571	0.182	0.393	0.346	-0.047	0.129	0.201	0.071	0.288	0.383	0.095	0.195	0.327	0.131	0.129	0.138	0.010
中央値	0.656	0.700	0.044	0.627	0.603	-0.025	0.574	0.615	0.041	0.550	0.706	0.156	0.545	0.598	0.053	0.521	0.592	0.072
最大値	0.845	0.790	-0.056	0.839	0.799	-0.041	0.869	0.829	-0.040	0.827	0.832	0.005	0.750	0.772	0.022	0.849	0.835	-0.014

## 2-2 自己系コンピテンシー

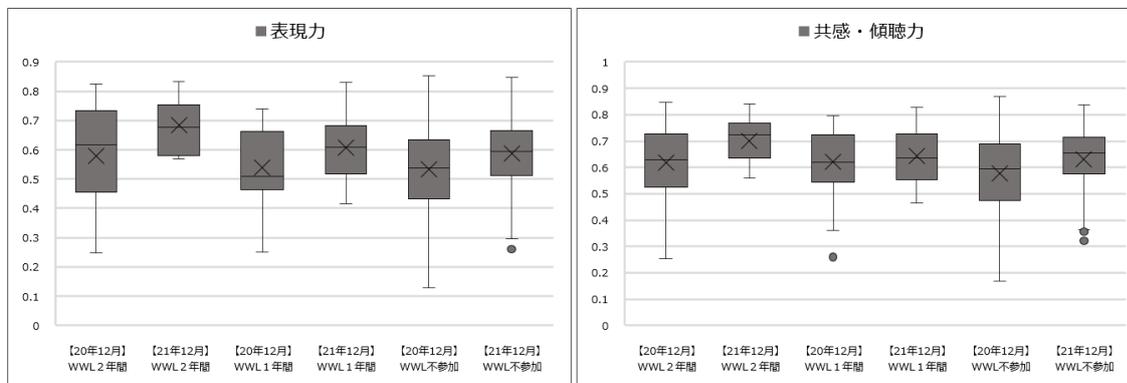


分類	個人的実行力						自己効力											
	WWL 2年間		WWL 1年間		WWL不参加		WWL 2年間		WWL 1年間		WWL不参加							
受検時期	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長						
n数	14	14	14	36	36	36	328	328	328	14	14	14	36	36	36	328	328	328
平均値	0.593	0.723	0.130	0.584	0.646	0.062	0.587	0.636	0.049	0.624	0.694	0.070	0.579	0.623	0.044	0.567	0.604	0.038
標準偏差	0.200	0.066	-0.134	0.148	0.104	-0.044	0.146	0.122	-0.024	0.136	0.069	-0.068	0.127	0.094	-0.033	0.125	0.099	-0.026
最小値	0.297	0.618	0.320	0.340	0.426	0.085	0.176	0.222	0.047	0.378	0.542	0.164	0.283	0.412	0.129	0.220	0.261	0.041
中央値	0.618	0.762	0.144	0.619	0.643	0.025	0.595	0.656	0.061	0.657	0.703	0.046	0.586	0.607	0.021	0.565	0.611	0.046
最大値	0.879	0.802	-0.077	0.829	0.855	0.026	0.886	0.842	-0.043	0.845	0.800	-0.045	0.797	0.841	0.043	0.866	0.815	-0.051

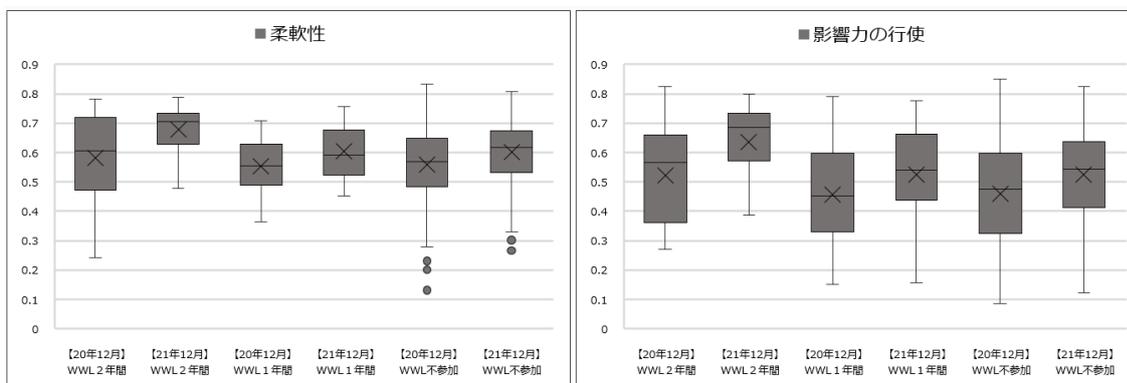


分類	耐性									決断力								
	WWL 2年間			WWL 1年間			WWL不参加			WWL 2年間			WWL 1年間			WWL不参加		
受検時期	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長
n数	14	14	14	36	36	36	328	328	328	14	14	14	36	36	36	328	328	328
平均値	0.603	0.681	0.078	0.595	0.612	0.017	0.582	0.612	0.030	0.610	0.671	0.061	0.585	0.630	0.044	0.565	0.607	0.042
標準偏差	0.139	0.075	-0.064	0.115	0.077	-0.038	0.122	0.096	-0.026	0.162	0.087	-0.075	0.115	0.084	-0.031	0.131	0.112	-0.019
最小値	0.380	0.565	0.185	0.343	0.424	0.081	0.204	0.352	0.103	0.352	0.454	0.103	0.377	0.472	0.095	0.135	0.223	0.087
中央値	0.646	0.705	0.059	0.638	0.627	-0.011	0.600	0.623	0.024	0.610	0.698	0.089	0.584	0.634	0.051	0.572	0.628	0.056
最大値	0.845	0.806	-0.039	0.770	0.778	0.008	0.833	0.795	-0.038	0.803	0.771	-0.032	0.792	0.772	-0.020	0.835	0.812	-0.023

### 2-3 他者系コンピテンシー

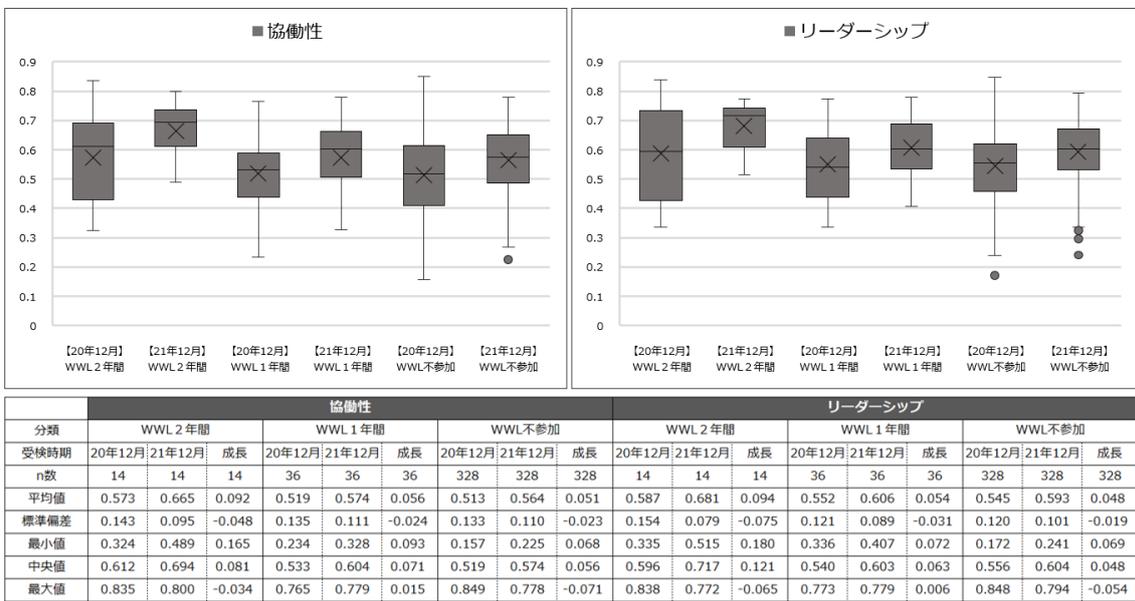
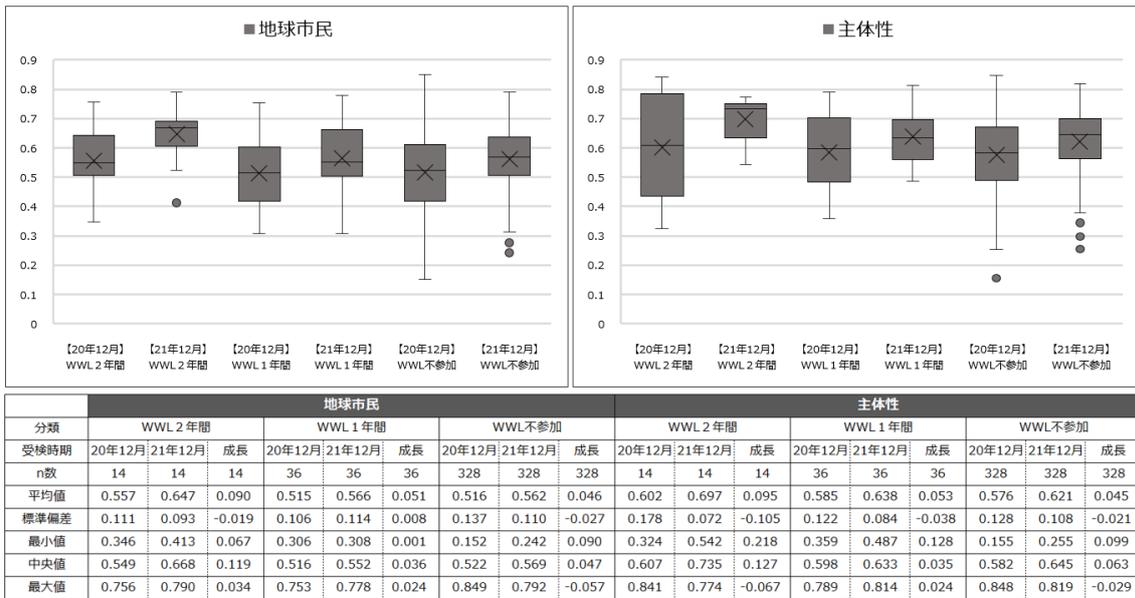


分類	表現力									共感・傾聴力								
	WWL 2年間			WWL 1年間			WWL不参加			WWL 2年間			WWL 1年間			WWL不参加		
受検時期	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長
n数	14	14	14	36	36	36	328	328	328	14	14	14	36	36	36	328	328	328
平均値	0.579	0.684	0.105	0.540	0.607	0.067	0.533	0.586	0.053	0.617	0.699	0.083	0.621	0.643	0.022	0.577	0.631	0.055
標準偏差	0.178	0.090	-0.087	0.110	0.102	-0.007	0.143	0.112	-0.032	0.148	0.083	-0.065	0.125	0.101	-0.024	0.146	0.116	-0.030
最小値	0.247	0.568	0.320	0.252	0.415	0.163	0.129	0.261	0.131	0.255	0.559	0.304	0.259	0.464	0.205	0.168	0.248	0.080
中央値	0.616	0.676	0.060	0.509	0.609	0.100	0.538	0.594	0.056	0.628	0.722	0.094	0.621	0.636	0.015	0.593	0.653	0.060
最大値	0.824	0.832	0.009	0.739	0.831	0.093	0.854	0.847	-0.007	0.845	0.839	-0.006	0.797	0.827	0.030	0.869	0.837	-0.032

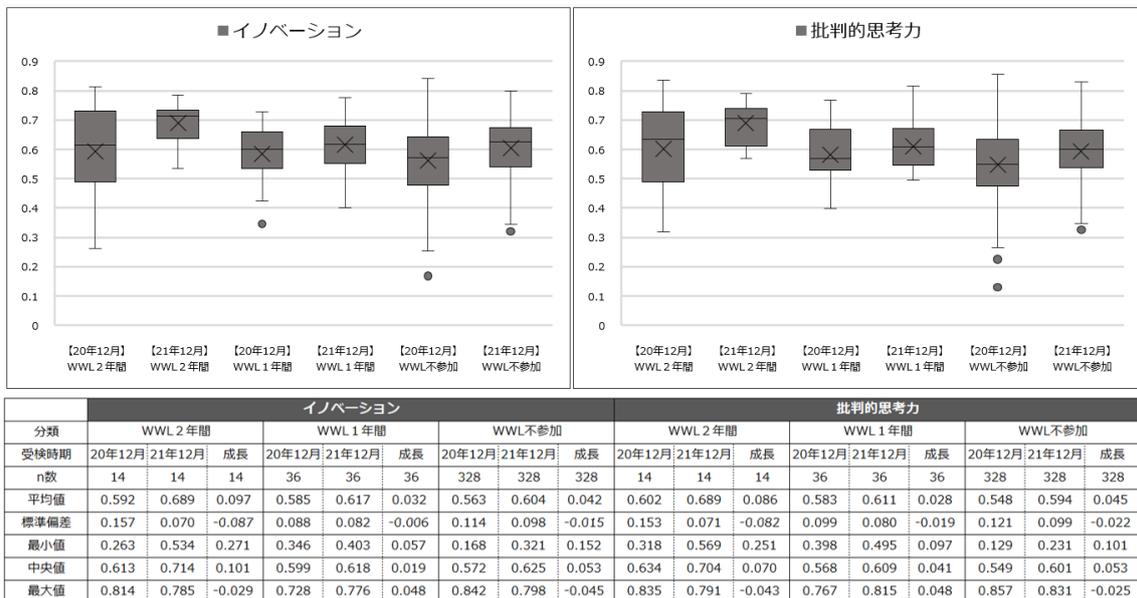


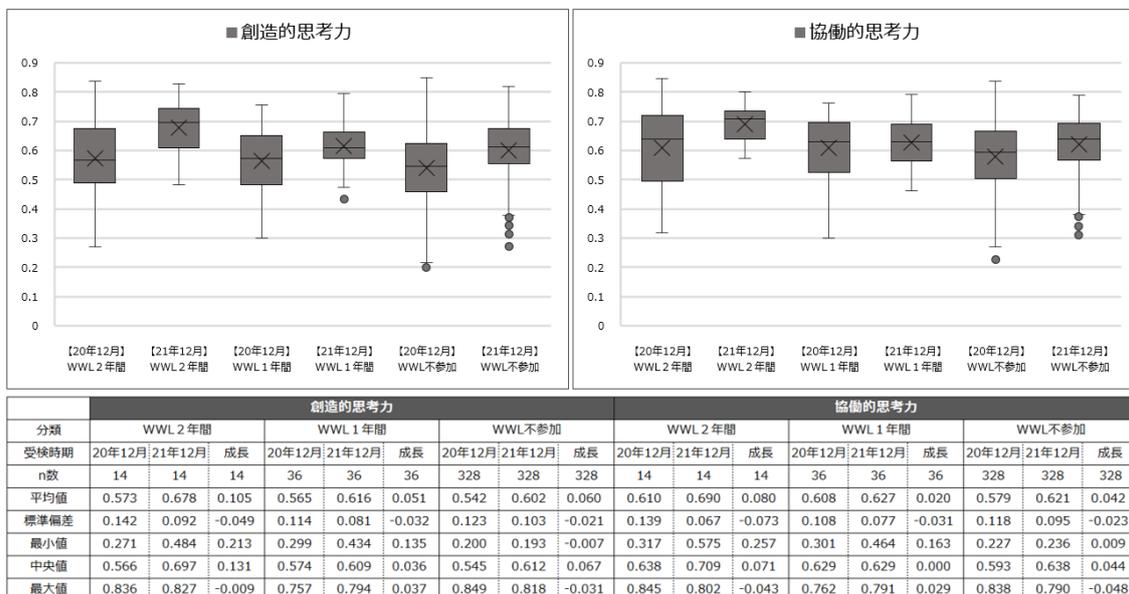
分類	柔軟性									影響力の行使								
	WWL 2年間			WWL 1年間			WWL不参加			WWL 2年間			WWL 1年間			WWL不参加		
受検時期	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長	20年12月	21年12月	成長
n数	14	14	14	36	36	36	328	328	328	14	14	14	36	36	36	328	328	328
平均値	0.582	0.678	0.096	0.553	0.604	0.051	0.558	0.600	0.042	0.523	0.637	0.114	0.458	0.526	0.068	0.460	0.524	0.064
標準偏差	0.155	0.079	-0.076	0.093	0.086	-0.007	0.121	0.105	-0.016	0.160	0.128	-0.032	0.172	0.157	-0.015	0.173	0.150	-0.023
最小値	0.241	0.477	0.236	0.365	0.452	0.087	0.132	0.267	0.135	0.270	0.388	0.118	0.152	0.156	0.004	0.086	0.122	0.036
中央値	0.606	0.706	0.099	0.555	0.592	0.037	0.569	0.617	0.048	0.566	0.685	0.119	0.452	0.540	0.088	0.476	0.543	0.067
最大値	0.783	0.788	0.005	0.707	0.755	0.048	0.834	0.809	-0.026	0.824	0.800	-0.023	0.792	0.777	-0.015	0.849	0.825	-0.024

2-4 コミュニティ系・その他のコンピテンシー



2-5 その他のコンピテンシー





### 3. 2年生 WWL 1年間のコンピテンシー成長まとめ (t 検定)

直近1年間の本事業の効果を明らかにするため、昨年度から2年間WWLに取り組んでいる生徒を抽出し、2020年12月と2021年12月の「Ai GROW」受検結果(平均値)を基にt検定を実施した。

●耐性、決断力、共感・傾聴力を除くコンピテンシーの成長に有意性が認められた。

分野	コンピテンシー	2020年12月	2021年12月	差	有意確率(両側)
認知系	課題設定	0.60	0.70	0.10	0.03
	論理的思考	0.61	0.70	0.09	0.02
	疑う力	0.63	0.69	0.07	0.04
	創造性	0.53	0.66	0.13	0.01
自己系	個人的実行力	0.59	0.72	0.13	0.01
	自己効力	0.62	0.69	0.07	0.02
	耐性	0.60	0.68	0.08	0.08
	決断力	0.61	0.67	0.06	0.11
他者系	表現力	0.58	0.68	0.10	0.03
	共感・傾聴力	0.62	0.70	0.08	0.06
	柔軟性	0.58	0.68	0.10	0.02
	影響力の行使	0.52	0.64	0.11	0.00
コミュニティ系	地球市民	0.56	0.65	0.09	0.02
その他	主体性	0.60	0.70	0.10	0.03
	協働性	0.57	0.67	0.09	0.00
	リーダーシップ	0.59	0.68	0.09	0.01
	イノベーション	0.59	0.69	0.10	0.01
	批判的思考力	0.60	0.69	0.09	0.03
	創造的思考力	0.57	0.68	0.10	0.00
	協働的思考力	0.61	0.69	0.08	0.05

#### 4. 3年生 今年度のコンピテンシーの成長

3年生に関しては、以下の3つに生徒を分類して、それぞれコンピテンシーの変化を比較分析した。

- (1) WWL 3年間：3年間 WWL 関連授業を受講した生徒（1年生時に「グローバル探究 BASIC」受講し、引き続き2・3年生時に3つの教科横断型・PBL 型科目「AI 活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」のいずれかの科目を受講した生徒）
- (2) WWL 2年間：2年間 WWL 関連授業を受講した生徒（2年生時より、「AI 活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」のいずれかを受講し、3年生時もそれぞれの科目を継続して受講した生徒）
- (3) WWL 不参加：3年間を通じて、いずれの WWL 関連授業にも参加していない生徒

##### 【結果のサマリー】

#### (1) 認知系コンピテンシー（課題設定、論理的思考、疑う力、創造性）

WWL を3年間実施した生徒のコンピテンシーは、事業3年目となる今年度もさらに上昇。事業3年目で2年生ほどの成長は認められないが、全てのコンピテンシーで中央値がポジティブに変化した。WWL 2年目の生徒は課題設定のスコアを落としたものの、他のコンピテンシーについては中央値や最大値にポジティブな変化が認められる。

#### (2) 自己系コンピテンシー（個人的実行力、自己効力、耐性、決断力）

WWL を3年間実施した生徒は事業3年目でも決断力を大きく成長させた。また、耐性、自己効力については外れ値として出た一部の生徒を除き、下位層が大幅に減少。WWL 2年目の生徒にポジティブな変化は認められないものの、自己効力の最大値が大幅に上昇した。

#### (3) 他者系コンピテンシー（表現力、共感・傾聴力、柔軟性、影響力の行使）

WWL を3年間実施した生徒のコンピテンシーは、表現力を除き中央値が上昇。中でも柔軟性の中央値の変化が顕著である。WWL 2年目の生徒にポジティブな変化は認められないものの、表現力と影響力の行使の最小値が大幅に向上。結果、標準偏差もポジティブに変化するなど、下位層の底上げに貢献したといえる。

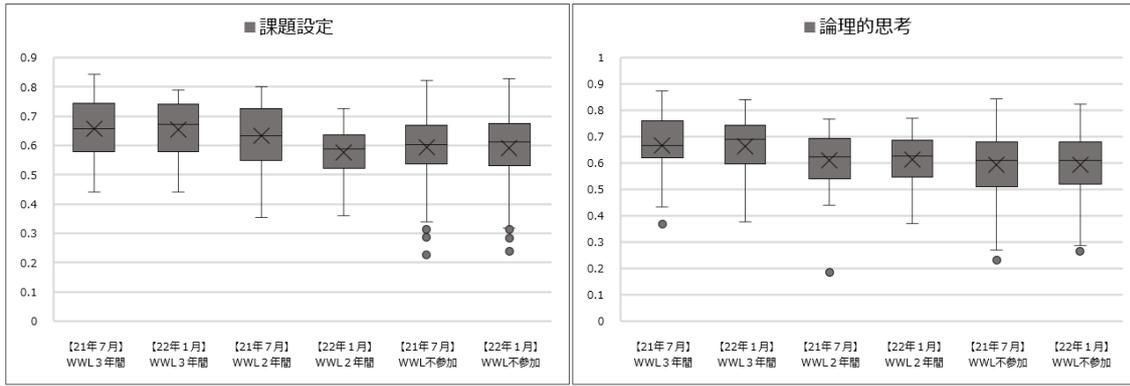
#### (4) コミュニティ系コンピテンシー（地球市民・主体性・協働性・リーダーシップ）

WWL を3年間実施した生徒のコンピテンシーは中央値が全て上昇。中でも柔軟性の中央値の変化が顕著である。WWL 2年目の生徒は協働性に成長が認められ、標準偏差については全てのコンピテンシーでポジティブに変化した。

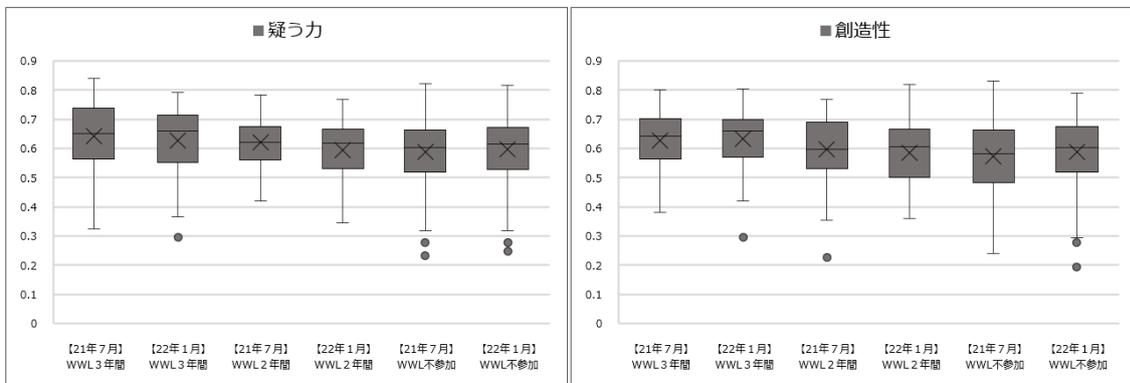
#### (5) その他のコンピテンシー（イノベーション、3つ（批判的・協働的・創造的）の思考力）

WWL を3年間実施した生徒のコンピテンシーは中央値が全て上昇。中でも協働的思考力の中央値の変化が顕著である。WWL 2年目の生徒は創造的思考力以外、標準偏差にポジティブな変化が認められ、協働的思考力については最小値が向上した。

#### 4-1 認知系コンピテンシー

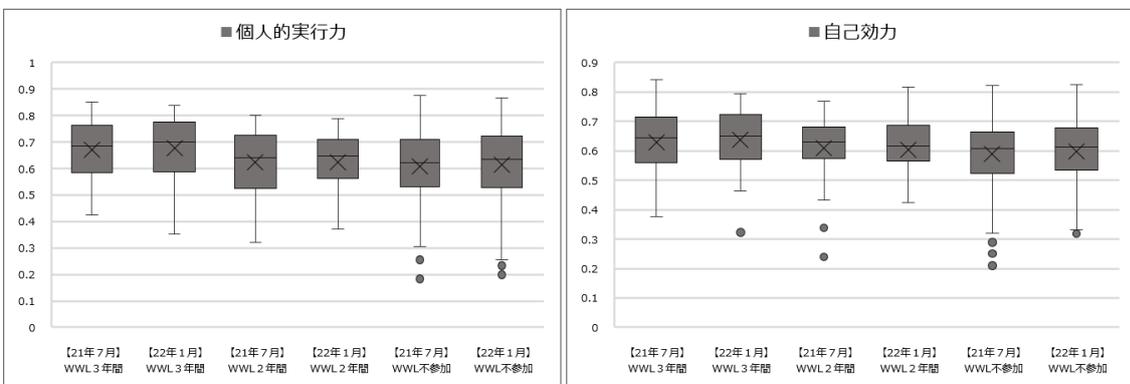


分類	課題設定									論理的思考								
	WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加			WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加		
受検時期	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長
n数	34	34	34	33	33	33	309	309	309	34	34	34	33	33	33	309	309	309
平均値	0.656	0.656	0.000	0.634	0.575	-0.059	0.595	0.593	-0.002	0.667	0.662	-0.005	0.643	0.615	-0.028	0.593	0.594	0.001
標準偏差	0.101	0.102	0.001	0.106	0.090	-0.016	0.111	0.116	0.004	0.104	0.117	0.013	0.105	0.095	-0.010	0.121	0.121	-0.001
最小値	0.440	0.442	0.002	0.354	0.359	0.005	0.227	0.239	0.011	0.368	0.357	-0.011	0.376	0.370	-0.006	0.207	0.225	0.018
中央値	0.658	0.671	0.013	0.634	0.590	-0.044	0.604	0.613	0.009	0.668	0.689	0.021	0.658	0.628	-0.030	0.610	0.610	0.001
最大値	0.843	0.790	-0.053	0.801	0.726	-0.075	0.821	0.829	0.008	0.872	0.842	-0.031	0.809	0.771	-0.038	0.844	0.824	-0.020

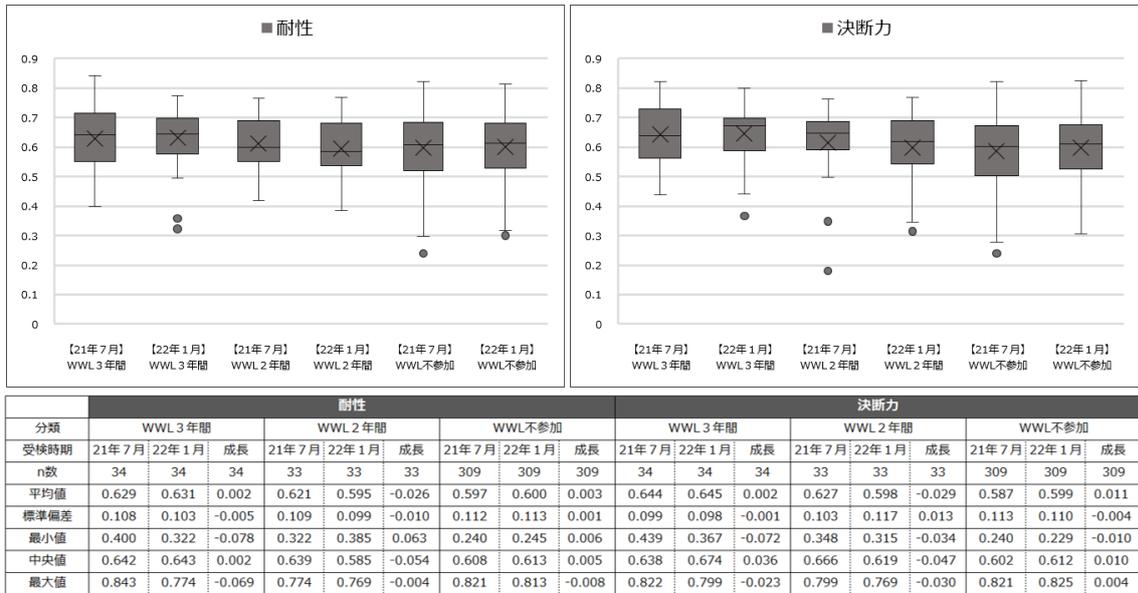


分類	疑う力									創造性								
	WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加			WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加		
受検時期	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長
n数	34	34	34	33	33	33	309	309	309	34	34	34	33	33	33	309	309	309
平均値	0.642	0.628	-0.014	0.610	0.596	-0.015	0.589	0.596	0.007	0.628	0.632	0.004	0.623	0.586	-0.037	0.575	0.588	0.013
標準偏差	0.120	0.120	0.000	0.109	0.095	-0.014	0.108	0.113	0.006	0.107	0.112	0.005	0.104	0.111	0.007	0.125	0.118	-0.006
最小値	0.325	0.296	-0.030	0.367	0.345	-0.022	0.234	0.249	0.014	0.382	0.296	-0.087	0.382	0.361	-0.022	0.240	0.193	-0.047
中央値	0.650	0.660	0.010	0.610	0.618	0.009	0.604	0.616	0.012	0.643	0.661	0.019	0.631	0.605	-0.026	0.584	0.603	0.019
最大値	0.840	0.793	-0.046	0.788	0.769	-0.019	0.821	0.815	-0.006	0.801	0.805	0.004	0.805	0.819	0.014	0.830	0.789	-0.041

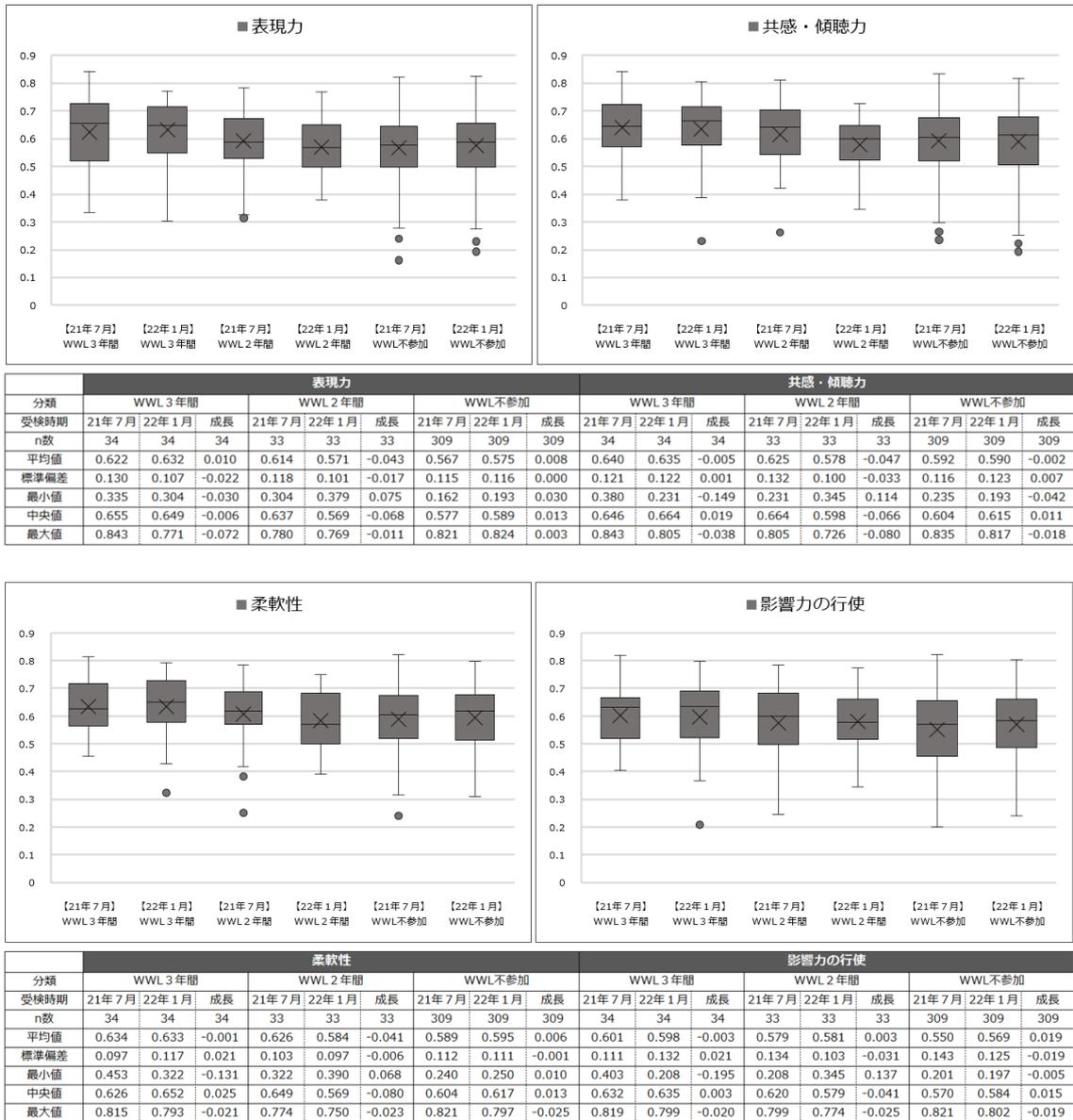
#### 4-2 自己系コンピテンシー



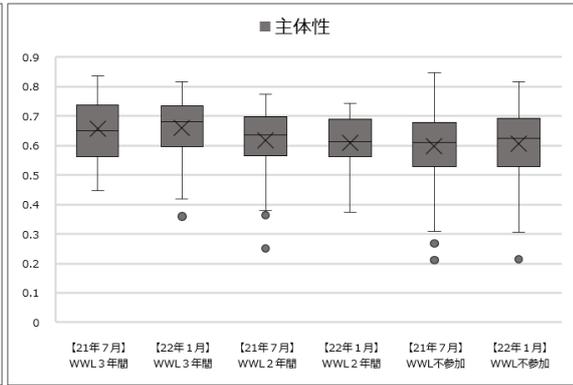
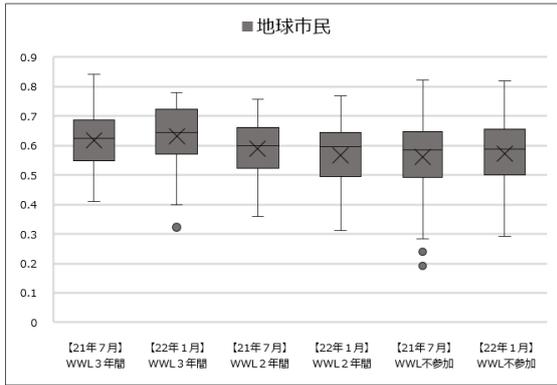
分類	個人的実行力									自己効力								
	WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加			WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加		
受検時期	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長
n数	34	34	34	33	33	33	309	309	309	34	34	34	33	33	33	309	309	309
平均値	0.670	0.676	0.006	0.656	0.623	-0.033	0.609	0.614	0.005	0.630	0.637	0.007	0.622	0.605	-0.017	0.591	0.598	0.007
標準偏差	0.113	0.127	0.014	0.125	0.105	-0.020	0.131	0.135	0.005	0.109	0.103	-0.005	0.096	0.106	0.010	0.112	0.111	-0.001
最小値	0.426	0.351	-0.074	0.351	0.370	0.019	0.183	0.198	0.016	0.378	0.322	-0.055	0.322	0.336	0.014	0.210	0.280	0.069
中央値	0.684	0.700	0.017	0.672	0.646	-0.026	0.623	0.636	0.013	0.643	0.650	0.006	0.638	0.616	-0.022	0.607	0.614	0.007
最大値	0.851	0.840	-0.011	0.828	0.789	-0.039	0.875	0.867	-0.007	0.843	0.793	-0.050	0.767	0.816	0.049	0.821	0.826	0.005



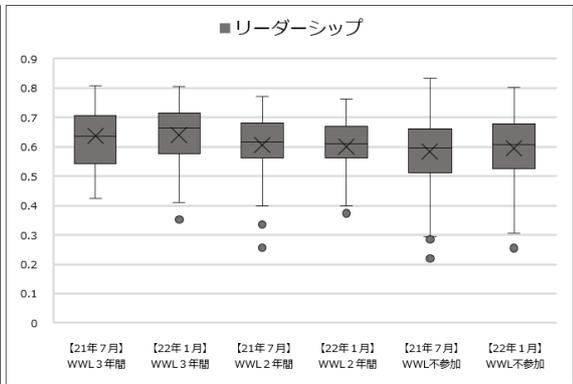
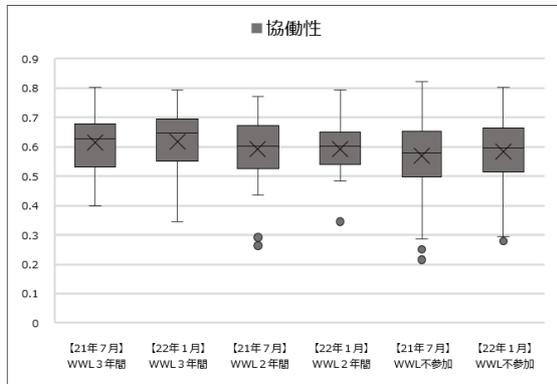
### 4-3 他者系コンピテンシー



#### 4-4 コミュニティ系・その他のコンピテンシー

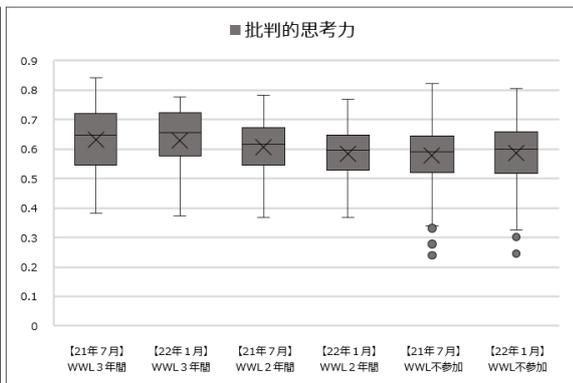
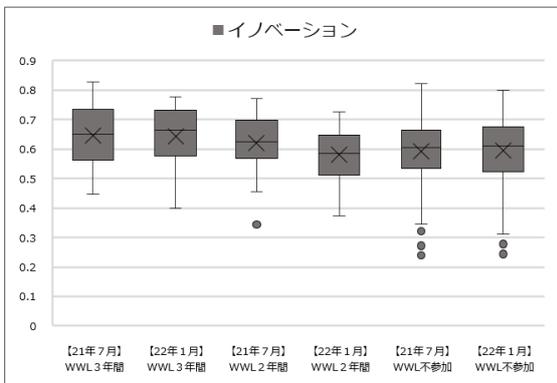


分類	地球市民									主体性								
	WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加			WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加		
受検時期	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長
n数	34	34	34	33	33	33	309	309	309	34	34	34	33	33	33	309	309	309
平均値	0.619	0.633	0.014	0.605	0.568	-0.038	0.562	0.573	0.011	0.657	0.661	0.004	0.641	0.611	-0.031	0.598	0.607	0.008
標準偏差	0.093	0.107	0.013	0.109	0.108	-0.001	0.117	0.118	0.001	0.099	0.109	0.009	0.110	0.097	-0.013	0.114	0.116	0.001
最小値	0.411	0.322	-0.089	0.322	0.312	-0.010	0.192	0.242	0.050	0.448	0.359	-0.088	0.359	0.375	0.015	0.211	0.214	0.003
中央値	0.625	0.646	0.021	0.618	0.597	-0.022	0.584	0.587	0.003	0.650	0.681	0.031	0.664	0.614	-0.051	0.610	0.624	0.014
最大値	0.843	0.780	-0.063	0.780	0.769	-0.011	0.821	0.819	-0.003	0.836	0.816	-0.020	0.813	0.745	-0.068	0.848	0.817	-0.031

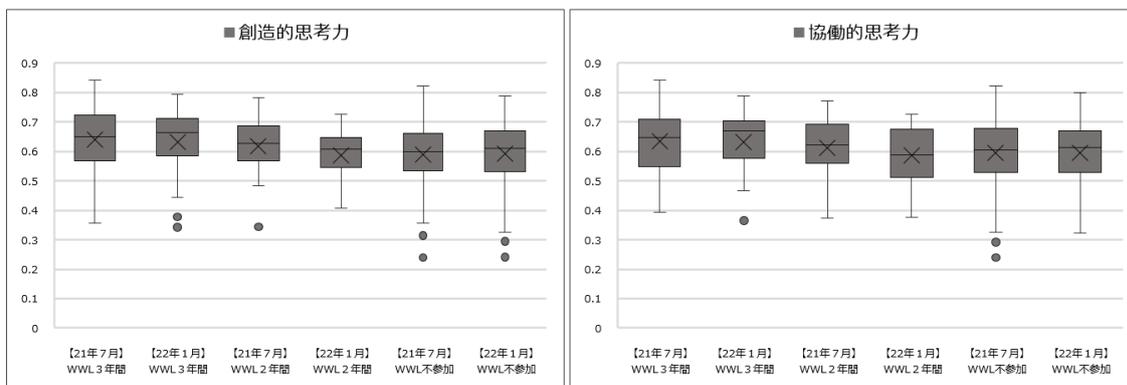


分類	協働性									リーダーシップ								
	WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加			WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加		
受検時期	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長
n数	34	34	34	33	33	33	309	309	309	34	34	34	33	33	33	309	309	309
平均値	0.616	0.617	0.002	0.600	0.593	-0.007	0.570	0.583	0.013	0.636	0.639	0.003	0.621	0.602	-0.019	0.584	0.595	0.011
標準偏差	0.102	0.109	0.007	0.104	0.095	-0.009	0.116	0.106	-0.009	0.096	0.106	0.010	0.102	0.091	-0.011	0.108	0.106	-0.002
最小値	0.399	0.345	-0.054	0.345	0.346	0.001	0.215	0.279	0.064	0.423	0.352	-0.071	0.352	0.373	0.021	0.220	0.256	0.035
中央値	0.629	0.648	0.019	0.632	0.602	-0.029	0.579	0.596	0.017	0.637	0.665	0.028	0.634	0.610	-0.024	0.598	0.609	0.011
最大値	0.802	0.793	-0.009	0.770	0.793	0.022	0.821	0.803	-0.019	0.809	0.805	-0.004	0.792	0.764	-0.027	0.835	0.803	-0.032

#### 4-5 その他のコンピテンシー



分類	イノベーション									批判的思考力								
	WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加			WWL 3年間			WWL 2年間			WWL不参加		
受検時期	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長
n数	34	34	34	33	33	33	309	309	309	34	34	34	33	33	33	309	309	309
平均値	0.645	0.644	-0.001	0.630	0.580	-0.050	0.592	0.594	0.002	0.632	0.630	-0.002	0.612	0.583	-0.029	0.578	0.586	0.008
標準偏差	0.095	0.104	0.009	0.095	0.086	-0.008	0.102	0.105	0.003	0.115	0.108	-0.007	0.108	0.091	-0.017	0.102	0.104	0.002
最小値	0.448	0.400	-0.048	0.400	0.375	-0.025	0.240	0.244	0.005	0.383	0.374	-0.009	0.374	0.367	-0.007	0.240	0.245	0.005
中央値	0.651	0.663	0.013	0.647	0.585	-0.062	0.604	0.612	0.008	0.646	0.657	0.011	0.617	0.596	-0.022	0.592	0.601	0.009
最大値	0.829	0.778	-0.051	0.771	0.726	-0.045	0.821	0.801	-0.021	0.841	0.776	-0.065	0.772	0.769	-0.002	0.821	0.804	-0.017



分類	創造的思考力									協働的思考力								
	WWL 3年層			WWL 2年層			WWL不参加			WWL 3年層			WWL 2年層			WWL不参加		
受検時期	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長	21年7月	22年1月	成長
n数	34	34	34	33	33	33	309	309	309	34	34	34	33	33	33	309	309	309
平均値	0.641	0.632	-0.009	0.618	0.587	-0.031	0.590	0.593	0.002	0.635	0.633	-0.002	0.623	0.587	-0.037	0.594	0.595	0.000
標準偏差	0.111	0.114	0.003	0.111	0.091	-0.021	0.102	0.110	0.007	0.107	0.104	-0.003	0.113	0.088	-0.024	0.106	0.109	0.003
最小値	0.356	0.342	-0.014	0.370	0.345	-0.025	0.240	0.241	0.002	0.393	0.365	-0.028	0.340	0.376	0.036	0.240	0.289	0.049
中央値	0.650	0.665	0.015	0.616	0.608	-0.008	0.600	0.612	0.012	0.647	0.670	0.023	0.657	0.589	-0.068	0.604	0.613	0.009
最大値	0.841	0.793	-0.048	0.762	0.726	-0.036	0.821	0.789	-0.032	0.843	0.790	-0.053	0.790	0.726	-0.064	0.821	0.800	-0.021

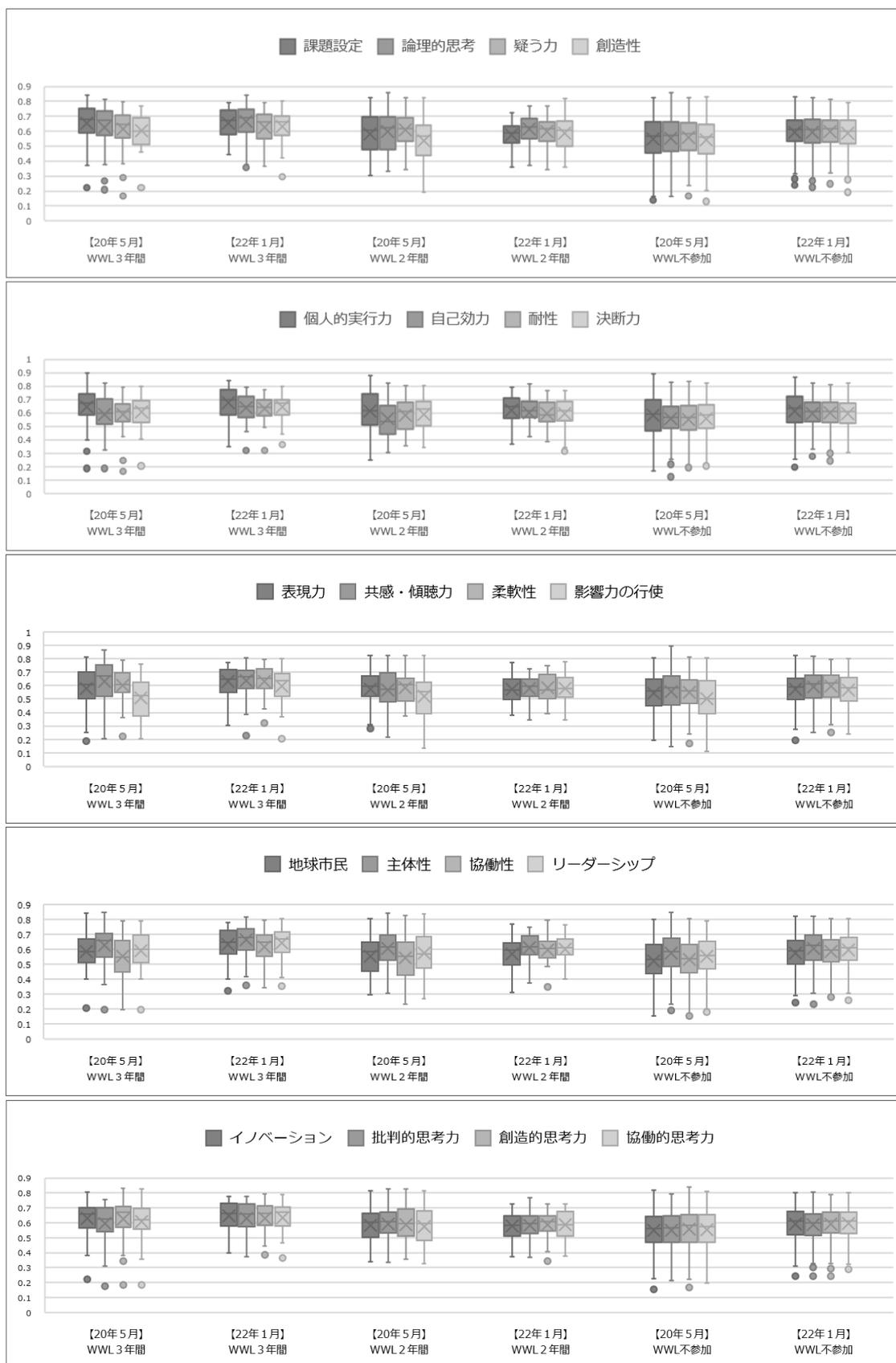
### 5. 3年生 WWL 今年度のコンピテンシー成長まとめ (t 検定)

今年度の本事業の効果を明らかにするため、2019年度から3年間 WWL に取り組んでいる生徒を抽出し、2021年7月と2022年1月の「Ai GROW」受検結果（平均値）を基に t 検定を実施した。

●WWL 事業3年目ですすでに多くのコンピテンシーが成長した段階ではあるが、今年度も課題設定の成長に有意性が認められた。

分野	コンピテンシー	2021年7月	2022年1月	差	有意確率（両側）
認知系	課題設定	0.66	0.66	0.00	0.03
	論理的思考	0.67	0.66	0.00	0.81
	疑う力	0.64	0.63	-0.01	0.27
	創造性	0.63	0.63	0.00	0.65
自己系	個人的実行力	0.67	0.68	0.01	0.98
	自己効力	0.63	0.64	0.01	0.85
	耐性	0.63	0.63	0.00	0.49
	決断力	0.64	0.65	0.00	0.57
他者系	表現力	0.62	0.63	0.01	0.39
	共感・傾聴力	0.64	0.64	-0.01	0.16
	柔軟性	0.63	0.63	0.00	0.37
	影響力の行使	0.60	0.60	0.00	0.86
コミュニティ系	地球市民	0.62	0.63	0.01	0.42
その他	主体性	0.66	0.66	0.00	0.76
	協働性	0.62	0.62	0.00	0.99
	リーダーシップ	0.64	0.64	0.00	0.88
	イノベーション	0.65	0.64	0.00	0.07
	批判的思考力	0.63	0.63	0.00	0.30
	創造的思考力	0.64	0.63	-0.01	0.17
	協働的思考力	0.63	0.63	0.00	0.22

## 6. 3年生 WWL 2年間のコンピテンシー成長まとめ (箱ひげ図)



## 7. 3年生 WWL 2年間のコンピテンシー成長まとめ (t 検定)

「Ai GROW」でコンピテンシーの成長データを取得し始めてから3年間の本事業の効果を明らかにするため、2019年度から3年間 WWL に取り組んでいる生徒を抽出し、2020年5月と2022年1月の「Ai GROW」受検結果(平均値)を基に t 検定を実施した。

●計測した20コンピテンシー全て成長。その上で、特に影響力の行使、協働性、リーダーシップの成長に有意性が認められた。

分野	コンピテンシー	2020年5月	2022年1月	差	有意確率(両側)
認知系	課題設定	0.65	0.66	0.00	0.94
	論理的思考	0.63	0.66	0.04	0.23
	疑う力	0.61	0.63	0.01	0.62
	創造性	0.60	0.63	0.03	0.24
自己系	個人的実行力	0.65	0.68	0.03	0.31
	自己効力	0.59	0.64	0.05	0.13
	耐性	0.59	0.63	0.04	0.14
	決断力	0.61	0.65	0.04	0.15
他者系	表現力	0.58	0.63	0.05	0.11
	共感・傾聴力	0.63	0.64	0.00	0.96
	柔軟性	0.60	0.63	0.03	0.27
	影響力の行使	0.51	0.60	0.09	0.01
コミュニティ系	地球市民	0.58	0.63	0.05	0.08
その他	主体性	0.63	0.66	0.03	0.20
	協働性	0.55	0.62	0.07	0.02
	リーダーシップ	0.59	0.64	0.05	0.05
	イノベーション	0.63	0.64	0.02	0.52
	批判的思考力	0.60	0.63	0.03	0.24
	創造的思考力	0.62	0.63	0.01	0.79
	協働的思考力	0.61	0.63	0.02	0.42

## 7. Ai GROWによる検証の総括と今後の課題と展望について

最後に、これまでの結果を踏まえての総括と来年度以降の展望について記載したい。

### (1) 各コンピテンシーの成長と有意性について

3年間を通して WWL 関連授業を受講した生徒について、計測した20のコンピテンシー全てにおいて成長が見られ、特に「影響力の行使」「協働性」「リーダーシップ」に顕著な有意性が見られたことは、PBL 型の授業を実施し、外部との連携を幹として実施してきた本事業においては、当初設定した「目標とする資質・能力」が順調に育成されてきた結果と考えられる。

また、本報告書では詳細の記載を割愛したが、特に連携校等と協働により実施した「生徒交流会」や「国際会議」においてコアな運営を担った生徒について、各コンピテンシーの顕著な上昇が見られた。これらの結果については、「学びの記録」等に代表される、各プログラム担当教員が実施してきた「定性的評価」の結果とも合致しており、「教員の肌感覚」や「行事による成長」がデータによって証明されたことにつながると考えている。

### (2) 今後の課題と展望について

(1)の結果に対して、対象生徒の「課題設定」「共感・傾聴力」「創造的思考力」にそれ程大きな有意性が見られなかったことは、今後のプログラムを考える上で、大きな示唆となった。すなわち、今回の分析の軸となった生徒達が受講した WWL 関連新規開講科目は、「AI 活用」「平和・人権」「国際協力」といったテーマ設定が予めなされており、また、どうしてもグループによる活動が多くを占めてしまったことにより、個人の「課題設定」や「創造的思考力」を奪う結果となったのではないだろうか、また、指導する我々教員は一貫して「協働」を唱えつつも同時に「自分の意見を主張すること」を強く求めた結果、生徒達の中で、「リーダーシップ」と「共感・傾聴力」の間にきちんとリンクがなされていないのではないだろうか。

本校としては、これらの課題を解決する1つの方向は、「総合的な探究の時間」を用いた本校の独自科目「読書科」と WWL 関連授業の連携であると考えている。読書科では、全生徒が一人一人自分自身のテーマを設定し3年間をかけて卒業論文を作成する。その過程はこれまで文献調査が主となっていたが、これと WWL 新規開講科目のフィールドワークや外部との連携による調査・分析が有機的に結びつくことで「課題設定」の向上が、また、その過程で、個人個人のテーマについてシェアすることで「共感・傾聴力」が、そしてその議論の過程から「創造的思考力」が生まれるのではないかと期待している。来年度より本格的に読書科の教員とこれまで WWL 新規開講科目を担当してきた教員の相互乗り入れが始まるため、この部分の取り組みを重点的に実施していきたい。

WWL コンソーシアム構築支援事業

令和元年度指定

令和3年度研究報告書 成果物(拠点校)

関西学院高等部

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155